
不沈戦艦武蔵 沈み行く戦友

加来間沖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不沈戦艦武蔵 沈み行く戦友

【Nコード】

N4394U

【作者名】

加来間沖

【あらすじ】

運命を決めたマリアナ沖海戦。その時歴史が変わった。

大和の2番艦世界最強・最大戦艦武蔵。

主人公の山雲 只一を主に本会戦を話している。

そう実史とは違う歴史を・・・。

時は流れ南の島々は蹂躪され米軍の反撃は強力になっていく。いくていく日本は、武蔵はどうなるのか？

仰角が俯角となっています。すいません。

アクセス累計PV27000!! ユニーク6000突破!あり
がとございます。

”艦首に菊の紋”作成開始。

新旧キャラクター登場。

序編（前書き）

実際の歴史とは違つよ。

序編

*この物語は日本本来の歴史とは変わっています。架空戦記としてみてください。

序：

1942年後半より、いまや無敵の皇軍南方作戦で転進（撤退）を繰り返し続け、1943年6月19日から20日マリアナ沖海戦が勃発した。これは日本軍が当時定めた絶対国防圏にアメリカ軍がマリアナ諸島に進攻、それを日本軍が迎撃したことにより本海戦は発生した。日本海軍がアメリカ軍との決戦を意図したものであり、両軍の空母同士の航空決戦となった。この海戦で、日本軍機動部隊は航空機400機を喪失。航空母艦を3隻を喪失した。

航空母艦とはその船の甲板やカタパルトなどで航空機を発艦そして、着艦するものである。

そして30ノット以上の高速を出して、戦場を駆け巡るのだが、防御力では軟弱だ。

甲板に装甲を施してなければ爆弾1発で甲板が壊れ使用が出来なくなる。

それを利用してアウトレンジ戦法を利用したものでアメリカ軍の届かない距離から、日本軍機”零式艦上戦闘機”通称零戦を爆弾を装備して航空母艦を破壊して、アメリカの空軍力を壊滅させる狙いであつた。

結果としてこれは失敗した。ではそのマリアナ沖海戦とはいかなるものだったのか？見ていくとしよう。

俺は山雲やまくも 只一ただいちだ。世界最大の船、戦艦武蔵の乗組員だ。

前哨戦前

5月16日タウイタウイ泊地

俺たち第2艦隊は水上打撃艦隊として、第3艦隊と共に第1機動部隊としてタウイタウイ泊地に

リンガ泊地より出撃した。第3艦隊は空母主力の艦隊だった。

ちなみに第1機動部隊は第3艦隊を主力とし俺たち第2艦隊をあわせ創作された訳だ。

この第1機動部隊は第3艦隊から飛行機を発進させ、敵機を蹴散らし弱った所を第2艦隊でたこ殴りにするという作戦をとるために作成された今回の海戦の主力だ。

第2艦隊武蔵の乗組員はいよいよ待ちに待った艦隊決戦が行われるという事で活気だっていた。

言ってなかったが俺は主砲砲撃士では無い。俺は機銃の弾薬を運送する係りである。

ここで第1機動部隊の第二艦隊の船たちを紹介しよう。

() の中には指揮官だ。まあわかってるだろうけど。

司令長官：栗田健男中将、参謀長：小柳富次少将 旗艦：重巡洋艦 愛宕

前衛部隊 第一戦隊（宇垣纏中将）

戦艦：大和、武蔵

第三戦隊（鈴木義尾中将）

戦艦：金剛、榛名

第三航空戦隊（大林末雄少将）

小型空母：瑞鳳、千歳、千代田

第四戦隊（栗田中将直率） 重巡：愛宕、高雄、鳥海、摩耶

第七戦隊（白石萬隆少将） 重巡：熊野、鈴谷、利根、筑摩

第二水雷戦隊（早川幹夫少将） 軽巡：能代 第三十一駆逐隊：長

波、朝霜、岸波、沖波

第三十二駆逐隊：藤波、浜波、玉波、早波

付属：島風

第一補給部隊：速吸、日栄丸、国洋丸、清洋丸、名取、夕凧、初霜、響、梅

第二補給部隊：玄洋丸、あずさ丸、雪風、卯月、満珠、干珠、三宅、第22号

まあこんな感じだ。第2補給部隊 満珠 干珠 三宅 第22号は海防艦としてギマラスに待機。

海防艦つてのは海を守るとかいてあるが、そんな戦力は無い。足が遅く(20ノット程度/(36k/h))
おまけに武装ときたら、申し訳ない程度の機銃、対潜爆雷、そしてその爆雷を除去する海掃具、高角砲が付いてるだけだ。(甲と乙などによって武装が違う)

昔は三笠などの旧式戦艦が海防艦として使われたそうだが、基準が変わったというべきだろうか。

まあ海防艦ほど名前と役割が矛盾したものは無い。余談だが昭和10年に解体されたが武蔵という海防艦があった。

第3艦隊もついでに紹介してをくと

第一機動艦隊(正規空母3、改造空母6 搭載機零戦225機、彗星艦爆99機、九九艦爆27機、天山艦攻108機、九七式艦上攻撃機、二式艦上偵察機、498機との説あり)

第三艦隊

司令長官：小沢治三郎中将、参謀長：古村啓蔵少将 旗艦：空母大鳳
本隊・甲部隊 第一航空戦隊(小沢中将直率)

空母：大鳳、翔鶴、瑞鶴

第五戦隊（橋本信太郎少将）重巡：妙高、羽黒

第十戦隊（木村進少将）軽巡：矢矧 第十駆逐隊：朝雲、（風雲）

第十七駆逐隊：磯風、浦風、

第六十一駆逐隊：初月、若月、秋月

付属：霜月

この時悲劇は始まるうとしていた、駆逐艦4隻沈没に続き未帰還機続出この時俺はいや誰もが知る由も無かった。5月27日からその1連の悲劇を見てもらおう。

前哨戦その1

5月20日 豊田副武連合艦隊指令長官は「あ号作戦」の発動を開始を発令、「あ号作戦」とは5月から6月にマリアナか西力口リン方面への侵攻が行われると判断していたが、タンカー不足によりマリアナ方面での決戦は無理があり、パラオ近海において決戦を行うこととした。そのためにグアム、サイパン、テニアンの兵力を強化して敵をパラオ方面へ誘い込み、機動部隊と基地航空隊によって撃破するという作戦を立てた。これが何度も言うが「あ号作戦」である。

そして前哨戦がはじまった。

5月27日 連合軍がビクア島におびただしい数の輸送船を引き連れて上陸を開始した。

日本軍の守備隊は歩兵1個連隊基幹の約12,000名であった。

これに対し日本軍は渾作戦すなわち、ビクア島の戦いを支持するための作戦を立案・実行したのである。

5月31日 敵中に孤立していたナウル基地を飛び立った海軍の偵察機彩雲が、メジユロ環礁に停泊するアメリカ軍の大艦隊を確認した。

6月5日 ふたたび彩雲がメジユロ環礁を偵察。アメリカ軍が出撃準備を急いでいることを確認。大本営は、アメリカ軍はマリアナ諸島を襲わずパラオ諸島に来襲するものと判断していた。というより、前述のタンカー不足により、「マリアナじゃ遠いから困る。パラオに来てほしい」と希望して後手に回ってしまった。全くなんというか、希望で敵の動きが変わるわけが無い。日本軍はいつから魔法使いになっただらうか。

6月6日 駆逐艦水無月に向かって3本の線が波状攻撃として2回むかっていた。突如水柱が立った。

「敵の潜水艦の攻撃だ」誰かが叫んだ。すでに航行不能であり、艦は傾いている。

磯部慶二 大尉艦長は死亡した。艦はみるみるうちに海のそこに沈んでいった。

6月7日、早波沈没 6月8日、風雲 6月9日、谷風 が米潜水艦の雷撃で立て続けに沈没した。

「米軍潜水艦に駆逐艦は全部いや、艦隊がけされるんじゃないだろうか」と、仲間の竹浜が冗談気味で言ったが、不安がいつそう集まっただけだった。

この竹浜がつぶやいたのは、ある任務から帰還した後だった。少し前の行をみてほしい渾作戦を書いたままだ。これに参加したのだ。

この作戦は3回行われた。では見ていこう。

第1次渾作戦

6月2日増援部隊を乗せた艦隊はミンダナオ島ダバオを出発し、ビアク島へ向かった。艦隊は以下の編成で左近允尚正少将が指揮した。

艦隊を紹介しよう。

輸送隊本隊：重巡「青葉」、軽巡「鬼怒」、駆逐艦「敷波」、

浦波」、「時雨」

輸送支援隊：敷設艦「津軽」、「巖島」、第127号輸送艦、第36号駆潜艇、第37号駆潜艇

警戒隊：重巡「妙高」、「羽黒」、駆逐艦「白露」、「五月雨」、「春雨」

間接護衛隊：戦艦「扶桑」、駆逐艦「風雲」、「朝雲」

戦艦「扶桑」だがこれは欠陥戦艦と言われる。

ぜひ写真をみてほしい艦橋が「く」の字で砲をたくさんつけすぎ否、配置が悪く3、4砲等の主砲のせいで全門済射すると構造物が壊れるそうだ。

6月3日 部隊は敵哨戒機に発見された。さらに、陸軍の偵察機からアメリカ機動部隊発見の報告があったため、部隊は作戦を中止してソロンへ向かうよう命じられた。ソロンに到着すると陸軍部隊は揚陸され、艦隊は退避した。その後、機動部隊発見は誤報と判明したが、後の祭りだった。

そして2回目

増援作戦は再開されたが、高速の駆逐艦だけによる輸送に切り替えられることとなった。旅団全部隊を一度に輸送することは不可能のため、約600人が第一陣として運ばれることになった。

8日3時 部隊は駆逐艦「敷浪」、「浦波」、「時雨」、「白露」、「五月雨」、「春雨」の6隻で再度ソロンから出撃した。12時30分、B-25による空襲を受け春雨が沈没したが、部隊はそのままビアク島へ向かった。22時頃、重巡「オーストラリア」、軽巡「ボイシ」、「フェニックス」、駆逐艦14隻からなる連合軍艦隊と遭遇した。連合軍艦隊からのレーダー射撃を受けたため退

避行動に移り、連合軍艦隊も高速発揮できる巡洋艦艦隊であったが、かろうじて離脱に成功した。しかし、日本艦隊は至近弾などで損傷し、輸送も中止された。

至近弾がなんだというのかと考える人もいるだろう。

「たかが水柱がたつだけだろう」だって？

破片効果がすさまじいのだ。手榴弾も同じで破片で殺すのだ。爆風で殺すのではない。

そして3回目ついに姉艦の「大和」そして我が艦「武蔵」が第3回目の作戦に参加した。

ほかには

攻撃部隊：重巡「妙高」、「羽黒」、軽巡「能代」、駆逐艦「沖波」、「島風」、「朝雲」

輸送部隊：重巡「青葉」、軽巡「鬼怒」、駆逐艦「満潮」、「野分」、「山雲」、敷設艦「津軽」、「巖島」、第36号駆潜艇、第127号輸送艦

補給部隊：タンカー第2永洋丸、第37号駆潜艇、第30号掃海艇
俺たち2隻は攻撃部隊に含まれる。

部隊は6月12日 指定されたソロン沖バチャン泊地に集結した。

前哨戦その1（後書き）

愛読ごうもです。

いよいよ前哨戦も中盤に差し掛かります。

前哨戦その2（前書き）

今回はなんか誤字が所々あってすいません。

前哨戦その2

第3次渾作戦

さて前回のことを読んで何故、にほん兵が少ない燃料を減らしてまで渾作戦を実行しているのか？と疑問に感じた人も要るだろう。

それはビクア島の日本兵が善戦していたからである。

ビクア島の日本兵は1万2000人の兵力しかいないのは前回述べたとおりである。

これに対し米軍がビクア島に送った兵力は3万人にのぼっている。日本側の兵力をより詳しく言うと、アメリカ軍の上陸までに日本軍がビクア島へ配備できた兵力は陸軍10400名、海軍1947名を数えたが、その過半は飛行場設営隊や海上輸送隊、開拓勤務隊など後方勤務部隊が占め、戦闘部隊は歩兵第222連隊を中心に、海軍陸戦隊を加えても4500名であった。

3万と1万2900名たらずが戦ってどうなるか？装備や戦略によほどの差が無い限り後者に勝ち目は無いだろう。

しかしその歩兵222連隊が当時の日本軍装備としてはかなりのものであった。

編成は9個歩兵中隊（うち第5、第9中隊は又ンホル島、ソロンへ配備）を中心に3個迫撃砲中隊、3個砲兵中隊、1個機関砲中隊、1個戦車中隊、1個工兵中隊他からなり、戦車中隊は九五式軽戦車9両を保有していた。長谷川高射砲中隊（野戦高射砲第49大隊第3中隊）は八八式野戦高射砲4門を有していた。野戦高射砲第49

大隊は1941年に満州で編成され、1944年にニューギニアへ進出、うち長谷川中隊がビアク島へ分派されていた。

では戦いのほうはどのようなものだったのだろうか。

5月27日、ビアク島南岸の日本軍陣地への猛烈な砲爆撃の後、アメリカ軍は南東方のボスネック海岸へ上陸した。進攻兵力は第41歩兵師団の第162歩兵連隊および第186歩兵連隊を基幹とする25000名であった。アメリカ軍はビアク支隊の長が大佐クラスであることなどから日本軍の兵力を4400名程度と過小評価していた。そして、ボスネック地区から海岸沿いに突き進んでモクメル飛行場地区を一挙に占領しようとした。

しかしビアク島の地形は日本軍に利した。海岸を見下ろす台地には至るところに頑丈な天然の洞窟があり、将兵を砲爆撃から護っていた。28日、M4中戦車を先頭に前進するアメリカ軍第162連隊第2、第3大隊に対し、日本軍は十字砲火を浴びせ、歩兵の肉薄攻撃により戦車3両を損壊させた。師団長ヒュラー少将はこの戦況に狼狽し、第6軍司令官クルーガー中将へ増援要請を送った。クルーガー中将は直ちに第163歩兵連隊の増派を指示した。

翌29日、ビアク島に取り残されていた沼田中将は自ら第一線部隊を指揮し、アメリカ軍の先頭部隊への反撃を命じた。午前8時、岩佐洋中尉の率いる九五式軽戦車9両が突入、アメリカ軍も中戦車を繰り出して戦車戦が開始された。日本軍は戦車の大半を失い、岩佐中尉も戦死したが、アメリカ軍は包囲される危機に陥り後退を余儀なくされた。アメリカ軍は海岸を見下ろす台地を制圧しない限り飛行場地区の占領は困難と判断、31日には第163歩兵連隊がボスネックに上陸し、時間をかけての迂回作戦に切り替える。

何故急に数字を半角にしたんだというツッコミはしなくていい。

まあこんな感じで善戦していたのだ。

話を前回に戻そう。

参加部隊は6月12日 指定されたソロン沖バチャン泊地に集結した。

しかし、11日マリアナ諸島にアメリカ部隊が来襲した。もはやビクア島どころではない。

そしてついにこの事態をつけ豊田長官は13日17時27分「あ号作戦決戦用意を発令し、渾作戦は中止された。陸軍部隊はそのままソロンへ残置された。

では結局この作戦は何を残したのか？簡単だ「あ号作戦」のために準備していたガソリン、重油など貴重な資源を消費してしまう。こういうことだ。戦果は何も無い。

おまけに活気だっていた同胞たちもやや指揮が低下していた。俺も同じだ。

6月15日、アメリカ軍はサイパン島へ上陸を開始した。同日、豊田長官はあ号作戦決戦発動を発令した。だが、基地航空隊はこれまでの戦闘でほぼ壊滅状態になっていた。

そう未帰還機が続出したのはこの後だ。

前哨戦その2（後書き）

次回の前哨戦は航空機をメインに書いていきます。

山雲只一と仲間たちの活躍はしばらくありません。
すみません。

前哨戦 未帰還機続出（前書き）

前回の誤字

222連体 222連隊

今回は航空戦による前哨戦です。

前哨戦 未帰還機続出

話を渾作戦中止のときに戻す。

6月11日 サイパン島

この日サイパン上空では・・・

「空襲だ！！」

さつきまでぼんやり空を眺めていた見張り員が叫んだ。

まるでごま塩を上空にばら撒いたような数の点が上空よりこちらに向かつてきたのだ。

アメリカ軍がこの日送り込んだのは1100機である。狂気の沙汰いや、それを超えている。

このサイパン島への侵攻は日本軍を驚かせた。なぜなら、日本軍側はアメリカ軍が5月27日にもつと南の西部ニューギニア、ビアク島に侵攻してきたことからパラオ諸島に攻撃が行われると予期していたからである。

ダダダダダダダ・・・と表すべきだろうか、グラマンF6Fの機銃掃射が行われた。

そして爆弾が陣地に叩きつけられた。

仲間が兵舎が吹き飛んでいく。仲間が兵舎が紅蓮の炎に包まれていった。

この日の空襲で日本航空隊は壊滅的な被害を受けた。

6月13日 戦艦8隻、巡洋艦11隻含む上陸船団を伴った艦隊がサイパン島に接近、砲弾合計18万発もの艦砲射撃が開始され

た。

質量が豊富なのがお分かりいただけだろう。

しかし山にいた軍・民間人は連合艦隊だと思っただけで喜んではなかった。

突如こちらに向かつて、空気を切り裂く音と共に砲弾が飛んできたからたまったものではない。

この攻撃で陣地は半壊した。

そして航空機は150機が破壊された。

ここで6月15日、アメリカ軍はサイパン島へ上陸を開始した。

同日、豊田長官はあ号作戦決戦発動を発令した。すでに述べたように航空基地は破壊されている。

6月18日 小沢機動部隊は索敵機を発進させた。この日俺は甲板上から航空機が空母より飛び立つのを見ていた。昼過ぎ、前衛艦隊索敵機が3群で編成された米機動部隊を発見。前衛部隊の軽空母から攻撃隊が爆音を響かせ発進した。

ところが夜間攻撃を危惧した機動部隊司令部からの命令で攻撃中止となり、攻撃隊は爆弾を捨てて着艦態勢に入った。技術未熟だった攻撃隊は満足に着艦すら出来ず、数機が事故で失われた。以前のパイロットならこんな事は無いはずだ。旗艦「愛宕」艦橋は重苦しい空気に包まれたのは当たり前だろう。

海戦前の基地航空部隊の反撃としては12日 サイパンから未明陸攻6機、昼、艦爆6機出撃するが戦果なし。6機が未帰還。

小沢が「駄目か」と司令室で呟いた。

15日 トラックから天山11機、ヤップから第一次攻撃隊零戦9機、彗星3機。第二次攻撃隊として零戦5機、銀河10機が出撃するが、戦果なし。15機未帰還。

戦果は増えない。増えているのは未帰還機だけだ。

16日 グラムから天山6機出撃するが、戦果なし。今回は全機帰還。

17日 ヤップから零戦31機、彗星19機が出撃した。

そして米護衛空母「ファンショー・ベイ」少破・揚陸艦1隻少破という戦果をあげるも、24機喪失。

護衛空母というのは正式空母ではなく商船を改造したものだ。

1週間に1隻つくるのが可能で、30機が搭載可能。大量生産が出来るためすぐに補充が出来る。

反面速度は、19ノット程度である。また、商船に飛行甲板と格納庫そして横に

鉄板を貼り付けただけのお粗末なものだ。

この日22機がグラムに着陸し、残4機は不明。

トラックから天山5機出撃し、揚陸艦1隻を撃沈するも1機未帰還。18日、ヤップから59機が出撃しタンカー2隻を少破させるも22機を失う。残り37機はグラムに着陸。19日グラムから爆戦3機出撃。

19日 小沢機動部隊は早朝の3時30分から頻繁に索敵機を発進し周囲の搜索を開始した。

世に言いつつマリアナ沖海戦の始まりである。

前哨戦 未帰還機統出（後書き）

さて次はついにマリアナ沖海戦です。
皆さんどうぞ、ご期待を！

攻撃隊発進（前書き）

ついにマリアナ沖海戦が始まった。

攻撃隊は勢いよく発進した。

そこで彼らが見たものは・・・？

攻撃隊発進

6月19日 午前7時半頃

日本空母 瑞鶴 翔鶴 大鳳 瑞鳳 千代田 千歳型の6隻の甲板上からは、

爆音が鳴り響いていた。

6時半頃 サイパン島西部にアメリカ機動部隊を発見したよの報告が入ったのだ。

7時25分に空母千歳、千代田、瑞鳳から前衛の部隊として64機

(零戦14機、爆装した零戦43機、天山7機)と、7時45分に甲部隊

空母大鳳、翔鶴、瑞鶴から128機(零戦48機、彗星53機、天山29機)の第一次、

第二次攻撃隊を発進させた。

風を切り裂くはぎれのいい音が聞こえ、銀翼を並べ敵機動部隊発見が報告された場所に
向かっていく。それを整備兵たちは帽子を振って見送った。

この時零戦パイロット栗丘中尉は敵機を蹴散らしてくれようと胸に誓い

飛び立っていった。栗丘中尉は零戦の熟練パイロットであり、これまでに18機撃墜確実、

4機不確実、2機共同撃墜の戦果を持つまたこれは太平洋戦争の戦果であり、

中国戦線では11機を撃墜したエースパイロットだ。

「瑞鳳」はリーダーで接近する飛行機群をとらえた。

7時40分 甲部隊の攻撃隊は味方の前衛部隊上空を通過。

「レーダーに感。敵の航空部隊と思われる。対空戦闘用意！」

そのころ俺は弾薬を補給する用意を終えていた。

親友とでもいうべきであろう竹浜も同じく弾薬係だ。

突如、対空砲の発射音がした。どの艦が放ったのかはわからなかった。

ただ上空に艦載機が飛んでいて、それに射撃を加えているのがわかった。

「ん？あれは見方の戦闘機じゃないのか？」

と竹浜が叫んだように言う。竹浜は視力がいいし、大体の味方の機体をいままで

見ている。

「間違えねえよ。あれは味方だ！！」

と機銃指揮そうちの人が双眼鏡を目に当て言った。

そうこの編成隊は味方の攻撃隊だった。

この誤射で味方機は墜落こそなかったが、2機の零戦が被弾した。うち1機は爆弾装備をしていたので、近くに落とし帰還していった。

後で聞いたがこの2機のうち1機は無事着艦できた。が、1機は場所が悪く

おまけに速度がまだあったためそのまま海に落ちた。

艦上戦闘機だから浮輪のように浮いているが、ひどく対空砲で損傷したため

速くもズブズブ沈みだした。

パイロットはなんとか駆逐艦に救出された。

そのころ米軍の第58任務部隊に接近していた攻撃部隊は、レーダーできれいに日本軍を観測していた。

さらに情報部隊のおかげでタウイタウイ島に集結していたが、前哨戦で述べたように

潜水艦の攻撃で小沢艦隊はまともな訓練ができず日本パイロットの技量が低下しているなどの詳しい情報が得られていた。

日本攻撃部隊が58任務部隊に近づいたその時……。

F6Fが上空から12、7ミリ機銃を発射しながら乱舞してきた。

閃光の雨が降り注がれる瞬間エースパイロットの栗丘中尉は機体を横に滑らせた。

オレンジ色の弾丸が風防から見えた。

そして敵機の数を確認した。武者ぶるいがした。味方の機動部隊と同数程度いるのが

確認出来た。いやもしかしたらそれより多いかもしれない。

栗丘はスロットルレバーを蹴飛ばし端のほうにいたF6Fに向かった。

敵は攻撃をされると悟ったらしく、旋回してかわそうとした。

しかし零戦の機動性にはまるでかなわない。

1回転 2回転と水平旋回をして3回目には栗丘は敵の後ろにピタリとついた。

そして7、7ミリ機銃と20ミリ弾を放った。このときの距離は50mをきっていたため

外れるはずがない。栗丘は数発打っただけで目標を変えた。

20ミリ弾が命中したのだ。この20ミリ弾は「小便弾」と陰口をいわれるほど

命中しないが、当たれば1発か2発で落ちる。そしていま栗丘が攻撃したF6Fは

翼がもげ徐々に火を吹き上げながら落ちていった。

この空中戦で栗岡は2機を撃墜1機を撃破したが、自機の被弾も多く母機に帰還していった。

零戦は防弾装甲を犠牲にしたため、抜群の運動性能と航続距離を得られたのだ。

つまり当たれば脆い。しかし被弾しながら帰ったのだからここが素人とは違うのだろう。

そのころ・F6Fの迎撃により攻撃隊は編隊も崩壊/壊滅していた。それでも彼らは敵の艦隊を目指していた。1機の艦上爆撃機「彗星」が「全軍突撃せよ」の命令を出した。

しかし高度下げたそこには青々とした海が広がっていた。

「ありや？」と彗星の搭乗員「雪夫」が間の抜けた声を出した。高度を上げもう少し前方のほうを見ると敵の空母がいるのが確認できた。

そこに突進していった。

後ろに味方が付いてきてくれたのがわかった。しかし次の瞬間その機が爆発したのもわかった。

母機に帰ってきた雪夫は言う。

「あんな対空砲火は初めてだ。もう辺りが火の海になっていたんだから」

一体何が起こったのだろうか？そこには米軍の恐ろしい信管が関係していた。

攻撃隊発進（後書き）

さてさて始まりましたマリアナ沖海戦。
少しずつ実史とは違ってきました。

さてさて果たして彗星の搭乗員「雪夫」がみたものは？
次回もご期待ください。

日本機動部隊最後の戦艦撃沈

彗星を駆って敵空母に迫った雪夫だが、攻撃態勢を整えたその瞬間に後ろに続いてきた彗星が爆発したのがわかった。それと同時に高射砲が真横で爆発した。おそらくもう少し右側によっていたら、海の藻屑化していただろう。グラリグラリと機が揺れる。高射砲が至近で爆発しているのだ。

彗星は2人乗りの艦上爆撃機である。この時高射砲が自分の機に飛んできたのが解った。後ろに雪夫が乗っていてそれで操縦士の丘島に「右によけるんだ」と指示した。すると後ろのほうに破片が刺さったらしく強い衝撃を感じた。幸い変わったところは無い。

そして雪夫さんの彗星は米軍の戦艦の上空についた。実際空母を狙いたかったが、これ以上重たい爆弾をつけて飛んでいると間違いなく落とされる。そう考えたための決定であったし、戦艦に爆弾を命中させるのは本望だ。

彗星は急降下を開始。機首を増したに下ろすと、敵の対空砲も平行線に飛んできた。

雪夫は250キロ爆弾を投下……爆発音が聞こえた。命中だ。命中した艦はサウスダゴダである。命中場所は……第3主砲の砲身である。その時すでにサウスダゴダは主砲を装填していた。そこに250キロ爆弾が命中し砲身を揺らしたらどうなるかわかるだろう。そう少ない確立で誘爆するのだ。

サウスダゴダは天に見放されていたらしい。轟！40センチ砲弾が爆発し、第3主砲が吹き飛んだ。そしてその破片が弾薬倉庫に注ぎ込まれた。2回目の大爆破が起こった。信管が作動したのだ。

こうなってはアメリカのダメージコントロールも手がつけられな

い。おまけに破片が飛び散ったり、爆発などでそのダメージジコントロールも死亡している。

そしてその火災は人というものに燃えうつった。「熱い助けしてくれ！！オイ！ヘンリー助けてくれ」

乗組員のジョンが壁にもたれかかっている友人のヘンリーの肩を押した。

しかしヘンリーの反応が無い。「おいヘンリー！！」そして彼はその状況がわかったとき絶叫しながら降り注いだ破片によって切り裂かれ死んでいった。ヘンリーは首から上が無かった。

そして最終的に機関室そして副砲や高射砲や機銃にまで火災が及んだ。艦長は総員退艦の命令を出すまもなく、爆風によって割れたガラスによって動脈を切られしんでいった。

命中してから20分もたたないうちに、サウスダコダは轟沈した。

雪夫たちが乗っていた彗星はすでに母艦に帰還していたため爆弾命中による大火災が起こったとしかわからなかった。

他の攻撃隊の戦果は空母2隻少破、重巡洋艦1隻大破にとどまった。

日本軍の全体の損害は90機（零戦30機、彗星41機、天山19機）もの航空機を失った。

その時日本の最新鋭空母に危機が迫っていた。

8時10分 空母大鳳が米潜水艦アルバコアの雷撃を受け、発射された6本の魚雷のうち1本が命中。

すぐに応急処置がされて損傷そのものは軽微。（前部エレベーターの陥没）であったため、当初は戦闘続行可能な状態であった。

日本軍はその後も攻撃を続けた。

9時15分 乙部隊（空母隼鷹、飛鷹、龍鳳）から第二波の第三次攻撃隊49機（零戦17機、零戦爆戦25機、天山7機）が発進するが、別働隊と誘導機が進路（目標）変更の受信を逃した上、本隊も米第58任務部隊を発見できずに引き返し、7機（零戦1機、零戦爆戦5機、天山1機）が未帰還となった。

10時15分 第四次攻撃隊50機（零戦20機、九九式艦爆27機、天山3機）が発進した。第四次攻撃隊は攻撃後にグアム島がロタ島経由でヤップ島へ向かうように指示されたが、米艦隊を発見できずにグアム島付近で戦闘機の迎撃を受け26機（零戦14機、九九式艦爆9機、天山3機）が撃墜された。

阿部大尉の彗星隊はグアム島で燃料補給を受け、翌日「隼鷹」へ帰艦するよう命じられている。

10時45分 彗星9機・零戦6機が発進したが、発進直後に彗星2機・零戦1機が故障で引き返し、さらに索敵中に彗星1機・零戦3機が行方不明となった。この隊は偶然米軍機動部隊を発見したが、F6Fの迎撃で落ち着いて狙うどころではなく、阿部は1時間ほどF6Fに追跡されてロタ島へ不時着した。

阿部の部隊に雪夫達は含まれていない。何故なら機体がズタボロになっていたからだ。飛んでいたときは良かったが機体の後部がへし曲がっているのだ。いやそんなに曲がってはいない。

大鳳の修理作業の後、10時28分に大鳳、翔鶴、瑞鶴から第五次攻撃隊18機（零戦4機、零戦爆戦10機、天山4機）が発進したものの、米第58任務部隊を発見できず、ほとんどが引き返し、一部は不時着、9機（零戦爆戦8機、天山1機）が未帰還となった。10時30分、乙部隊（隼鷹、飛鷹、龍鳳）から第六次攻撃隊15

機（零戦6機、彗星9機）が発進し、本隊8機が13時40分頃に米艦隊を発見、空母を目標に攻撃した。しかし、全く戦果を上げられず、9機（零戦4機、彗星5機）が撃墜された。

任務が終わった後の米軍パイロットは日本攻撃隊に対する感想を述べていた。「海戦当初と比べ弱くなったたな」などはまだいいが、「どうやら日本人はサルに逆戻りしたらしい。前より弱くなっている。その内軍艦の上でのんきにバナナを食いだすかもしれん」など冗談半分に言うパイロットもいた。

この時日本の空母は天に見放されていたどころか、死神に取り付かれていたらしい。

11時20分 日本機動部隊に接近した米潜水艦カヴァラが空母翔鶴に4本の魚雷を命中させた。翔鶴は致命的な損傷を受け、14時10分に沈没した。

14時32分 大鳳が突如大爆発を起こし、16時28分に沈没した。この大爆発の原因は魚雷のダメージにより気化した航空燃料が艦内に漏れており、艦載機の着艦の衝撃で気化燃料に引火したものとされる。

いずれにせよこの最新鋭空母は1本の魚雷で沈んだのだから、1発の爆弾で沈没したサウスタダコダと同じく、ドンマイな船である。

その時、俺達にあるうわさが流れていた。

「おい。聞いたか武蔵が敵に突っ込むって話？」と只一が友人の竹浜に言うと

「ああ聞いた聞いた。ということは機動部隊は勝ったのか？」と、竹浜は興奮気味に言った。

この時俺らは何も聞かされてなかった。そう空母が2隻沈んで、航空隊かなりが撃墜されていたことも。

日本機動部隊最後の戦艦撃沈（後書き）

今回は6月20日のマリアナ沖海戦を記します。

機動部隊の壊滅 小沢の決断（前書き）

6月20日の戦い。

機動部隊が壊滅した。

そこで小沢がある決断をする。果たして戦いの行方は。

機動部隊の壊滅 小沢の決断

6月20日 小沢艦隊は20日の夜明け前から活動を再開し、4時40分に索敵機を発進させた。

「どこにいるんだ機動部隊は」偵察員の吉岡は言う。丹念に探したが、ついに見つからなかった。

12時、小沢中将は旗艦を羽黒から瑞鶴に移した。

15時40分 米第58任務部隊は日本機動部隊を発見し、16時過ぎになってその戦力を確認、マーク・ミッチャー中将は日本機動部隊までの距離が米艦載機の航続可能範囲の限界付近であることや、帰還が夜になってしまうことを覚悟の上で216機（F6F戦闘機85機、SB2C急降下爆撃機51機、SBD急降下爆撃機26機、TBF雷撃機54機）の攻撃隊を出撃させた。その攻撃隊の爆音は勇ましく聞こえた。

16時15分 日本軍側も米艦隊を発見し、17時25分に甲部隊、唯一の空母瑞鶴から7機の雷撃機を発進させ、前衛の栗田中将に夜戦のため東進を命じた。

17時30分 米第58任務部隊から発進した攻撃隊が来襲した。

これに対しギューンとはぎれのいい音を出し銀翼を並べ零戦が迎撃しに向かった。

「この栗丘が落としてくれるわ」と栗丘は新米パイロット混じって迎撃に向かった。

しばらくし敵の編成部隊が見えた。

そして乱戦が始まった。栗丘は前にいた敵を追った。しかし水平ではF6Fに追いつけないどころか、後ろから敵が襲ってきた。な

んとか交わし7.7ミリ弾を目の前の敵に打ち込んだ。しかしさすが2000馬力のエンジンを搭載し、防弾装甲を備えているF6Fは落ちない。そのとき栗丘はハツとなつてレバーを蹴り飛ばした。上から敵戦闘機が襲ってきた。オレンジ色の閃光が目の前に広がった。

これはアメリカが考えた戦法である。2機がで水平で攻撃を集中させ、1機が上から12.7ミリ機銃を乱射しながら急降下し、1発でしとめるのだ。

上から狙ってきたF6Fはすこしずつ速度を落とし、その内上昇してくるだろう。

” だろう ” というのはそんなものを確認する暇が無いからだ。

栗丘は後ろから攻撃してきた機に狙いを定め、左旋回をした。零戦の防弾を犠牲にした 分軽くなっている。その抜群の機動性で敵の背後にくるりと回りこんだ。

7.7ミリ弾の赤い閃光が2丁の機銃から出て敵のコックピットに刺さりこむ。赤い液体が風防に染み付く。そこまでの栗丘はまたもレバーを蹴り飛ばした。後ろから敵が全速力でくるのを確認したのだ。そして後ろの敵に向かってまたも敵に向かっていった。栗丘は結果的にこの戦いで3機を撃墜するのだが、新米パイロットが多すぎる。攻撃部隊を攻撃する前に新米パイロットは次々撃墜されてしまう。

そして敵攻撃部隊は日本空母に襲い掛かってきた。

飛鷹にアベンチャー雷撃機(TBFのこと)が襲い掛かった。対空砲がうる。航空機の爆音にまけじと大きな音を立て、重い弾が銃口から吐き出される。そしてそれが1機のアベンチャー雷撃機が落ちた。恐らくフラップをやられたのだろう。

「左舷に魚雷です!!」と見張り員が、報告すると「面舵いっぱーい」と艦長の横井俊之 大佐が言う魚雷と並行するように艦がクルリと方向変換した。

そしてこの後も1機撃墜。魚雷を3本回避した。しかし善戦（といっても2機撃墜と魚雷4本回避だが）もここまです。

「右舷後部に魚雷です。よけません！」横井大佐は「総員何かにつかまれ」と怒鳴った。直後水柱が立った。機関科兵は全員脱出したが、連動して左舷の機械も止まって航行不能となる。同時に、注排水指揮所が有毒ガスで全滅した。

そしてまたも衝撃音が轟いた。「被害を知らせよ」と艦長が言う。といっても艦橋からは良く見える。「艦橋後部マストに命中し、断片で航海長を含む見張所・飛行指揮所の艦橋要員に多数の死傷者が出た模様です」なんとということだ。

そして爆弾がまたも命中。艦橋が完膚なきまでに破壊された。そして魚雷が右に2本命中。もはや助かるはずがない。

しかし乗組員は最後まで望みを捨てなかつた。消化ホースを振りかざし、必死に排水作業をつづけた。が、「だめだ爆発するぞ」誰かが叫んだ。轟！！その爆発はいったい何が爆発したのか解らない。艦長は爆弾の命中により死亡していた。乗組員は全員船と共に死んだ。

結果として迎撃した零戦は21機が撃墜され 空母 瑞鶴 隼鷹 千代田も損傷してしまった。米攻撃隊は23機が撃墜され、帰還した機のうちの70余機が着艦に失敗した。

小沢中将は残存空母を率いて夜戦のため東進を続けたが、小型艦艇では燃料不足が懸念されはじめた。

19時40分頃 連合艦隊長官豊田副武大将から離脱が命じられ、21日 小沢中将は「あ号作戦」を中止し撤退を命じられた。「しかし前線の戦艦部隊はどうなるのです」小沢が食い下がった。

「きまつておろう撤退だ」豊田大将は言う。そこで神大佐から豊

田にこのような文が届いていた。

「第1機動部隊ヲ 突入サセルベキ 敵ノ艦隊ヲ撃滅デキル可能性ハ 極メテ 大ナリ」

根拠はなんなんだろうか？豊田は急に疑問にとらわれた。

そしてその後10分に及ぶ3人のやり取りが続いた。

そして今空母部隊は撤退している。しかし戦艦部隊は同行していない。どういうことか？

その時サイパン島に向かい日本艦隊が竊進していた。俺、只一は胸をドキドキさせながら、友人の竹浜。そして機銃員の人たちを心をおどろかせていた。

「大和ホテル 武蔵旅館などとして呼ばれ、このままくさらせてよいのでしょうか？」この言葉は神大佐が言ったものだ。

そして豊田は第2艦隊の突入のみを認めた。小型艦艇は撤退する空母から燃料を譲り受けたものだ。

この補給中が1番危ないのだ。しかし幸いにも襲われることは無かった。

前衛艦隊は米機動部隊と水上戦闘を行うべく東進していた。

機動部隊の壊滅 小沢の決断（後書き）

さて無理があつたかもしれませんが、神大佐が唱えた艦隊決戦により、第2艦隊が突入します。果たして戦いの行き先がはどうなるのか。

今回もごらん頂ありがとうございます。

次回 第2艦隊突入ス です。

ご期待ください。

第2艦隊突入ス（前書き）

第2艦隊がマリアナ沖の敵艦隊を撃退せんと、攻めかかる。

リンガ泊地に機動部隊が向かうことをアメリカ潜水艦が確認したが、

敵水上戦闘部隊がないことにきづく。

サイパンに米軍が上陸。

「レーダーに感。日本艦隊です」アメリカのレーダー係がそういった。

第2艦隊突入ス

一三〇〇「おい只一聞いたか」と竹浜が走りよってきた。「ああ、俺達水上部隊だけでの突入だろ」と言うと「俺達弾薬補給係もワクワクするよな」と言った。

しかし、「機動部隊が壊滅するとは思わなかった」「ああ、もう今回は勝ったなと思ったのに。いや違うこれからだ」と竹浜は言う。物事を明るく考えるやつは戦場で生き残れる率が高いらしい。

ちなみに現在、敵の部隊を探すべく、我が戦艦武蔵、姉である戦艦大和から3機ずつ零式偵察機がカタパルトにより上空に舞い上げられ、敵を探しに言ったのは実に30分前のことだ。

(そろそろ敵艦隊を見つけられたらだろうか)・・・「敵潜水艦を発見。右方向2000メートルだ」艦内が一気にザワついた。誰が叫んでこの報告をしたのかなど知ったことでは無い。

「第1副砲射撃用意!!」甲板上の兵士は副砲から離れ始めた。その内の2人は俺と竹浜だ。重巡洋艦の主砲を副砲として使っているのだから大和級戦艦の攻撃力が強力なのか解るだろう。ちなみにこの副砲装甲が30ミリほどしかなく、主砲弾薬庫とつながっているため、大和級戦艦の弱点といわれている。

話を元に戻す。副砲が右30度にその3本の砲身を向けた。「1番副砲撃ち方始め!!」轟!!

ちなみに発射されるまでのこの間わずか30秒しかたつてない。水中速度は8ノット程度である。1分間の距離は・・・えっ!と・・・125メートルかな。言い忘れていたが、駆逐艦が遠方にいたため武蔵が副砲を放ったわけで、駆逐艦に機雷が無くなっていた訳ではない。

さてさて3本の砲身から15、5センチも直径がある爆発する鉄の弾が数百キロの速度で海に飛び入り、壮大な水柱を立てた。そし

て水柱崩壊後、なにかが浮上してきた。さきほどの潜水艦だ。

敵の前にわざわざ浮上してくる潜水艦のりは居ないだろう。おそらくよほどの損害を被ったのだろう。そして駆けつけてきた駆逐艦が12、7センチ砲を発砲。潜水艦はズブズブと沈みだした。

この時重油のまくが残ったが、これは沈んでいった我が同胞のことを思い出す。

しばらくして偵察機が帰ってきた。クレーンで吊り上げ格納庫に収納するという作業をてきぱきこなした。そして方角そのまま20ノットの速度で全艦進んでいった。

一四〇〇 「こちらリング泊地前の偵察部隊です。ジャップの艦隊を発見。空母を発見するも、水上打撃部隊がいません」と潜水艦からスプールアンズ率いる第58任務部隊が傍受していた。

「さつきジャップの偵察機をレーダーで確認したんだよな。どうなった」「迎撃させませたが上手に逃げられたようです」と参謀長のカール・ムーア大佐が言った。「やれやれ逃げ足だけは速いのだな」

と言っていると扉を叩く音がした。「入りたまえ」とスプールアンズ大将が言った。すると、偵察兵の姿があった。「なんの用だ」「日本艦隊をレーダーにより補足しました」「詳しく話を聞こう」「1分で話はすんだ。いかなるかいわだったのか？」

一四三二 大和の艦橋の上の則儀鏡より敵艦見ゆると報告があった。敵との距離四〇〇〇メートルです。大和の艦長松田千秋は水雷部隊を有効に使おうと考えた。

第2水雷戦隊突入せよとの命令が出された。

軽巡の能代はこの日を待っていたとばかりに、第三十一駆逐隊の長波、朝霜、岸波、沖波 第三十二駆逐隊の藤波、浜波、玉波 これに早波がいたが既述しているとおり6月9日に沈没した。

そして付属として島風を率いて突入していった。
果たして戦況はどうなるのか？

一四三八 驚いたのはは米軍のほうだった。まさか・・という感じだっただろう。

しかし今はそれどころではない。

第7機動群 W・A・リー中将率いる

戦艦 ワシントン アイオワ ニュージャーシー インディア

ナ アラバマ ノース・カロライナ

重巡 ニューオーリンズ、ミネアポリス、サンフランシスコ、

ウィッチタ そして駆逐艦14との陣容でおまけに航空支援を要請できる艦隊の一部の駆逐艦4隻とミネアポリス、サンフランシスコ計6隻と遭遇したのだ。他の艦はどうしたのだろうか？

不思議に思いながらも能代は駆逐艦7隻を率いて突入していった。「距離2万！！」おそらくこういつた瞬間に魚雷を発射したのだろうが、その場に居なかつたので知る由も無い。アメリカ駆逐艦部隊も水雷戦をしようとしたのか、駆逐艦が勇猛にも突入してきた。しかし日本艦隊はくると反転した。そうするとサンフランシスコに水柱が3本立った。また突入してきた駆逐艦4隻にも魚雷が命中即座に2隻が轟沈した。また2隻も浸水が止まらぬらしくもうじき沈むだろう。すると島風の後ろに水柱が立った。

そう。ミネアポリスが発砲したのだ。さすが、レーダー射撃、正確だ。いやいや感心してる場合ではない。日本駆逐艦はあわてて主砲を発射するが悲しく水柱を立てただけだった。そうしてる間に、こんどは浜風が至近弾を受けた。衝撃で艦が大きく揺さぶられ3人ほど海に飲み込まれていった。

しかしミネアポリスだけで戦局は打開できなかった。やがて2回目魚雷射撃が始まった。ちょうどこの時サンフランシスコが巨大な爆発音を立て艦を真っ二つにへし折られたかのように沈んでいっ

た。

網型に発射された日本軍の何十本の魚雷はよけれなかった。実際100本ほど艦全体で撃てたのだが、まだ主力艦と戦ってるわけではないということでも温存された。

ともかくミネアポリスの右側が大きく持ち上げられた・・・かと思ったら水柱が立ち艦内ではいたるところに火柱が立った。そして数分で赤々とした炎と共に沈んでいった。この際の時間数分程度まさに轟沈だ。

無事アメリカ艦隊を蹴散らし今回ほとんど被害は無かったが、強大な敵が迫ってきていた。

第2艦隊突入ス（後書き）

皆さん暑いですね。もう蒸されそうです。

しかし第2艦隊の水雷屋がやってくれましたよ。

強大な敵とは？ 次回 戦艦部隊咆哮スです。

戦艦部隊咆哮ス(前書き)

第2艦隊はいきなり巡洋艦2隻駆逐艦4隻を撃沈する戦果を収めた。

しかし空には爆音が鳴り響く。しかしそれはすべての始まりに過ぎなかった。果たして第2艦隊の運命は？

戦艦部隊咆哮ス

今回マリアナに突入を開始した陣容・指揮官が分からない人のために以下に記す。

沈没艦及び撤退した機動部隊を除くが案の定、損傷艦は同行しているため表記する。

司令長官 栗田健男中将 参謀長 小柳富次少将 旗艦 重巡洋艦愛宕

前衛部隊 第一戦隊（宇垣纏中将）

戦艦 大和、武蔵

第四戦隊（栗田中将直率） 重巡 愛宕 高雄 鳥海 摩耶

第七戦隊（白石萬隆少将） 重巡 熊野 鈴谷 利根 筑摩

第二水雷戦隊（早川幹夫少将）

軽巡 能代 第三十一駆逐隊 長波 朝霜 岸波 沖波

第三十二駆逐隊 藤波 浜波 玉波

付属 島風

第一補給部隊 速吸 日栄丸 国洋丸 清洋丸 名取 夕凧

初霜 響 柁

第二補給部隊 あずさ丸 雪風 卯月

アメリカ力第58任務部隊はこの時刻潜水艦より水上打撃部隊がリング泊地に入港してくるのを発見するも、大和型を発見できないとの情報を得ていた。金剛型は結局空母のエスコートとして必要なため引き返ったのだ。

そのため艦の種類まで情報を得ていた。

災害は忘れたころにやってくる。いきなりどうしたと思った人もいるだろう。いやいや俺も敵の巡洋艦2隻と駆逐艦4隻を撃沈した直後に向こうの空から爆音が聞こえてくるとは思わなかった。ちなみにこの日は晴れだった。

プロペラが回転し翼が風を切り裂く音が第2艦隊に近ずいてきた。「対空戦闘準備！艦上空に後50秒で到達する模様」俺は仕事である弾薬を運び始めた。いや手で持って運んでいるわけではない。手押し車・・・？いやなんか違う。まあ手で運んでいるわけではない事は分かってくれ（どうでもいい）。そのとき「1番～3番主砲3式弾発射用意」という声が聞こえた。すると40秒後・・・「タンタインターッタター」（？）みたいな

警報音楽が鳴った。剥き出しの機銃座や高射砲（日本海軍は高角砲）や甲板上の兵士がいつきに甲板の下に退避を開始した。もちろん俺と竹浜も。

1回目の警告音が止んだ、そして2回目になり始めたところで同時に俺たちは退避完了。そして止んだ。すると・・・度肝を抜かれるような轟音がした。それは
いまでも耳にこびりついている。艦が揺れる。甲板の下でおそらく5度は揺れただろうというような感じだから、艦橋はもつと揺れたであろう。

俺は見えないが武蔵の15メートル測距儀（これは日本の光学技術を駆使したもので距離3万でも誤差は300メートル以内という高性能のものだった）の人に聞いたが

「しゃがんで上のほうを見ていたら、煙が甲板上からモワツと出てくるんだ。煙が消えて見ると空が燃えてるんだ。俺は4機くらい落ちていく航空機を見たね」と

言う。最もこの人は熟練者で主砲の発射は訓練で何回も見てきている人だった。ちなみにそこは機銃にも耐えられるように作られていた。

すぐさま俺たちは甲板上に向かった。高角砲が咆哮し、機銃が弾薬を吐く。襲ってきたのは以外に少ない100機程度だった。200機位はくるかと思っていた。

突如グラマン戦闘機が機銃掃射をしてきた。12.7ミリ機銃が火を噴く。俺たちの前にあった機銃座シールドつきを狙いたやすく貫通させてしまった。敵はどうやら俺たちが狙いらしく、

他の艦には見向きもしない。しかしここである事に気がついた戦闘機がほとんどなのだ。見渡す限りグラマンである。遠方に偵察機が見えた……

これはどういうことだろうと思っていたが答えはすぐには分からなかった。

「おい!!弾をくれ」「あそこだ只一運んで来い」竹浜の言うとおり運んでいった。階段があるから今回は担いでいかねばならない。米俵を担ぐ訓練をしているので

この程度なんともない……。突如弾薬補給を頼んだ男が「早くこつちd……」だ”を言う前にその男はズタばらに引き裂かれた。これが戦場なんだよなと思いつ

残っていた兵士に弾を渡し階段を下りていった。「甚おい!!しつかりするんだ」と腹に風穴があいている男を揺さぶっていた。

20分はたったただろうか。「距離3万5000メートルに敵艦を発見!!」と測距儀から報告が入った。すると米軍の航空機は帰っていった。そう戦艦が来るまでに足止めをしていたのだ。

この部隊はなんと、第7機動群 W・A・リー中将率いる部隊だ。つまりさつき沈めた米軍艦隊の本体だ。

戦艦 ワシントン ノース・カロライナ アイオワ インディアナの4隻

重巡 ニューオーリンズと駆逐艦8隻

俺達はもう用済みなので艦内に逃げる。主砲の爆風の餌食になるのはごめんだ。

ここからは証言を元に再現しよう。

まず敵は駆逐艦を前に出した。俺達は水雷戦隊が迎え撃った。しかし、アイオワとワシントンが咆哮した。駆逐艦の薄いところの装甲は7ミリであり、いったいこれで何が防げるのか疑問である。

ついでに主砲のメカニズムを詳しく説明しよう。飛ばしてくれても話しに関係は無いぞ。

直径約3mの円筒形の方位盤室の中央には、1辺約60cmの方位盤があり、各壁面には双眼鏡と示針版とハンドルが取り付けられているんだ。

この4つの壁面の前には、方位盤射手の他、方位盤室の指揮官の砲術長回手（敵艦との左右照準を合わせる担当）、動揺手（自艦の左右動揺を修正する担当）が配置につき。

それぞれが分担して操作をするわけだが、最終的には、方位盤射手が望遠鏡を覗きながら、ハンドルを操作し、望遠鏡の中の敵艦の甲板と艦橋の中心軸、つまり敵艦の中心の位置に、望遠鏡の中心のデザインの基線をあわせて照準を行っていた。

この操作は、艦橋の下の発令所という部署にある、射撃盤という装置で「計算は、人間の操作で歯車を動かしてデータを処理された」で動かされ各主砲塔に伝えられました。この操作には、200人ほどの人員が必要だったとか。

各主砲塔では、送られてきた情報は表示盤の針の位置によって示され。これを元針という。たとえば、発射仰角40度ならば、その位置に針が示される。すると、兵員がすみやかにハンドルを操作して砲塔側の針（これを追針という。）を元針に合わせて、射撃準備をする。

元針の位置と、追針の位置がピッタリとなっていないと、いくら方位盤射手が引き金を引いても、砲弾は発射されない仕組みらしい。

まあそんな専門的知識を知っていようがどうでもいい。話を元に戻すぞ。

アイオワが放った砲弾は軽巡能代に1発ワシントンには 岸波に2発 沖波に1発を命中させた。岸波は・・・沈んだというか消滅したというほうがあっているかもしれないといわれた。もちろん生存者0人だ。沖波は艦首をもぎ取られたようになり沈んでいった。能代はマストが吹き飛ばされた。

なんとか他の艦は回避行動をとって交わしている。

「主砲射撃開始！！」大和、武蔵以下主力艦がアイオワとワシントンに狙いをつけた。「打ち方はじめ！」重さ1,5トンもある砲弾は大和、武蔵計12発が発砲された。まず1基2門が放って、その次1発打つを繰り返し命中率を上げるのだ。1分後「遠弾1000メートル！！俯角修正1度下げ」発射。「近弾600メートル」そのときアイオワが大和に狙いをつけ発砲。100メートル前方に着弾。

「いやに的確な射撃だな」艦長は唸った。

そのころ水雷戦隊は能代が先頭を切り反撃を開始。全艦が敵駆逐艦めがけ魚雷を発射した。

計50を超える魚雷が発射された。距離は1800メートル日本が誇る酸素魚雷は2万メートルもの距離を持つ。

アメリカ駆逐艦も魚雷を発射。そのまま並行して進もうとしたので2の舞をしてしまった。水柱が次々立った。日本艦隊はそのまま反転したのである。2度も同じ失敗をしてしまったアメリカ駆逐艦隊は、5隻が沈没した。日本水雷戦隊の日々の訓練を一生懸命してきた猛者ぞろいが万歳と叫んだ。

ここでアメリカ重巡洋艦ニューオーリンズが射撃を加えてきた。おまけにここでなんとインディアナの高射砲が火を吹いた。さらにノース・カロライナも射撃を開始。

長波が直撃弾を受けみるみる沈んでいった。さらに他の駆逐艦軍が至近弾を多数受けた。

武蔵がここでアイオワ戦艦を爽又した。爽又とはその間の左右に至近に命中したことだ。

つまりアイオワの位置を捉えたのだ。そして第七戦隊つまり重巡 熊野 鈴谷 利根 筑摩は敵重巡に向けもう突進した。

重巡洋艦は水雷戦隊を援護しようと突き進む。戦艦大和、武蔵は4隻の戦艦と戦闘中その時何かが空からやってきた。

戦艦部隊咆哮ス（後書き）

さてついに第2艦隊が望みに望んだ艦隊決戦です。
金剛、榛名は残念ながら引き返してしまいました。

さていったいこの先どうなるのか？

今回は「サイパン島の戦い」です。

毎回呼んでくれる方々ありがとうございました。

サイパン島の戦い（前書き）

そのころサイパンでは何が起こっていたのか？
果たして第2艦隊の運命は？戦況はいかに？

サイパン島の戦い

一四三〇 サイパン島 すでに15日に上陸していた。戦いの行く先は既に決していた。翌16日、第27歩兵師団の部隊が上陸しアスリート飛行場に向け進撃した。しかし飛行場までの間に広がるサトウキビ畑中に日本兵が潜んでおり、そこから奇襲攻撃が加えられた。そのため上陸米軍は、火炎放射器で畑を焼き払い、日本兵が出てきた所を攻撃する作戦に出た。作戦は成功し、第27歩兵師団は夜半までに飛行場に到達した。16日の夜から17日にかけて、日本軍は戦車第9連隊(44輜)含む約8000名が総攻撃を開始したが、1時間に野戦砲800発、機銃1万発という米軍の圧倒的火力によりほぼ全滅した。18日、斎藤中将は飛行場を完全に放棄。そのため南部に残された日本軍は完全に孤立した。

上陸3日間の攻勢の失敗に加え、水際撃滅作戦の為に日本軍の陣地は海岸付近に集中しており、敵の艦砲射撃や空襲のよいたった。このため守備隊は早々に壊滅し、水際作戦を指示した大本営の晴気誠陸軍参謀は責任を感じ、サイパンへの派遣を志願したが却下された。

そして19日 20日 マリアナ沖海戦で機動部隊が壊滅した。

そして21日すなわち今日だ。まあ大体こんな感じだ。

そして今日サイパン島の日本守備兵はある計画を立てていた。

同時刻 マリアナ沖 爆音が鳴り響いていた。この音はそう聞き覚えがある。栄エンジンの音だ。この時30機ばかりの零戦42型が低空で突入してきた。42型Ⅱ(栄32型1330馬力 速度580キロ 両翼に7.7ミリ機銃が2丁とプロペラの真ん中に3

0ミリ機銃が一丁こめられている（翼につけられている20ミリ機銃だと翼がしなまって真つ直ぐ飛ばないのだ。プロペラの真ん中に付けたらよくなつたわけだ。

その爆音を鳴り響かせ飛んできた42型は真つ先にノース・カロライナに直進していった。「くそ、レーダーに映らなかつたのは低空で飛んできたからか」「足止め役できたグラマンがちょうど帰つたところだから時間帯が悪い」「迎撃されなかつたのか」それぞれの米軍の艦長は口々にそんなことを言った。

日本兵が万歳と叫んだのは言うまでも無い。ノース・カロライナは対空砲を撃つたが低い、ほとんど当たらなかつたがそれでも8機を落とし、2機は誤操作で海に落ちた。

この時戦艦めがけて突つ込んできたのはなんと栗丘だ。「この30ミリ機銃であそこを破壊すればいいんだろ」と言つて機首をグイグイ上げていった。零戦42型は最大速度の580キロで直進していった。彼が狙つたのは戦艦の頭脳である主砲射撃管制機である。

「食らえ」ダダダッダダッと重い銃弾を艦橋の真上にぶつ放した。栗丘が放つた弾により主砲射撃管制指揮装置が破壊された。ノース・カロライナはこれにより戦闘力を大幅に喪失した。

他の42型の内8機はインディアナの弦側から突つ込んできた1機が弦側にぶつかりそうになつたあわてて機首を上げた。素人の半田というパイロットだ。運は強いらしい。インディアナの速度は27ノット。半田は弦側から30ミリ機銃を放つた。高射砲に命中。次の瞬間半田の機体は激しく振動し上空にもちあげられた。インディアナの艦橋が激しく燃える。他のパイロットも艦橋などを破壊した後、この光景を見るなり、さつさと帰ってしまった。艦橋付近の高射砲から弾薬庫を通じて横の高射砲まで誘爆した。30ミリ機銃は50発しかないのだ。艦橋付近の爆発した高射砲から弾薬庫を通じて横の高射砲まで誘爆した。インディアナに日本重巡洋艦の熊野、鈴谷、利根、筑摩が襲う36ノットの最大戦速で突き進んだ。最

大戦速とはボイラーを最大まで炊くのだそうすると1か2ノット最大速度より速くなるのだ。

魚雷を発射した。インディアナは両舷に大きな大穴をあけた。火災で燃え盛る艦が大きく揺れた。速力はさほど低下していないが火災鎮火におわれ砲戦どころでない。そこで魚雷が次々直撃した。(アメリカ駆逐艦は弾幕を貼ってなんとか後方に逃そうとしたらしいが無駄だった)魚雷によってあけられた穴にさらに魚雷が入り深く穴を開けていった。至る所が浸水したインディアナは両舷に穴が開いたため、轟沈どころでは済まされないさまになった。そう破片が四方八方に散らばった。

そして戦艦同士の砲戦アイオワに残り機が襲い掛かったが目立った戦果はなかった。しかしそこに武蔵が三基三門計9発の46センチ主砲が降ってきた。しようしたのは榴弾だったが、このときの距離3万メートルである。2発命中、場所は艦尾と艦首の喫水線下である。アイオワはこれで先端に穴が生じたため動く海水が流れ込むという大きな問題を引き起こした。武蔵は榴弾が命中したと見ると鉄鋼弾に変更した。そして45秒間後「装填完了しました」そして9門の主砲から46センチ砲弾が吐き出された。

アイオワ艦内 「敵戦艦発砲しました!!」と偵察係が言う。艦長は「まだ行動は出来ないのか」というが、それはもう分かっている。「糞ジャップのサルどもが!!」と呪詛を吐き捨てた。「総員退艦だ!!」総員退艦命令が出されるとアイオワの甲板上からいっせいに船員が飛び降りた。カッターを下ろしたりしていたらその間に砲弾が着てしまう。そしてついにその時が来た、甲高い音から急に鈍く空気を切り裂く音がした。それは巨人が思いつきりアイオワ級戦艦を殴りつけたようだった。そしていらるところから火の手が上がった。さらに至近弾であった弾が魚雷のように艦底に突っ込んでいった。急速に燃え上がり破片をばら撒きながらやがて沈んでい

った。

一方ワシントンは大和の砲弾を受けていたが、当たらず逆に大和の主砲に1発の命中弾と至近弾を出しているが被害らしき被害は無い。「化け物が！」とワシントンの艦長が大和を睨み付けた目から光線が出るならいまごろ大和は轟沈しているであろう。

その時水雷戦隊は最後の力を振り絞りノース・カロライナに最後の魚雷を発射した。肉薄してきた駆逐艦に主砲が当たらず（主砲射撃システムが破壊されたため）むざむざ受けてしまった。

4本の水柱がマストを超えた。やがてアイオワの後を追うごとく沈んでいった。

この時アメリカ戦艦部隊に退却命令が出された。そう被害が多すぎたのだ。ワシントンは大和に有効打が与えられなかったからさぞ悔しがっただろう。

駆逐艦隊が弾幕を貼りつつ逃亡して行った。

これを見て日本軍は米軍の艦載機による攻撃が来ると思ったらしく栗田艦長は「これより本海域を撤退するといった」サイパン島を見捨てるのか？まだいけません。など言ったが栗田は聞こうとしない。小型艦艇だけでなく大型間も燃料がなくなってきたといった。補給艦も弾薬が少々積んである状態であるため撤退するのだ。と栗田は言った。これにより第2艦隊はあっけなく反転してしまった。しかし理解可能と答えた兵士も少なくなかったし、なにより戦艦を3隻撃沈とはいかにもうれしい戦果だ。

帰りに空襲があつたが小規模なもので爆弾は命中せず逆に3機を撃墜 艦全体では20機を記録した。

そして第2艦隊は
リンガ泊地に戻った。その時潜水艦にあったが魚雷が無いのだろう
逃げていく、駆逐艦が機雷を投下するも逃げられたらしい。

そのころサイパン島 「なんだこの通路は？」米軍1個分隊が細
長い通路を発見した「ジャップがいるかもしれん。仲間に支援を要
請しろ。そして1個小隊が通路に入っていた。日本兵が潜んでい
たのは外である。手榴弾を日本兵が投げた。するとあわてて米軍が
穴からでてくる、そこを機関銃・小銃で撃ちまくった。この日だけ
で4回ものこの戦法を成功させ200名以上を死亡させた。

弾薬がなくなり米軍がその通路に入るとあらかじめ落とせるよう
に配置していた岩を転がし入り口をつぶした。

22日昼 この戦法を使用する通路が無くなりこの作戦は中止にな
ったが、なんとこれまでに1000名近くの海兵隊に損害を与えて
いた。

米軍が残した武器なども使用可能なものはすべてつぶった。しか
しもうサイパンに連合艦隊はこない。

大本営発表 我が聯合艦隊の一部は六月十九日「マリアナ」諸島
西方海面に於て三群よりなる敵機動部隊を捕捉、先制攻撃を行ひ、
爾後戦闘は二十一日及び其の間敵航空母艦五隻、戦艦五隻以上を撃
沈破、敵機二〇〇機以上を撃墜せる大戦果を収めるも、敵の火力激
しく決定的打撃には至らず

我方航空母艦一隻、附属油槽船二隻及び飛行機六〇機を失へり

誇張しすぎだろう。基地に行つてこの発表を聞いたとき正直そう

思った。しかし決定的打撃にならなかったのは本当だ。リンガ泊地の海岸には黒い海が広がっていた。

サイパン島の戦い（後書き）

1日二本も書くのは正直疲れました。さてマリアナ沖海戦ついに終了。サイパン島も放棄。

戦いは一時期なくなりませんが新兵器が・・・

また零戦42型と搭載された栄32型は存在しません。

毎回ご愛読及び、評価をありがとうございます。

零戦42型(前書き)

第2艦隊を援護した零戦42型はどこからきたのか？
俺は疑問に思っていた。

零戦42型

1 時期戦いが終了し俺達はリンガ泊地で訓練している。ここは石油などが採取でき訓練にはもってこいの場所だ。欠点は暑く、ソロモンから離れすぎているため、対処するのに時間がかかるのだ。

しかし、ここで取れる石油のオクタン数値はもちろん1000超えだ。オクタン価というのは石油の純度を示しており、大体1000もあればいいのである。今皆さんが親しんで使っているレギュラーガソリンは1000を越えており、零戦はもちろん他の戦闘機に入れてもそのまま動くのだ。もちろんこの黒々とした輝きを見せ付ける浮かべる城もだ

俺はこの時期謎に思ってたことが1つあった。あの零戦はどこから来たのか(この時42型というのは知らない)仲間に聞いても分からないといわれてきた。

果たしてどこから来たのか? 実はこの零戦はマリアナ沖海戦に間に合わせようと猛スピードで開発に取り組んでいた。以下の要目が必要とされた。

- 22型と同じ航続距離を持つこと
 - 速度は 570k/hを上回ること
 - 32型と同等の格闘能力を持つこと
 - 巡航速度を従来より早くすること
 - 30ミリ機銃を搭載すること
- 以上の5つは必至とする。

まあこんな感じだ。まず22型と同等の航続距離32型と同等の格闘戦の能力は可能とされた。しかし30ミリ機銃については翼がしなり命中率が悪くなることが判明した。さらに速度570キロ以

上というのは一番高速の32型の542キロでありそれを28以上あげるといふのだ。巡航速度は指定されてないがやはりあげなければならぬ。ここでまず使用目的をたずねたところ、1発当たれば敵を撃墜でき、なおかつ操縦にしやすいさを高めれば練度が低いパイロットでも十分な戦果が発揮できるのでないかと考えられた。つまり素人が確実に1機撃墜し、熟練者が2機落とせば敵の損害のほうを上回るという考えである。

ようするに、米軍と同じく1撃離脱戦法が可能な機体がもめられた訳だ。熟練者はその後にいままで身に着けてきた32型同等の格闘戦で着実に敵機を落として行くというわけだ。

簡単に言えば30ミリを敵に当たりやすくし、2機〜3機程度おとせる弾薬数を得ればいいということだ。ここで使用されたのが急遽30ミリ機関銃の開発に乗り出した。完成したのが4式30ミリ機関銃でありスペックは次のとおりだ。 初速 748/s 発射速度 380発/分 ガス圧縮を利用 携行弾数65発 であり、携行弾数65発は1番努力した場所である。装備場所は命中力がよくなるようにプロペラの先端につけられた。アメリカのエアコブラという戦闘機もこんな感じだ。

エンジンは別のエンジンを栄エンジンをモデルにして作成された。そして栄エンジンの直径が3,2センチも増え、+約2キロで1330馬力のエンジンが開発されたが、結局栄エンジンと同等とされ31型とつけられ、重量を300グラム減らし 直径を1,8センチに抑えたエンジンに改良されこれが栄エンジン32型となった。

22型の機体の翼端の折りたたみをなくし、長さを少し短くし（先端はちゃんと楕円形）そこに7,7ミリ機銃（携行弾数700発）を一丁づつ 翼の付け根に近いところに装備し、栄エンジン32型がはいるようにし、なおかつ視界が変わらないように高さを若干変更したりして作られたのが零戦42型なのである。速度は580キロ 巡航速度も227キロを記録した。爆弾は今回搭載できず、そ

のかわり蝶型フラップがつけられた。これにより零戦の機動性はますます上昇した。ここまでくると別の機体のようだが、そのままの名称で配備された。が、マリアナ沖海戦には間に合わなかった。しようがなく硫黄島に飛行場を築いていたのでそこで湾岸警備として送られた。しかしこれが良い方向に動いた。20日機動部隊が壊滅すると残ったエース部隊は硫黄島に向かうように指示された。そしてそこであったのが42型である。やや不眠のため疲れが出ていた航空隊はこれに乗り前回とは全く違う能力に驚き士気を向上させ、しばらくしサイパン沖に向かっていった。そしてあの海戦で会ったというわけだ。

さらに驚くべきことにそのまま硫黄島に引き返したのだ。驚くべき航続距離だ。実は機体を軽量化せずに蝶型フラップのおかげで機動性が得れた零戦42型は燃料タンクがやや大きくなっていったのだ。飛行機の進化はすごいものだ。

リング泊地で訓練していた俺達は30日その零戦42型を近くで見ることになる。なんと機動部隊用に配備されてきたのだ。いや驚きだ。また30ミリを携行弾数が200発ある20ミリ機銃にかえられた甲型もあった。42型36機 42型甲12機 またそれより前のタイプも送られてきた。

しかしこの時国内ではアルミが不足し始めていた。そのことは俺達は知らなかった。

零戦42型（後書き）

零戦42型の完成までを一応書いて見ました。
ご愛読感謝しています。

サイパン玉砕（前書き）

俺達が訓練しているときサイパンでは絶望的な戦いが記されていた。

サイパン玉砕

俺たちがリンガ泊地で訓練しているときサイパン島では守備隊が絶望的な戦闘を続行していた。

巧みに陣地を構築し善戦していたが米軍の圧倒的な火力によりじりじり兵力を消耗させていった。

24日 大本営はマリアナ沖海戦の敗北の為サイパン島の放棄を決定した。この時点で斎藤の指揮する第43師団が4000名、残りは2000名程度まで減少していた。

重装備は戦車が僅かに3両で野砲は全損。食料、水、医薬品が欠乏し、負傷者は自決する他なかった。それでも日本軍は断固として抵抗を続けた為、

20日以来米軍の進撃は遅々として進まず、第27師団長ラルフ・スミス少将が更迭された。

25日 日本軍のタンポツヨ山の防衛線を壊滅させるためアメリカ軍が猛烈な火力を持ち攻撃し始めた。この頃になるとアスリート飛行場が運用可能になり、偵察機や爆撃機の使用が開始された。空の援護を得た米軍はそのまま防衛線を突破。島の7割を占領するにいたった。

「瓦礫だらけですよ。さすがにサルでもここにはいないでしょう」
アーサー二等兵が言った。サルというのは日本兵のことだ。「猿はジャングルにいるんだ。こんな所に家を建てたのが間違いだったのさ」と仲間が口々に言う。「・・・今物音しなかったか?」「おいおいアーサー冗談はよしてくれ」でもあそこら辺から。アーサーが指を刺したのは瓦礫の山だった。仲間たちはアーサーの心配を取り除こうとでもしたのかそのトタンに近づいて「おい!猿はいるか?」

と叫んだ。その時トタンが目の前でひっくり返しそこから2人の日本兵が銃剣を頼りにぶつかってきた。「グハツ・・・」近くにいたハマンド軍曹は倒れた。

仲間があわてて乱射するも当たらない。次々に仲間を突き刺していく。アーサーは怖くなって逃げ出した。直後背中を熱いものがエグった。

このように日本兵は瓦礫のしたにも隠れゲリラを続けた。結局掃討されたが、米軍の被害も大きなものだった。

27日 日本軍第317大隊600名はアスリート飛行場奪回の為夜襲をしかけた。がそこで見たものは十字砲火であり最後は米軍に包囲され全滅した。

7月7日 とうとう日本兵は島の端まで追い詰められた。3000名に万歳突撃をさせようとしたが、兵力を残し可能な限り被害を与えるのが最善とし、3個分隊を派遣。情報を得ようとして派遣したのだが勝手に突撃を敢行しあらかじめ米軍が準備していた12.7ミリの弾丸を受け36人はみな死亡した。

7月8日 深夜800名の十分な武装をしたものが集められた乙部隊。そのほかの2200名の甲部隊が突入した。

甲部隊が敵の最前線陣地を崩壊させたら乙部隊が有力な火力で敵戦線を崩壊するというものだった。「万歳！！」「バンザーイ」日本軍の罵声が鳴り響いた。甲部隊は十字砲火によって進行を阻まれるも機関銃に飛びつくような肉弾攻撃を行い、第一前線陣地を崩壊させた。第二前線の米軍は第1前線のそれよりも強力な火力を備えており、甲部隊は30パーセント進行したところで全滅。乙部隊

が甲部隊が崩壊させた陣地を進み第2守備ラインの米軍に攻撃を加えた。

しかし多勢に無勢やがて米軍戦車が後方に回り込み第3防衛線に突入と同時に全滅。

7月9日早朝 指揮官等のクラスは自殺した。日本守備兵は残り300名程度だった。先端が尖った鋭利なものを落とし穴に埋めるなどをしながら、最後までタコ壺陣地で応戦したが米軍火力の前には無駄だった。12名の捕虜を除き全滅した。事実上ここにサイパンの戦闘は終了したのだ。

米軍の損害

66790人中5800名が死亡

17900名が負傷した。

これに対し日本側は

31629人中27000名以上が戦死

3000名が自決

1000名未満が捕虜となった。

3分の1以上が死亡もしくはわ負傷した米軍は士気が下がるもサイパン攻略は日本に絶望をもたらした。

これで日本の1部は空襲圏内に入ってしまったのである。

サイパン玉砕（後書き）

とりまサイパンの戦いを書いてみました。
さてさて物語りも中間に差し掛かりました。
では皆さん、元気で。

陸海軍新兵器作成その一（前書き）

陸軍は空襲対策として新兵器を作成した。そして海軍の艦艇の主砲にも目をつけた。

陸海軍新兵器作成その一

7月8日「我々陸軍将兵一同は敵アメリカ軍を恨まずして日本海軍を永遠に恨みつつ玉碎する」これはサイパン島の斉藤中将が打電したものだ。これを受信したのはなんと海軍で、そこから陸軍側に取り次がれたわけだ。「海軍は何をやっているんだ」との声が上層部の方から聞こえた。

そのころ日本軍が玉碎した後は住民が崖から飛び降りる光景を米軍は驚きながら「アメリカグンハギャクタイナドハ ゼツタイシナイ」「シンンジテ デテキテクダサイ」と呼びかけていた。下士官クラスの間が教えていたのだが、なまりがひどいところは「ハレハレハ ギャクタイナゾ シバセン シンジデ デイテコウイ」みたいなことを言つてるところもあつた。しかしそんなものは住民の耳に入らず、ほとんどが自殺したのであつた。

さてサイパン島に米軍が上陸したころの九州地方では中国基地から出撃したB-29から空襲を受け、対空砲の強化が必要とされた。ここで陸軍は長砲身口径の機銃の開発に取り組んだ。

そして新しく考案されたのが92砲身口径30ミリ機銃。ここまで長いと化け物のようである。射撃可能距離は3千メートルを軽く上回るとの事だった。そして8月3日 仮設4式90砲身30ミリ機銃が作成された。いったいどうしたらこんなに早く開発が進むのか？日本人が器用でなければこんな事は出来なかつただろう。そして530発/分 有効射程距離 約3600メートルであつた。これは正式に4式長砲身対空機銃。これをチハ97式戦車に乗せて動かすことは出来ないだろうかと陸軍は考えた。しかしこれはコストが高すぎるため中止になつた。

また陸軍は海軍の主砲にも目をつけていた。そして海軍に依頼し

て作った8メートル近くに及ぶに50口径砲身155ミリ方が完成した。重量が重く手動で装填が出来ず、自動化しなくてはならないが、最大俯角55度で1万2000メートルの射程距離をだすにいたった。弾は3式弾を使用することになった。陸海軍は中は悪いものお互いのいいところをまねしあっていたのも事実である。

そのころ大和と武蔵はリング泊地より就航した。正直なんでもんな事をしなくてはならないのかと思っていた。俺、只一はうんざりしながら武蔵にのっていた。なんと俺達は石油などを運んでいるのだ。輸送船が米軍の潜水艦によって沈められると国内はなにかと原料不足になるのだ。そのため代用艦として石油ぐらいの戦艦が何故しなくてはならないのだろう。その装甲が今回の決め手だった。魚雷の1回程度ではビクトもしない、その装甲が。

ちなみに先ほど大和が雷撃を受け何とかかわして1隻を撃沈したところである。あ、そうそう武蔵は石油を運んでいるが、大和は鉄材を運んでいるらしい。

そのころ海軍は陸軍の長砲身対空機銃を駆逐艦に装備させてはどうかと考えていた。また新作の2000馬力級エンジンを作成し、艦上戦闘機も考案していた。

その艦上戦闘機は”烈風”とつけられそうだ。

台湾沖海戦（前書き）

今回の話は主人公に直接関係ないので説明（？）みたいな感じですが。一応ちよこつと出てきます。

さてそろそろ大海戦が始まる。

台湾沖海戦

ここから先俺は自分自身の日記を見るのが嫌になった。非常に。ん？何で日記だって？俺の日記に書かれていたことをここに記してんだ。そこをお忘れなく。では語って

いこう。しかし、俺の日記だけでは全体の話を知るには不足だろう。まあというわけで、台湾沖海戦を説明してみよう。

10月10日及び11日

1944年10月10日 アメリカ軍第38任務部隊が沖縄本島並びに周辺の島々の日本軍拠点に対して航空攻撃を行った。

このときの空襲は沖縄本島では十・十空襲として記録されている。翌10月11日、アメリカ艦隊は南下してフィリピン諸島を攻撃した。

10月12日 上空に低い雲が垂れ込める中、第3艦隊は台湾に延べ1,378機を投入して大空襲を行った。同日、日本軍はT攻撃部隊を投入し、アメリカ艦隊への攻撃を開始する。

海軍爆撃機「銀河」や艦上攻撃機「天山」、陸軍爆撃機「飛龍」などからなる航空機90機余りが出撃したが、照明弾による照明が雲のためまったく不十分であり、

攻撃に手間取った。そこへアメリカ軍の対空射撃を受け52機が未帰還となった。一方、第3艦隊の搭乗員は翌日の攻撃の事もあり、十分な睡眠が取れなかったと言う。

10月13日 第3艦隊は延べ947機を攻撃の為に攻撃させた。なお、太平洋艦隊司令部にあげられたウルトラ情報を回送されたことで、第3艦隊は豊田副武連合艦隊司令長官が台湾におり、反撃を指示して兵力の集結を図っていることを察知していた。このため新竹にも攻撃が加えられた。ただし、第38任務部隊指令マーク・ミッチャーは「数が多いので全ての飛行場を破壊するのは不可能かもしれない」と述べたと言つ。

10月14日 第3艦隊は転送された情報により日本軍機が集結しつつあることを知った。また、早朝より攻撃を行ったが、前日より更に早く空襲を切り上げたため、出撃機は146機に減少し、喪失機の増加から日本軍の抵抗が強化されつつあると判断した。日本側は敵艦隊は前日までの攻撃によって防御力を喪失したと判断して380機による

航空総攻撃を敢行し、昼間にも攻撃を行った。

この攻撃は昼間に行われたため、敵艦隊の上空を守る艦載機による激烈な迎撃と対空射撃をうけ、200機が未帰還となった。

(柳田が防衛庁戦史部の調査結果として引用した帰還数は194機)。
この日を以って第3艦隊は台湾への攻撃を打ち切った。

作戦を予定通り終えた第3艦隊は、17日頃にはレイテ島近海に集結しつつあった第7艦隊のレイテ島上陸を支援するために、14日夜にはフィリピン東方沖に南下をはじめた。

ここで艦隊は2つのグループに分かれ、第4群は15日よりマニラ周辺の空襲を開始し、第2群と第3群は燃料補給の為に給油海域に後退しつつあった。

第1群は台湾東方沖に踏みとどまった。アメリカ軍は戦果を赫赫と伝える日本の放送を傍受し、第3艦隊は二ミッツが中継した通信傍受情報を受け取り、虚報を信じ込んでいる事を把握していた。そのため、被害を受け、味方の魚雷で処分されてもおかしくなかった2隻の巡洋艦の曳航を命じ、これを囷として、追撃をかけてくるであろう日本軍に更なる打撃を与える準備をしていた。実際、志摩清英中将率いる第五艦隊が遭難中の日本海軍操縦士の救助及び残敵掃蕩のために派遣されることが決まっていた。しかしこの掃蕩方針も、14日にはアメリカ側に漏れていた。

10月15日及びその後

日本軍航空隊は16日まで反復して昼夜問わず攻撃を行ったが被害は大きくなるばかりだった。しかし、航空隊からの電文は「空母を撃沈」「戦艦を撃破」といった華々しい大戦果を報告するものばかりだった。この間、大本営では前線部隊からの過大な戦果報告を信じて疑わず、そのまま集計して発表したため、大戦果を大本営発表する結果となった。

10月19日 日本軍は「空母19隻、戦艦4隻、巡洋艦7隻、(駆逐艦、巡洋艦を含む)艦種不明15隻撃沈・撃破」と発表した。アメリカでは、投資家の一部が

大本営発表の内容を信じたために、一時株価が大暴落するという事態も発生した。

しかし実際は、 航空機109機、 搭乗員約112名

撃沈 正規空母エセックス 重巡洋艦キャンベラ

軽巡洋艦ヒューストン

大破 正規空母ハンコック

いつになつたらまともな報告をするのだろうか。皆さんそう思うだろうが、この先大本營の報告で正確だったのは終戦を知らせる報告だけだったと思う。

だが今回の正式な戦果でも十分米軍に痛手を与えたのは確かである。

4日 第3艦隊は連続で攻撃を継続し、更にフィリピン空襲や防空戦闘も継続していたため、艦隊の将兵には疲労が蓄積しつつあり、第2群は群司令官が

ハルゼーに具申した窮状を認められ、空母バンカー・ヒルが後退した。そしてエセックス級空母の撃沈が退却に大きな拍車を掛けた。ハルゼーの脳裏には士気に及ぼす影響があった。

15日 ハルゼーはニミッツに宛てて「ラジオ東京が撃沈と報じた第3艦隊の全艦艇は、3隻を除きいまや海底から蘇って、目下、敵方へ向けて退去中」という電文を発信した。

カール・ソルバークによればこれはアメリカ側では有名な報告だと言つ。

これに対し日本軍の損害は航空機 240機。この航空機の損失は以後の作戦に大きな影響を与えることとなる。

さて話を戻す。本土に無事輸送できた俺らは休暇が与えられず家族に顔を見せることもできないまま、リング泊地に戻った。おまけにこの作戦あんまり意味が

無かつたらしく、この当時日本が1日に使っていた石油の10日分にもならず、金属も焼け石に水程度のものだった。俺らの記憶では寢室にまで石油が入ったドラム缶

が置かれていた。この時より日本は米軍に空襲されはじめていた。これに対し日本軍はある戦闘機を作成し、新型エンジンの開発に取り組んでいた。

また、魚雷にも新機能を追加していた。否。魚雷ではない。新兵器の作成はこの後の作戦に幸運を運んでくれるのか？

台灣沖海戰（後書き）

陸海軍新兵器作成その二（前書き）

台湾沖海戦が終了した後、損害を受けたアメリカ軍は艦隊の編成などの問題で、予定していたレイテ島の上陸を3日ばかり遅らせることにした。

しかし台湾の大嘘戦果を信じてしまったため、レイテの守備など見向きは一切しなかった。

また日本海軍は魚雷に対する新兵器をついに開発させた。

陸海軍新兵器作成その二

10月17日 この日海軍が完成させた兵器は”4式対魚雷特殊弾”あくまでも、正式名称ではない。ただ皆がそうだったのでそう読んでもらうだけだ。

この兵器は見た目は砲弾のようだ。これは魚雷が向かっているのを発見したときに発射する。すると海中に落ちる。その時先端に電磁石が作動する仕掛けになっている。効果は30秒間だ。遅延信管なので

海中に落ちた瞬間に作動するわけではない。これを早くしてしまうと、発射した船の金属に反応し、発射した船にぶつかってしまうのだ。

そして電磁石が作動し魚雷に向かって潜行し向かっていくのだ。ただ実験は3度程度しか行われてない。

実は魚雷1本はこの当時豪邸が1軒は建つほどの金額がかかるのだ。この実験で3本発射すると1本は命中することが分かった。つまり撃てば必ず当たるわけでは無いのだが33パーセントの確立で命中する。ちなみにこれ材料は石や木が使われている。もちろん金属のものも使われているが、それは信管・周りの部分・スクリュールなどの部分である。相手の魚雷にぶつかり不発に終わらせるのが目的なので、向かって来た魚雷の信管を作動させるのが目的なのである。そこで中心部に石や木材をつめているのだ。これに敵の信管がぶつかり作動するという目論見である。そのためやや安上がりでなのだ。

ちなみに発射機は40センチの砲のようなものだが、爆風も特に無い。基本的には魚雷と同じで海中に捨てるようなかんじだ。

その時陸軍では新型攻撃機を製作していたが、これは・・・そう

実史でも戦争末期に使用されたものだ。そう特攻・・・ではなかった。そうロケット推進力を使用した攻撃機だ。実はロケットを使用したエンジンを考えた人がいた。それをドイツと相談し早くも図面をこの時すでに得ていた。

ちなみにドイツではこの時戦闘機が製作されていた。

陸軍側の計算によると 時速 800キロメートルで 武装20
ミリ機銃×6（場合によって変わる）
搭載量 1トン 魚雷も当然可能だ

陸軍側はこれを景雲となくす予定で、エンジンはまだ製作中だが機体は3機ほど完成していた。失敗したらどうする気なのだろうか？

そのころ米軍は、正規空母1隻 戦艦4隻 重巡・軽巡・駆逐艦10隻以上が沈められて、航空機が約三百機程度を失うとの少なからず被害を受けていた。日本なら致命的な損害だ。なにしろ戦艦4隻をもう1度作るとなればアメリカでも1年はかかる。日本は・・・何年いるだろう？3倍はかかる。いや4倍かもしれない。

航空機のほうは量産体制に入っているがパイロットのほうの問題があった。なにしろ300人近くを失ってるのだ。これの穴埋めは容易ではない。日本では・・・アメリカは予備がいるのだ。恐ろしいことだ。

さて海軍の新兵器はどうなるのか？陸軍の新型攻撃機は？日米戦はどうなる？

レイテ沖海戦序章（前書き）

今回の台湾沖海戦 マリアナ沖海戦で米軍は、空母1隻 戦艦4隻 それ以下の船舶など15隻前後 この被害により米軍は進行を遅らせた。

それがどのように動くのか？

レイテ沖海戦序章

10月23日 爆音が聞こえる。途方も無い数の……黒い点はやがて青い点になり、太く力強いシルエットを持つグラマンF6F通称ヘルキャトがむこうの空から沸いてきた。

「一四八「マリアナより緊急電です」突如、リング泊地に報告が入った。

内容は詳しく知らないが、どうやらレイテ島に米軍が上陸を開始したらしい。これに対し日本がどうしたか決まっている。

我が武蔵以下の連合艦隊が出撃した。この作戦を捷一号作戦を發動した。

しかし今回の作戦は航空機があまりいない。今現在の航空機を紹介しよう。

制空部隊 零戦22型 12機 零戦42型/乙・甲 (24機・31機・24機) 白菊20機前後 計82機

偵察部隊 彩雲 24機 零偵15機 計39機

総合稼働機 121機(零偵は大和と武蔵に6機ずつつむ予定。

また他3機は金剛 榛名 長門に積む)

またこれに加えて本土からもまだくる予定だ。しかし50機も来ないだろう。台湾沖海戦の影響だ。

これで米軍に勝てるか? いや無理だろ。零戦42型乙は甲より先に開発を進められていたが、遅れてしまった。これは零戦42型の操縦席の後部に8? 鋼板を付けたものだ。

36機が送られたが(飛んできた)途中で米軍機と遭遇したのか、はぐれたのか知らんが4機喪失してしまった。同じく4人失ってしまった。

忘れていたが白菊は練習機だ……今回攻撃機が載って

ないのは、機動部隊は現在日本にいてここにいないためないためだ。
現在ここは戦闘機しか置かれてない。

それはともかく航空機を載せる航空母艦を紹介・・・いつそのこ
と全艦艇を紹介しよう。

栗田艦隊 第2艦隊

第一戦隊 戦艦大和 武蔵 長門 金剛 榛名
第四戦隊 重巡洋艦 愛宕 高雄 摩耶 鳥海
第五戦隊 重巡洋艦 妙高 羽黒
第二水雷戦隊 軽巡洋艦 能代 第二駆逐隊 駆逐艦 早霜 秋霜
第三十二駆逐隊 駆逐艦 浜波 藤波 島風
付属として朝霜（朝霜は第三十一駆逐隊所属だったが、岸波、沖
波、長波を

マリアナ沖海戦で沈められてしま

いこのこの付属となった。）

第一遊撃部隊第二部隊

第三戦隊戦艦 金剛 榛名
第七戦隊重巡洋艦 鈴谷 熊野 利根 筑摩
第十戦隊軽巡洋艦 矢矧 第十七駆逐隊駆逐艦 浦風 磯風
雪風 浜風 清霜 野分

小沢機動部隊 第3艦隊

第三航空艦隊 航空母艦千歳 千代田型 瑞鶴 瑞鳳

第四航空艦隊 特型戦艦伊勢 日向
 巡洋艦戦隊 巡洋艦五十鈴 多摩
 第一駆逐連隊 巡洋艦大淀 駆逐艦桑 桐 杉 榎
 第二駆逐艦隊 駆逐艦霜月 秋月 初月
 第二補給部隊 駆逐艦秋風 油槽船仁栄丸 たかね丸
 海防艦22号 29号 31号 33号 43号
 132号

西村艦隊 第一遊撃部隊第三部隊

第二戦隊 戦艦 山城 扶桑 重巡洋艦 最上
 第四駆逐隊司令 駆逐艦 山雲 満潮 朝雲
 第二十七駆逐隊 駆逐艦 時雨

随行油槽船

八紘丸 萬栄丸 御室山丸 日栄丸 雄鳳丸 巖島丸 日邦丸
 良栄丸

南西方面艦隊

第二遊撃部隊（志摩艦隊、10月18日より南西方面艦隊指揮下）

第二十一戦隊 重巡洋艦 那智 足柄
 第一水雷戦隊 軽巡洋艦 阿武隈
 第七駆逐隊、駆逐艦 曙 潮 霞
 第十八駆逐隊、駆逐艦 不知火
 第二十一駆逐隊、駆逐艦 若葉 初春 初霜（第二十一駆逐隊
 はセブ島への航空機材等の輸送の為21日朝馬公から高雄へ出港し

突入には参加せず)

第十六戦隊：重巡洋艦 青葉 軽巡洋艦 鬼怒 駆逐艦 浦波 (元々第一遊撃部隊と行動を共にしていたが、編成替えにより第二遊撃部隊の指揮下となる。)

「青葉」被雷のためマニラに回航され、旗艦を「鬼怒」に変更後、突入)

第六艦隊

レイテ方面：大型潜水艦8隻

マニラ方面：中小型潜水艦7隻

まあ大体こんな感じだ。

10月25日から28日 俺は乗っていたからよく分らんが各船舶が混ざり合っていたのだからう気がついたら大艦隊であった。その間奇妙なものを

俺たちは自分の艦の弦側に設置していた。とてもがさつなもので爆風でもあたったら取れるんじゃないだろうかと思っただ。

しかし取り付けは容易でその効果を仕官から聞いたときは竹浜と盛り上がるほどの感動を覚えた。

10月29日 出撃してからこの日いよいよ敵さんと殴り会えるときがきた。しかし上空には航空機がない。裸艦隊だ。じつは今回の作戦は

機動部隊が敵の機動部隊をひきつけ、第2艦隊が突入する作戦なのだ。

その時愛宕の方では「敵の潜望鏡を発見!!」との声が入ってきた。もう戦いは始まっていた。

レイテ沖海戦その1（前書き）

実史と異なります。潜水艦や魚雷の発射のタイミングもすべてこの物語の場合であり、勘違いではありません。俺達は突入を開始した。

レイテ沖海戦その1

〇六三二 愛宕に6本の雷跡が向かってきた。距離900m これは潜水艦ダーターから放たれたものだ。

案の定米潜水艦だ。「4式対潜弾発射」との命令がきたという。

距離200メートル ダン！ダン！ダン！6発の4式対潜弾が右舷に落とされた。いつそんなものをつけたのか？俺達が武蔵につけたのもそうだ。これが4式発射弾投射機。ちなみに時間を空けて撃つ必要性がある。そうしないと、電磁石でお互い惹かれあってしまう。

グングン魚雷が迫ってきた。それを通させんと4式対潜弾が向かい撃った。この時アメリカの魚雷2本はよけることが分かった。残る4本は命中しそうだ。そして期待の4式対潜弾により魚雷を1本爆破させ、1本の水柱が立った。続いて2本目。そして3本目。しかし4本目の水柱がたった瞬間艦は大きく揺れた。そう愛宕に命中したのだ。場所は艦橋全部だ。速力は8ノットに低下し右舷に傾斜した。

沈没こそ免れたものの愛宕はほぼ戦闘できなくなった。しょうがないので朝霜を護衛につけ戻っていった。この際海に数十人が落ち大和に移された。また栗田艦長が大和に旗艦を移した。最終的に計40人程度が大和に移った。この間駆逐艦が機雷を捨てまわしていた。が当たらない。中止したのは39分。

〇六四〇 今度は高雄に魚雷が向かって来た。4式対潜弾（以後4式弾）を発射。計6発。これが奇跡を呼んだ。なんと向かって来た2発をすべて爆発させてしまったのだ。これには高雄の乗組員はもちろんのこと、他の船員も喜んだ。駆逐艦は潜水艦のいた場所を正確に捉えこれを撃沈させた。見事愛宕の仇を取った（愛宕が沈んだみたいだから倍返しというのが正しいのか？）

シブヤン海に差し掛かった栗田艦隊は24日8時20分、アメリカ軍第38任務部隊索敵隊（カボット、イントレピッド）に発見された。イントレピッド爆撃隊モート・エスリック中佐は、「戦艦4隻、重巡洋艦7隻、駆逐艦10隻」と報告する。この時第38任務部隊は第2群（ボーガン少将指揮、空母5隻基幹）がサンベルナルジノ海峡付近に、第3群（シャーマン少将指揮、空母4隻基幹）がルソン島の東に、第4群（デーヴィソン少将指揮、空母4隻基幹）がレイテ島付近にいた。また、第1群（マケイン中将指揮、空母4隻基幹）は補給中だった。ハルゼー大將は第2、3、4群の3個群を以って栗田艦隊に対し攻撃を開始した。

「何故ジャップは航空機がない」と米軍の攻撃指揮官は疑問を隠し切れなかった。

一〇二六 これからは俺の記憶で話す。

この時間、俺達は第1次攻撃隊45機（戦闘機21 爆撃機12 雷撃機9）より攻撃を受けた。

対空戦闘用意 副砲が唸った 高角砲がひっきりなしに鳴り響く 機銃から25ミリ弾が3つの銃身から吐き出される。「この当たれえええええええ」と声を上げて撃つ機銃座。「アレを狙え」と指揮棒を振り回す指揮官。その次の瞬間その指揮官は腹に直撃弾を受けもがき苦しみ死亡した。「右舷中部魚雷1」「4式弾撃て」「よし何とか防いだぞ」「弾をよこせ」と声が鳴り響く中その声を聞き俺は運んだ。

「1機撃墜」「左舷に至近弾」報告は絶え間なく行われる。この戦闘により武蔵は直撃弾こそ無かった者の人的被害は8人死亡。負傷者は19人に及んだ。そして妙高は右舷後部に魚雷1本が命中。妙高は速度12ノットに低下し戦場を離脱。

一一三八 第五戦隊司令部は僚艦羽黒に移乗した。
そして第2次攻撃が開始された。

レイテ沖海戦その1（後書き）

さてどうでしたか。愛宕は沈没を免れ、高雄はそのまま戦闘に参加。

本当は輸送船などの詳細も書きたいんですが、どうしても話数が増えてしまうので

無理でした（できれば22部くらいに収めたいので）初期は20部で終了予定だった。

さて第2次攻撃を受けた武蔵はどうなるのか？

武蔵に迫る空の死神（前書き）

武蔵に迫る空の死神

空から死はやってくる。航空機と共にやってくるその音は、死神のうなり声なのか？

さつきまで弾薬を補給しながら「ほれ、今のうちに水を飲んどけ」と言われ、くれた水を飲みつつ休息を得ていた。

・・・来た。マリアナ沖海戦から見ているゴマ粒を空にぶちまけたような情景があり、それが大きくなってくるさまは恐怖そのものだ。「いいか、落ち着いて打てよ」

と指揮棒を振りながらさげんでいる郡指揮官の声が50メートルほど遠くにいるように聞こえる。鼓膜に聞こえる音の波長が大きくなる。

「対空戦闘開始」「右70度 高角38度 140」敵はなんと太陽から突っ込んできた。「打ち方はじめ」対空砲全門から火が出た。俺たちは近くの対空砲の射撃を見ていた。

はつきりいつてそれ以外に何をしろというのだ？いや、何かしないと俺は精神が入り乱れるかもしれない。機銃の銃身はは前後に動くという単調な動作を只続けている。

ひたすら続けているその3門の対空砲から25ミリの弾丸が上空に吐き出される。1秒間に100キロを超える速度で動く航空機に對空砲弾がひたすら唸る。それを

打っているただ、ひたすら。そうしないと発狂してしまうのだろう。

突如、右40度雲の切れ目から雷撃機「艦橋からの報告。射撃指揮装置がクルリと回ると遅れて対空銃が回る。ダダダダ……」BF3機が雲の切れ目から高度を下げ、

太い魚雷を落とした。直後1機はコックピットを狙い撃ちされたのか落ちていった。その時艦長はすでに面舵射一杯との命令を出していた。武蔵のような艦は舵の効き目

が遅いが、見た目とは想像もつかないほどの運動性を見せる。前長

263メートルの艦が向きを90度変えた。魚雷はきれいにそれた。
「左方向からグラマンが突っ込んできます 機数6！」俺はその時に「おい弾をくれ。お前の真後ろの機銃だ！！」俺はあわてて弾を担ぎ走っていこうとしたその時、
変な音がしたため上空を見るとやや細長い、丸く黒いものが落ちてきた。

十秒前後しかたつてないだろうが俺には結構な時間に思えた。激しい閃光と爆発音を聞いて甲板にたたきつけられた。もっていた機銃弾がどつかに吹っ飛んだが
そんなことはどうでもいい。煙がもうもうと出ている。爆弾が命中したのか：体が血だらけになっていたが俺の血ではない。目の前にかぶとが転がっていた。

しつかり人間の肉片がついている。さつき俺を呼んだやつはよく見えないがどうも機銃の後方4メートルに生ごみのように転がっているのがそうらしい。機銃は消えてなくなっていた。

おそらくさっきのグラマンが小型爆弾を落としたのだろう。その時俺はわが耳を疑った。

「主砲が旋回してるぞ。打つ気だぞ」同時に警告音が鳴り響いた。シールドがない機銃座の兵士、偵察兵などはあわてて艦内に入り込んだ。床でうごめいてる連中がいる

が俺は救えない。救っていたら海のかなたに頭をとばされちまう。
「3式弾発射」ゴオオンという轟音が立て続けに3回ほど鳴った。あわてて甲板上戻ったときは敵機はいなくなっていた。

そして甲板上にいた人間は血塊となって消えていた。4式弾発射装置は両弦に十基おいてあったが2基ほど壊れている。弾はどこにいったのか？そんなものはしらん。

午前の戦闘はこれで終わった

損害 死者51名 負傷者97名 機銃座2基 4式弾発射機6基

また長門が少破 大和は無傷死傷者は出た またそれ以下の艦艇にも被害が出たのは言うまでもない

午後からまたも爆音が聞こえてきた。この死神の攻撃は何回来るのだろう。空をぼんやりしかし身震いして見ていた。竹浜は別の場所の機銃座の弾薬補給をしていた。死んではいなかったし、元気だった。

武蔵に迫る空の死神（後書き）

次回「只一の過去」を投稿します。

只一の過去（前書き）

俺はこの時あの日のことを思い出していた。

只一の過去

午後になるとまた攻撃が来るだろう。今の内に飯を食っておこう。明日はどうせ突入だ。死ぬときは死ぬし死なないときは死なないんだ。なるようにしかならないのならうまい飯を食っていたほうがいい。

竹浜と空を見上げながら食っていた。「敵機がびばいふおらを見げるとひいぶんいいよ」と飯を口の中にためこみ、リスのように頬をふくらませつつ口を押さえ言った。一応翻訳しておこう「敵機がない空を見てると気分いいよ」

「あの日のことを思い出すな」と俺は無意識とまではいかないが、実感が無いようにに言った。「ばの日ぼごとって？」（あの日の事って？）俺が答えようとすると竹浜がなにかに納得したような感じで目を輝かせ（輝いては無かったかもしれない）「ああ、お前がここに配属されたときのことか」と飯を喉に流し込んですっかりとした声で言った。

俺が配属されたのはなんと1943年9月1日なのだ。何故この日に配属されたのか？

少し時計の針を戻させてもらおう。…

1943年 8月5日 米潜水艦タニーという潜水艦がこの日大惨事を起こしてくれる。ちなみにコードネームは以下のとおり。

(USS Tunny, SS/SSG/APSS/LPSS-282)これが武蔵を雷撃した。

17時45分、魚雷1本が並走するように武蔵の左舷艦首部に命中。艦後部にいた者は魚雷命中に気付かず、武蔵は24ノットに増速して退避した。この時武蔵はトラック島にいた。ちょうど演習中だったのだろう。浸水2630t、戦死者7名、負傷者11人の被害を出して8月15日に呉に到着した。4式弾があればよければのだろう。

そしてこれにより 9月1日 呉で対空戦闘の為の改装工事完了。
25mm三連機銃18基増設がなされた。

ここで俺は弾薬補給係に任命された。海軍学校予科練の中では優等生だった俺はこれに任命されたとき、喜んだ。なにしろ武蔵に乗れるのだ。海軍学校の予科練の中では優等生。これはもちろん優等生。弾薬補給に向いているという意味合いだ。ちなみに俺は福岡生まれだ。

水兵になろうと思いい訓練を重ね、呉の予科練に移ることになった。
1941年に配属された。

ここで始めてあつたのが山辺という先輩にあたる人だ。この人は部下から尊敬されているまあ優しい人だ。そしてこの山辺を尊敬していたうちの1人が竹浜だ。俺とほぼ同じほどの成績を持っていたがお互い興味を示さず、同じ配属にされても「あ、：よろしく」みたいな感じだった。これで仲介(?)に当たったのが山辺さんだ。何の会話したのか忘れたが3日くらいで友人となった。

まあ1ヶ月してから周りからも親友のような目で見られた。いや別に悪くない。山辺さんは半月ほどで病気をわずらったらしく悲しく見送ることになった。それから山辺さんの情報は無い。

10月17日 マーシャル方面に進行などしてそれから作戦をこなしてきた。

「それからいろいろあつたよな」と竹浜。「ああ特にマリアナのときは大変だったな。まあ先の戦闘も大変だけどな」「もうすぐ敵機が来るよ。あと10秒くらいで、向こうの空に」と竹浜がなんともいえないような、やる気の無いような声で言った。ちょうど10秒後「敵機だ!!」艦橋からの報告だ。マジかよ。「只一俺生きて帰ったら予言者になろうと思う」「いいと思う。大もうけできるぞ」そんな会話をしながら仕事に就いた。

一二二三 死神は武蔵を見ながら微笑んでいた。

只一の過去（後書き）

毎回どうも。今回の話は作品に直接関係無いけど。竹浜とどうやって出会い友人になったのかを書くために山辺さんなどの人物を出しそこらへんをすつきりさせておこうと思ひまして。
次回もよろしくです。

主砲のバカヤロー（前書き）

前回、主人公などの出身校を予科練と書いていましたが、予備校の間違いです。

m | | m すいませんでした。

それではそろそろ物語りも完結に近づいてきました。

(・|・)ノ では主砲のバカヤローをどうぞ。

主砲のパカヤロー

空母 イントレピッドからの第3次攻撃隊33機（戦闘機12、爆撃機12、雷撃機9）が攻撃を開始した。米軍機は栗田艦隊周囲の駆逐艦、巡洋艦の対空砲火をくぐりぬけ、大和と武蔵に殺到する。俺達はこの海戦前にペンキを塗るはずだったが、4式弾射撃装置を付けるのに時間を費やしたため、ペンキは塗っていない。おそらくペンキを塗れば武蔵だけに攻撃が集中しただろう。

大和の副砲が咆哮するなりこちらも射撃が開始された。というより俺達が仕事に付いたとき駆逐艦などの部隊は対空戦闘を開始していた。

甲板上にはまたも生ごみ（元人間）が散乱し初めていた。そう書いていなかったが戦闘が終了した後、専門の兵士が片付けるのだ。死体を。「赤いペンキは結構だ」と言うやつまでも出始めた。まあ当然と言えば当然だろう。

しかし今回は米軍機は剥き出しの機銃座に射撃を加えてきた。そして血しぶきが舞い、肉片は飛び散り、骨は砕け散る。俺はその中を走り、弾薬を補給して回る。目の前にオレンジ色のような黄色ともいえる閃光が走ることもあった。目の前の同僚がいきなりポロキレになるのも見てきた。

そのとき「左舷中央部に魚雷2本です」偵察員が悲鳴をあげた。この時4式弾射撃機の兵士は…銃撃をまともに食らってそれどころではなかった。

武蔵はあわてて右に曲がり向かって来た、魚雷とすれ違いにかわそうとした。4式弾の兵士がなんとか撃った。魚雷は…なんとか避けた。が、それをあざ笑うかのように左舷に魚雷が1本来た。これは避けられない。白い跡は武蔵野腹に突き刺さった。突如、武蔵の船体は大きく揺れた。命中だ。「被害を知らせよ」艦長がどなる。そして「戻せ。取り舵30度」と命令し元の方向に戻った。その艦

長の横で艦の傾斜度針を目で追っていた。1度・・・2度・・・と傾いていく。そのとき電話が各処からかかった。「左舷最下部甲板浸水」また主砲のほうからは「艦長、射撃方位盤故障です」

またこの報告を則的班長が聞いていた。「射撃方位盤故障です」続けて「現在第2方位盤に切り変え中でありませう」との報告が入ってきたが、それには答えず「主砲のバカヤロー」と怒鳴り散らした。当時3連装三基の主砲は海軍の象徴であり、また主砲射撃員は神様のような存在だった。それをバカヤローと叫んだのだ。1回は啞然とした。

結局艦長が第2射撃方位盤に切り替えの命令を出し、「応急員被害現場に急げ」などの命令を出していった。また11番力マ室が浸水し外壁からどんどん水が入って来るとの事だった。急いで排水命令を出した。「艦長、艦が左に4度傾斜しています」と隣で傾斜度を測っていた野崎中尉が緊張した様な声で言った。艦長は以外にも落ち着いて「うむ、そのようだな」と言った。

傾斜を直すには反対側に注水すればいい…右舷注水開始。つづいて左舷からグラマン2機爆弾を落としたが命中せず。

しかし食い下がって離れない。執拗なほど射撃を続ける。12、7ミリ機銃により水兵は屍に変わる。12、7ミリ機銃により兵器は破壊されていく。翼には相変わらず星が描かれている。

このとき出しえる速度は22ノットとなっていた。高角砲は電動照準装置が破壊され、まちまちな不正確な射撃を受けていた。戦闘を終えてみると大和には1本の魚雷が命中。また小型爆弾4発。長門は小型爆弾をうけたようだ。

休むまもなく第4次攻撃が来たが、これは大和と長門に攻撃が集中した。武蔵は援護射撃を開始した。「主砲3式弾撃ち方用意」またブザーが鳴り甲板下に逃げる。同じことをやっているが、これ

が戦闘なのだろう。これによる大和、長門に被害がなく（人的被害はある）敵機を40機を撃墜破した。（正確には5機撃墜13機被弾）

一五二三 米軍空母を発進した第5次攻撃隊65機が来襲した。

主砲のバカヤロー（後書き）

武蔵撤退

第5次攻撃隊の攻撃は艦隊すべてに攻撃してきた。

「くそ暇があれば空襲だ！」温厚な人柄の竹浜が呪詛を吐き捨てた。それと同時にやってきた攻撃隊は、狂ったように突っ込んでくる。

黄色いような煙に巻かれている外を見ると、大和が見えた。直後大和に煙がもうもうと立ち上り水柱で見えなくなった。「あ、やられた」と俺は叫んだが、水柱が崩れ始めると大和のマストが見えた。しかし安心している場合ではない。変な音が耳鳴りを強くさせたので空中を見る。

またも黒いものが降ってきたが、しだいに細長く見えため安心した。爆弾は命中するときは丸く見え、外れる時は細長くみえるのだ。

しかし次の瞬間閃光が走った。目が見えなくなり俺はかがんだ。轟音が耳を麻痺させる。爆風と共に熱風が走り背中が燃えそうになった。何かが俺の頭にあたった。鉄兜をしていなければ俺の頭にはコブができていただろう。爆発音が消失した瞬間俺は目を開いた。ぼやけて見えないが望遠鏡のようなものだ。その望遠鏡を見た瞬間俺は叫んだ。望遠鏡の持つ部分に腕があり肩からわずかな筋肉でかろうじてつながった人の頭があった。それは目が飛び出し口から臓器物のようなものが飛び出していて、皮膚が1部めくれ骨が見えていた。俺の叫び声は2度目の爆弾命中の轟音によりかき消され、俺の意識はそこで消失した。

この攻撃で武蔵に最低爆弾4発、魚雷3本命中、軽巡洋艦1隻撃沈を主張。エンタープライズ攻撃は武蔵に爆弾と魚雷集中するが当たらず、利根に爆弾2発命中、駆逐艦2隻に爆弾命中との戦果を挙げていた。

「…だ…い…か」「ただい…だいじょうぶか」誰かが何かを言っている。俺は確か爆弾の爆風で床に叩きつけられたような…死んだのか？

「おい、只一大丈夫か？」ハツとなつて俺は目を見開いた。すると竹浜と衛生兵と数人の水兵がたっていた。ここは病室だろうか？台の上に俺は寝かされていた。気のせいか左側に6度くらい傾いているような気がする。

「お、起きたか」最初にたまに顔をあわせる水兵が言うと竹浜が「お前3回も空襲があつて目を覚まさなかつたんだぞ」と言った。横を振り向くと大量の人間がうめいている。俺は気持ちが悪くなった。衛生兵が俺の顔で察してなにか容器（和紙製のものだが）をもつてきてその袋の口をあけて俺に渡した。おもいつきり俺は吐いた。

2回ほど吐いたら気分がよくなった。「もう大丈夫です」というとその汚物入り和紙袋をもつてどこかにいった。

「只一、武蔵は引き返す」と急に竹浜が言った。何をいつているのか最初は分からずたださっきより傾斜がきつくなつていないか？と思つていた。

この時武蔵は速力18ノットでしんぱいそうに、駆逐艦清霜が横に付き添いながらコロンへ向かつていた。左舷に4本右舷に2本の魚雷が命中。爆弾10発命中。この攻撃を普通の戦艦が受けていたら沈没しているだろう。

まことに関係ないがその時リング泊地近くの航空隊では零戦42型が実は43型だという事実を受けていた。制作当時は同じエンジンをのせるつもりだったが違うエンジンに変えたため1桁目を1増やさなければならぬのだ。2桁目が機体のデザイン。1桁目がエンジンである。

そのため零戦42型は零戦43型なのだ。制作した次の日、零戦43型であることに気がつきあわててなおしたが零戦42型の名前が執着していた。

そのためこの航空隊では「これは零戦42型ではなく零戦43型だ。死に方」(42型)ではないからこれからは死亡者がでらんぞ」と隊長が言い士気をあげたというのが定かではない。

話を戻す。武蔵は夜の海を進んでいた。

一八〇〇 米軍潜水艦が偵察していた。

「大和型戦艦と駆逐艦1隻を発見 現在18ノットでリング泊地に向かっている模様」

武蔵撤退（後書き）

毎回愛読ありがとうございます。

レイテ沖海戦その2（前書き）

栗田艦隊が戦っていたとき航空隊は何をしていたのだろうか？

レイテ沖海戦その2

10月24日 栗田艦隊が戦闘をしているとき実は栗田艦隊を援護せんと、新たにフィリピンへ展開していた日本海軍基地航空隊の第二航空艦隊は、第38任務部隊の第3群に航空攻撃を行った。

〇〇八〇 米軍戦闘機部隊は日本航空隊をバタバタ落としていった。艦隊の上空の侵入を阻止しようと米軍戦闘機部隊は奮闘した。「ジャップの猿どもがうじゃうじゃ沸いてくるな」とせまりくる日本機と交戦していた、アーモドネス・フィスター1等飛行兵がいった。「猿なんぞ叩き落せばなんてことはない」と同じ編成のプリマナネード上等飛行兵が答えたときだった。「プリマナネード！アブネエ」とフィスターが上官を呼び捨てにした警告もむなく後ろに現れた紫電に撃墜された。「糞！！ふざけんな」下品な呪詛を吐き捨てるとその紫電にむかい猛スピードで突っ込んだ。「そこだ」12、7ミリ機銃の発射を両眼で見たときには紫電は消えていた。「フィスター右のほうから日本機だ！！」誰がいつたのか知らない。冷や汗がどつと出て横を見たときは黄色い閃光がこちらに向かって来た。直後フィスターのコックピットは赤く染まった。

〇九三〇 遂に軽空母プリンストン に爆弾1発が命中。弾薬庫に誘爆して爆発炎上、その後軽巡洋艦リノの魚雷で処分された。また、プリンストンの消火作業中に起きた爆発で軽巡洋艦バーミングハムが600名近い死傷者を出して大破した。

アメリカ力第3艦隊は洋上哨戒の穴を突かれたり、米潜水艦の誤報に振り回されるなどしてルソン島西方など見当はずれな海域を疑う

こともあり、24日まで小沢艦隊を発見することが出来なかった。一方、ルソン島東方沖に到達した小沢艦隊は基地航空隊から知らされた第3群に偵察機を送って、午前9時〜11時前後に存在を確認。11時30分、86機（零戦40、爆装零戦38、彗星6、天山2）を出撃させて攻撃し、基地航空隊も日没まで5回に渡る攻撃隊を出撃した。小沢機動部隊から出撃した攻撃隊は、故障で零戦6機、爆装零戦7機が帰艦し、米機動部隊と交戦する前に戦力が減少した。小沢部隊攻撃隊は15-16時にかけて第3群を攻撃した。米戦闘機隊は「明らかに精鋭チームのパイロットだ」と評価している。

戦果は、驚くべきもので今後の米軍の行動に少なからず支障を与えた。数隻の空母に対して至近弾。その中の1〜2隻の喫水線下の船体に軽い損傷を与えた。しかし空母フランクリンは最悪な結末を迎えることとなった。この空母はエセックス級空母と同じ型である。零戦が突っ込んできた。零戦43型は爆弾を搭載できない。爆装しているのはそれより前の零戦だ。零戦43型は18機が米軍機と交戦し残りはフランクリン以下の空母に向かった。

零戦43型は荒れ狂ったような弾幕攻撃の中を潜り抜け、フランクリンの艦橋のガラスを割り乗員を殺傷した。この時艦長は早くも死亡した。安全なところにいればよかったのに。（最も戦闘中安全な場所などないと思う）また弦側で必死に機銃をふりまわす兵員に銃撃を加えた。小沢艦隊の零戦はほとんどが43型乙だった。これは防弾対策を一応してある。もちろん米軍機とくらべると脆い。

対空砲火が半減したとき爆撃装備の零戦が襲い掛かった。まずは大きな水柱を立てた至近弾だ。続いて2つ至近弾を与えた。

もちろんフランクリン空母だけを狙っているわけではないので全機の攻撃が集中するわけではなかったが、攻撃隊がなぜかフランクリンを集中的に攻撃した。

ついに1機の爆弾が飛行甲板に命中。また数分後には右舷に1機が急降下しながら爆弾もろとも喫水線に突入

した。爆弾を搭載したまま降下した零戦は700キロ近くに達し、もう少して空中分解を起こすところだった。ちなみに秒速になおすと約200メートルだ。こんなのが爆弾を抱えて突っ込んできたのだからたまったものではない。フランクリンは右側が1瞬浮いた。そして戻ったとき大量の海水が浸入してきた。爆装の零戦はおかまいなしに甲板に爆弾を叩きつけた。少なくとも3発が命中。高射砲は破壊され

甲板上では大火災が起こり乗員は多数が死傷した。8度傾き4分後に右側に至近弾が来た。それが穴を拡大させた。フランクリンの運命は決した。4つの缶室に水が入り込み、格納庫の近くに火が回った。中には航空用の魚雷や爆弾が満載してある。「格納庫に火を通すな」これが合言葉となりダメコンは奮闘した。零戦部隊は沈没確実として残った機銃を打ち込み帰還した。

フランクリンは遂に14度傾斜した。総員対艦の命令が出された。…といっても艦長はすでに死亡していた。駆逐艦が近寄って早く救助された。10分がたちすでに廃墟と化していたフランクリンは突如轟音を立てエレベータから爆風を突き抜けさせ艦が真っ二つに裂けるなり急速に沈みだした。

小沢艦隊は「正規空母1撃沈確実、正規空母1隻大破」としている。基地航空隊と小沢機動部隊の波状攻撃は、第38任務部隊の一番北側に位置する第3群の北方への索敵を遅らせることに成功した。この時点で小沢艦隊の航空戦力は、零戦19、爆装零戦5、天山4、彗星1に減少した

武蔵に話を戻す。栗田艦長は武蔵が空襲を吸い取ってくれることを願いながら1時退却していった。そのとき武蔵は潜水艦に見つかるとも雷撃は受けずそれどころか随伴の駆逐艦により潜水艦は沈められた。コロンで応急処置を受けた。(排水/給油)また排水場所はなんとか応急手当で浸水は止まったが、次直撃したら後がない。

「只一、あさつての夜には出航なんだろ」「ああ、そうだ」竹浜の質問に俺は答えた。質問といってもさつき長官の指示みたいなのがあった。しかし1日の応急手当で行くとは武蔵はそれほど余裕なのかなとさえ思っていた。

この時、西村艦隊が単独でとつにゆうしそうだったため武蔵はなんと西村艦隊と動向することになった。扶桑と山城と共に。レイテ湾突入は成功するのか？

レイテ沖海戦その2（後書き）

毎回どうもです。物語でエピソードを少し入れていたらもう23かよ…（ていうか細かに分けすぎた）後で総集編みたいなのつくろうかな…。

さて西村艦隊との動向をまかされた武蔵。戦いはどのように進んでいくのか？

Z旗挙がる(前書き)

コメントありがとうございます。

これからもがんばって更新していきます。(まあもうじき終わる

けど)

それではごっげ。

Z旗挙がる

24日 一四三九 相次ぐ栗田艦隊の被害報告に小沢中将は艦隊の存在をアメリカ軍第38任務部隊に明らかにするため、航空戦艦日向、伊勢からなる松田千秋少将指揮の第四航空戦隊を基幹に前衛隊を編成して第38任務部隊に砲撃戦を試みるべく南下をはじめた。16時過ぎ、艦隊は栗田艦隊のシブヤン海での反転が知らされてから間もなく第3群の偵察機に発見され、小沢艦隊は17時15分、味方部隊に対して触接を受けている旨を発信した。しかしこの電報は栗田艦隊に着電せず、栗田艦隊が受信したのは「前衛部隊は残敵を撃滅せんとす」の電文である。

アメリカ海軍第3艦隊はその晩の集計により栗田艦隊へ壊滅的な打撃を与えたと判断し、漸く発見した空母機動部隊である小沢艦隊を攻撃するため、日没から深夜にかけてサンベルナルジノ海峡、レイテ島沖から集結して全速力で北上をはじめた。この時ハルゼー大將自ら第34任務部隊（高速戦艦5隻）を率いて先行し、空からだけでなく砲戦を挑んで徹底した攻撃することを目指した。第3艦隊はマリアナ沖海戦で空母大鳳と翔鶴が沈んだことを知らず、この機会に日本軍空母を全滅させようと試みたのである。一方小沢中将はアメリカ軍の偵察機に発見されたことから、25日は空襲を受けると判断し、17時10分に連合艦隊から「天佑を確信し、全軍突撃せよ」との電文を受け取っていた事から、栗田艦隊も予定通り進撃を続けていると考えていた。小沢は艦隊を本隊と松田千秋の指揮する支隊の2隊に分け、南東に向け進路を取っていた。しかし、20時頃、16時に栗田艦隊が発信した反転避退の電文が着電した。小沢艦隊司令部は連合艦隊からの突撃命令を受信していた事から栗田艦隊もこの命令で再反転していると予想したが、反転避退のために突入の時間がずれ、両艦隊の連携が上手くいかないと考えた。そのた

め、小沢艦隊は一旦北上を行い、前衛部隊を呼び戻した

10月25日〇三〇〇 反転後栗田艦隊はアメリカ第38任務部隊による妨害は受けなかった。

サンベルナンジル海峡を通過。さマール沖に差し掛かりつつあった。

この時の栗田艦隊の勢力は戦艦4隻、重巡洋艦7隻、軽巡洋艦2隻、駆逐艦9隻（戦艦武蔵は西田艦隊になっているため省く）

シブヤン沖海戦により、妙高・藤波が沈没したまた浜風が爆弾を受け速力を低下させていた。長門は対空機銃が4丁破損していた。4式弾発射機もそれなりに壊れている。

同時刻 西田艦隊 現在の勢力は戦艦2隻 重巡洋艦は1隻 駆逐艦は4隻だったがこのたび新しい艦を受け入れてきた。

まず俺たち武蔵 そしてコロンの電信によりやってきた愛宕。武蔵と同じ突貫工事である。そして俺たちを護衛してきてくれた清風そして

その愛宕の護衛として帰還した朝霜が駆けつけてきた。

最大速度で着たためコロンの燃料補給を受けた。コロンの燃料貯蔵タンクもずいぶん軽くなっただろう。軽くなって何がいいか？悪いに決まっている。

新しく編成をした西田艦隊は戦艦3隻 重巡洋艦2隻 駆逐艦6隻に膨れ上がった。

20時13分付発信の電文にて、25日4時にドラグ衝突入の予定と栗田艦隊に通信を送った。ブルネイでの計画では25日5時半

にスリガオ海峡の南口に到着する

予定であったため、これは4時間も突入時刻を繰上げていることになる。この通信に対し、栗田艦隊はokサインをだしたようだ。

俺は来るべき時期に向け仮眠を取った。もしかしたら最後の夜になるかもしれない。そう思うと不思議な気分になった。

栗田艦隊の動向

〇六二三 大和はレーダーで敵機を探知し、栗田艦隊は対空戦闘に備えた陣形をとりはじめた。

〇六三〇 索敵隊形の左翼先頭にいた矢矧が水平線上のマストを発見し、大和に通報した。ただし各艦戦闘詳報や艦橋勤務員の手記に記録なし。

西田艦隊の動向

一方、アメリカ軍第7艦隊司令長官のキンケイド中将は西村艦隊の接近を察知し、オルデンドルフ少将指揮の戦艦部隊を迎撃に投入した。オルデンドルフ少将は

西村艦隊のルート上、レイテ湾南方のスリガオ海峡で待ち伏せを行うことにした。その戦力は、戦艦6隻、重巡洋艦3隻、軽巡洋艦4隻、駆逐艦26隻、魚雷艇39隻と

大きなものであった。マツカーサーは軽巡ナツシユビルで観戦することを望んだがこれは押し留められた。

西田艦隊との比較 戦艦3隻vs6隻 重巡洋艦2隻vs3隻

軽巡洋艦0隻vs4隻 駆逐艦6隻vs26隻 魚雷艇39。なん

だろつこの戦力差は…

そうそう志摩艦隊が追隨してきている。(1時間差で)戦力は重巡洋艦2隻 軽巡洋艦1隻 駆逐艦7隻 もう1度比較だ!戦艦は先と同じ。重巡洋艦4隻vs3隻(やった勝った)軽巡洋艦1隻vs4隻 駆逐艦13隻vs26隻 魚雷艇39隻…これどうにかならないのか?

結果:重巡洋艦 同じ 戦艦・駆逐艦13隻は相手の半数。巡洋艦4分の1魚雷艇…だからなんだこいつらは?

西村艦隊が接触したのは

戦艦 ペンシルバニア カリフォルニア テネシー

ミシシッピー メリーランド ウェストバージニア

重巡洋艦 ルイスビル ポートランド オーストラリア

軽巡洋艦 デンバー コロンビア フェニックス ボイス

駆逐艦26隻 魚雷艇39隻

俺たち武蔵は迫り来る敵艦の攻撃に備え決戦の準備に取り組んでいた。

〇六三五 両艦隊はほぼ同時に攻撃を開始した。

帝国の興廃この一戦にあり。同時刻Z旗が武蔵に掲げられた。
アルファベットのZの後ろにはもう文字がない。日本もいまやそ
ういう状況なのだ。

Z旗挙がる（後書き）

さて次回は決戦です。

日本海軍の運命を懸けたこの一戦。

次回の更新は月曜日の予定です。日曜日卓球の試合なので。

小沢艦隊は？志摩艦隊は？栗田艦隊は？西村艦隊は？

4つの艦隊は以下に奮闘し、どのように戦うのか？
そして戦いは始まった。

扶桑ノ山城最後の戦い（前書き）

更新は月曜日じゃなかったか？
あくまでも予定だ。

扶桑／山城最後の戦い

扶桑と山城は一齐に砲門を開き、武蔵も敵にめがけて主砲を向ける。

「右28度。俯角43度 目標敵の戦艦」武蔵ではこのような声が聞こえ始めた。

扶桑と山城は巡洋艦をつぶしていくようだ。護衛艦は駆逐艦である。

扶桑が第1・2・3・5・6が斉射した。計10門の主砲弾が発射された。武蔵も発射した。扶桑との14インチ砲とは比べ物にならない。

〇七三一 3回の射撃で扶桑では「敵巡洋艦に命中3」との報告。事実ルイビルは攻撃能力を喪失していた。山城はポートランドと、ミネアポリスに至近弾を与えていた。

〇七三二 武蔵がついに命中弾をたたき出した。戦艦テネシーに2発。至近弾を3発。これに応じて、愛宕は満潮 朝霜 時波で突入を開始。

〇七三九 米軍とてやられてばかりではなかった。愛宕に向け戦艦部隊が咆哮。そして愛宕には2発が命中。日本の巡洋艦は、速力の変わりに
防御力を犠牲にしている。愛宕はせっかく来たのに沈没を開始した。しかし愛宕は無駄ではなかった。連れてきた駆逐艦が一気に魚雷を発射した。

軽巡洋艦デンバーとコロンビアに命中した。コロンビアは海面に突き刺さったかのように沈んでいった。

〇七四一　しかし米軍のレーダー射撃は正確だった。戦艦山城に3発の命中弾を叩き込んだ。

これに怒った最上は肉薄し射撃を開始。数分後に駆逐艦を1隻しとめたのだ。

さらに武蔵も駆逐艦に副砲で応戦。魚雷の射撃距離につくまえに武蔵だけで2隻沈めた。

満潮が発射した魚雷は2発駆逐艦に命中しこれを轟沈せしめた。この数分で米軍駆逐艦は4隻が沈んだ。これをみたスムート大佐は残りの5隻で反撃を開始した。

最上に向かい駆逐艦が迫りこんだ。最上は前に出すぎたのだ。主砲で反撃するも当たらない。4式弾を準備していると、戦艦ミシシッピから1発受け駆逐艦に轟沈させられた。

〇八〇一　これを見た武蔵では敵をうたと目を光らせていた。テナシーに3発を当て完全に動きを止めた。また時雨が5発を放ち、最上に向かつていった

駆逐艦郡の5隻中2隻に2発ずつ命中させた。2隻の駆逐艦は4隻の後を追った。

山城は被弾し血まみれになりながらも敵に攻撃をし続けていた。そしてついにミネアポリスに2発を当てた。また至近弾により喫水がおかしくなっていた。

ミネアポリスは大火災をおこし始めた。そこで山城からもう2発命中弾を受けたのだからたまったもではない。ミネアポリスは艦尾

を残し沈んでいった。

また武蔵の護衛をしていた静霜及び山雲が雷撃を開始。直後カルホルニアが放った砲弾が山城に命中。山城は艦首が沈み始めた。

アメリカ戦艦部隊はメリーランド ウェストバージニアが山城に砲撃を開始。山城は艦首は完全に沈み始めた。復旧の見込みはなかった。しかし乗員はおりてこなかった。そして第2主砲が火を噴いた。ポートランドに2発を当てゆっくり沈んでいった。この時〇八三四。扶桑級戦艦の2番艦として長きに渡り日本海軍に居座り、そして今それを終えた。西村艦長も戦死。

それをみた姉の扶桑はメリーランドに3発を当て、他もすべて至近弾という射撃を見せた。満潮以下3隻は魚雷を戦艦部隊に向け、突撃した。

酸素魚雷が海中を進んでいく。メリーランドに6発が命中。メリーランドは即座に沈み始めた。

扶桑は引き続き砲撃を開始しようとした瞬間残りの戦艦部隊の砲撃を受けた。火柱が立ち上った。水柱が崩れた後それは残っていたがもはや扶桑ではなかった。いたるところで誘爆がおこり艦橋は崩壊し戦隊はボコボコだった。そして妹の後を追うごとく沈み、2隻の戦艦は悲しくその幕を下ろした。

〇八三二 テネシーが直後大爆発を起こした。ダメージコントロールでは防ぎきれなかったのだろう。総員退艦の後沈んでいった。

そして米軍駆逐艦は最後のときがきていた。満潮以下の雷撃によりスムート大佐は死亡し、3隻の船とともに水面より姿を消した。

武蔵は最後の仕上げに大攻撃を開始した。カルフォルニアに4発

を叩き込んだのを皮切りにミシシッピに3発を叩き込む。使用弾は鉄鋼弾である。

距離は2万8000メートルにまで迫っていたためたちまち大火災を起こし航行不可能となった。

駆逐艦がそれを狙い魚雷を発射。2隻は沈んだ。さらに志摩艦隊が到着したのだ。戦況は完全に日本側に向いた。

○九〇〇 志摩艦隊の駆逐艦7隻の駆逐艦と1隻の軽巡洋艦が残った3隻の駆逐艦を沈めた。

ここで米軍のウエストバージニアが火を噴いた。志摩艦隊の若葉が沈没した。このウエストバージニアは武蔵に目を付けられた。

武蔵から直径46センチ長さ2メートルの爆発する鉄の棒が数百キロの速度で突っ込んでいく。カルフォルニアの運命は決した。艦橋が潰され

主砲は天蓋を突き破られ火薬庫に引火し、喫水線に鉄鋼弾が魚雷のように突っ込む。100メートルの距離を大和級の徹甲弾は魚雷のように進んでいくのだ。

グワーンと音が聞こえそうなほど揺れ、海中に没するのに時間はかからなかった。

残りのペニシルベニアに駆逐艦の魚雷が殺到。この際最後の反撃とばかりに武蔵に2発が命中した。幸い甲板上だったので被害がなかった。俺たちはこの下にいたわけだ。さすが不沈艦と感心させられた。

それはともかく100本をこす魚雷でペニシルベニアは轟沈した。何で1隻にそんなに使ったのやら？

アメリカ第77任務部隊第2郡のの中央隊と左翼部隊を壊滅させた。右翼隊は驚くなかれ志摩艦隊が無傷で全滅させていた。

扶桑と山城と駆逐艦数隻の被害で俺たちはレイテ湾への道を切り開いたわけだが、小沢艦隊の悲劇もこれには関係していた。

扶桑ノ山城最後の戦い（後書き）

砲戦書いてると只一って出番ないんだよね。

まあ次回は小沢艦隊が何をしていたか？栗田艦隊はどのような戦いを繰り広げていたか？そこに迫ります。

レイテ湾突入成功

西村艦隊は西村艦長死亡のため、武蔵の猪口艦長が指揮を取ることとなった。

西村改め猪口艦隊と追隨してきていた志摩艦隊がレイテ湾へと進んでいった。しかしその前に何故、夜が明けたのに敵機は来なかったのか？

時計の針を戻す…小沢艦隊。

ハルゼーは航空機こそが現在の戦いの主流であることを信じていた。しかし今回の日本艦隊には戦闘機がっていないという。が…数分後に偵察機が遂に発見した。そう小沢艦隊を。

25日〇七二二「上空に偵察機を発見！」見張り員が上空の第38任務部隊の偵察機を発見した。すると小沢は、錬度不十分なため戦力とまらない艦載機を直衛用の戦闘機18機+新鋭戦闘機を除き残存機を陸上へ退避させ（爆装零戦5機、彗星1機、天山4機）、さらに囷任務を果たすため北上した。

小沢艦隊は、空母「瑞鶴」、軽空母「瑞鳳」、戦艦「伊勢」、軽巡洋艦「大淀」、駆逐艦4隻の第1群と、軽空母「千歳」、軽空母「千代田」、戦艦「日向」、軽巡洋艦「多摩」、軽巡洋艦「五十鈴」、駆逐艦4隻からなる第2群に分かれていた

〇八一五 この時第1次攻撃隊180機が小沢艦隊に來襲した。護衛戦闘機が飛び立った。この戦闘機は艦上戦闘機烈風だった。

ちなみにこれ異常に航続距離が短い。30分くらいで燃料が切れしてしまう。局地型戦闘機のようなものだった。今回の小沢艦隊は囷

のため、攻撃よりも防衛が優先された。なにしろ載せる戦闘機が少なくて、空母4隻をむざむざ捨てるわけにはいかないからだ。この烈風は出撃前に完成したのがわずか12機だった。

発動機「誉」2200馬力 最大速度623キロ 巡航速度234キロ

武装 20ミリ機銃×6 大きさ自体は零戦を一回り大きくしたような感じである。ちなみに防弾は

後部に8ミリの防弾装甲を設けて、風防も射程距離100メートルなら7、7ミリ機銃を耐えられるようになっていた。また防弾燃料タンクである。さらに翼とコックピットに集中的な防弾を施していた。そのため素人が乗っていてもやすやすと撃墜できない。おまけに自動空戦フラップを使用しているため格闘戦も零戦に引けをとらない。そしてパイロットは空母フランクリン撃沈の援護をしたエースであり、烈風の操縦を身に着けていた。

戦闘機には見向きもせずアベンチャーなどに向かっていた。この20ミリ機銃は装弾数が200発と多いただけでなく、弾道性能も向上させてある。このため滞空時間が短くなってしまった。アベンチャーはもちろんアメリカの機体は乱暴に扱っても壊れない信頼性の高い防弾をもっているが、20ミリ機銃の前では無力だった。もちろん栗丘がいた。栗丘に烈風を渡すのは鬼に金棒というのがふさわしい。

20ミリ機銃は2発でも当たれば戦車のような防弾をしない限り吹っ飛ぶ。グラマンに攻撃されたら降下して離脱したり、良好な運動性で交わした。しかし多勢に無勢。烈風は撃墜こそされなかったが、空母千歳と駆逐艦秋月が被爆沈没。軽巡洋艦多摩は4式弾の効果もむなしく魚雷1本が命中、大破して速力18ノットにまで低下した。しかし180機に襲われながらこれですんだのは幸運といえよう。逆にアベンチャー雷撃機を25機撃墜確実8機不確実（米軍側では23機損失となっている。）

米軍は次に36機を繰り出してきた。これは烈風に蹴散らされた。

そのころ栗田艦隊はアメリカ軍第38任務部隊による妨害を受けずに、6時30分、索敵隊形の左翼先頭にいた矢矧が水平線上のマストを発見し、大和に通報した。ただし各艦戦闘詳報や艦橋勤務員の手記に記録なし。6時45-48分、大和が35km先にマストを確認した。それはサマル島沖で上陸部隊支援を行っていたクリフトン・スプレイグ少将指揮の第77任務部隊第4群第3集団の護衛空母群（コードネーム”タファイ3”）であった。栗田艦隊はこれを正規空母6隻、すなわちアメリカ軍の主力機動部隊と誤認、6時57分攻撃を開始した。栗田は巡洋艦部隊である第五、七戦隊に突撃を命じ、水雷戦隊には後続を命じた。なお、第一戦隊（大和、長門）の戦闘指揮は栗田ではなく宇垣がとつた。

20日の上陸以来、第77任務部隊の護衛空母群は計画通り支援任務に徹し、まともな敵の攻撃を受けてこなかったが、24日になると多数の日本軍機がレイテ湾に飛来してきた。また3つの日本艦隊が報告されており、25日は敵艦隊への攻撃で多忙を極めることは予想されていた。深夜には西村艦隊の接近が報じられたが、栗田艦隊の動静について音沙汰は無かった。6時半、第3集団の艦船は警戒を解除し、第3種警戒（通常配置）に移つてよいとの指示を受けた。栗田艦隊の発見は米側記録によるとその直後の6時41分の航空機によるものであり、数分後には総員戦闘配置が発令されている。やがて各艦のレーダースコープにも大艦隊が映し出された。第3集団の各艦は混乱しながらも、砲撃を回避しつつ待機していた搭載全機の発艦に成功した。なお、第3集団は初動の30分あまりで既に発艦していたものを合わせ100機弱の航空機を発艦させている。これら艦載機は栗田艦隊攻撃の後、主に米軍占領下のタクロバン飛行場に着陸、一部は反転撤退する栗田艦隊を再攻撃に回つた。宇垣の『戦藻録』には「30機あまり発進したと見え」とあり、都竹も

同様の感想を抱いていた。都竹は戦後に記録を見て本当の機数を知り、驚いたと言う。

〇七一〇 水柱が高く立ち上る。大和の射撃により海が燃えていた。なんと大和は3式弾を使用していた。これは大火災を起こさせるのが狙いで、後は駆逐艦の雷撃で沈めればいとされていたからだ。

そして遂に夾叉され続けていた護衛空母カリニン・ベイが、最初の直撃弾を受けた。一方、砲撃を受けていたスプレイグ少将は救援を求めたが、第3艦隊も第7艦隊の他の部隊もすぐに救援にいけない状態ではなかった。ハルゼー大將は休養と補給中の第38任務部隊第1群を救援に向かわせ、自らは北方の小沢機動部隊へ攻撃を続けた。

そして火柱を上げた。3式弾は対空用の砲弾だったが、陸上への効果が非常に大きかった。では甲板はどうだったのだろうか？商船改造の空母では大火災が起こった。そして落伍していく。駆逐艦が必死で弾幕を張るしかしトカン・ベイに狙いを定めた大和は初弾2発命中という神業を見せた。もうもうと燃え上がった。しかし煙のためやや見えにくくなったため砲弾を鉄鋼弾に変えようとしたとき「零式偵察機を使ってみますか」との案が出た。

〇七二五 零式偵察機から改造空母との連絡があった。栗田以下は愕然とした。いままで正規空母と思っていたのが実は商船空母だったのだ。しかし護衛だろうがなんだろうが空母だ。砲弾は鉄鋼弾では突き抜けてしまう可能性がある（装甲が皆無のため信管が作動しない）ため榴弾を使用した。

カリニン・ベイとキトカン・ベイは10分後に沈められた。そして長門の射撃も正確さを増してきた。

カダシャン・ベイと マニラ・ベイに至近弾が多数。しかし米駆逐艦の雷撃はすさまじく進路は妨害されまくりだった。危なく矢矧な

どは命中すると

ころを4式弾の使用で交わした。

〇七五〇 カリニン・ベイとキトカン・ベイは遂に撃沈され、矢矧も水雷戦隊を率いてオマニー・ベイをはじめとし、駆逐艦2隻を沈めた。が、ここで大和からの集合命令だ。実は。鳥海は爆弾が1発命中し航行不能となり、筑摩も魚雷が1本命中して舵を損傷、航行不能に陥った。熊野は駆逐艦ジョンストンの雷撃により落伍していたのだ。「もう少し時間をくれれば全部沈めれていたのにな」と言った。

一〇〇〇 レイテ湾に猪口艦隊・志摩艦隊の突入が成功したとの電信が来た。栗田はこれを読み空母の再度攻撃を図った。またオルデンドルフが全滅したのをした：トーマス・L・スプレイグ少将は完全に我を失い発狂しそうになった。その時再び飛んできた零式偵察機に発見された。最もその時栗田艦隊は再度発見をしていた。

16隻の護衛空母はいまや11隻になっていた。又矢矧に撃沈されたのも含め駆逐艦は21隻中8隻が沈められていたのだ。大和の砲弾が突如飛んできた。距離は30キロだった。レーダーでぎずいていたが艦長に報告しようにも完璧に錯乱状態だったため耳に入らなかった。艦長は我を戻し外を見た。その10秒後金剛の実戦初のレーダー射撃により艦橋は破壊され死亡した。

結果的にハルゼーは2回目以降の連絡が来なかったため小沢艦隊を追い続けていた。もはや射撃や雷撃に追われ動いていた護衛空母部隊は絶望していた。

一〇五五 最後の護衛空母が沈み、駆逐艦がぼろぼろになったとき猪口艦隊と志摩艦隊がきて駆逐艦隊は降伏した。そして水雷戦隊の雷撃に沈められたいた。あ、そうそう小沢艦隊から作戦成功との伝聞も幾分か前きていた。

小沢艦隊　レイテ湾への突入を開始するとの電信を13時に受け取った小沢艦隊は引き返すときに180機の攻撃機に襲われた。烈風は3機が撃墜された。13時過ぎ、ミッチャー中将に指揮が移った2個群から発進した第3次攻撃隊約200機が来襲、空母瑞鳳が被爆したが、最大速力で戦場を離脱し始めた。

ハルゼーはレイテ湾へ本腰を入れようとしたときすでにレイテ湾の輸送船団への攻撃は始まっていた。

レイテ湾突入成功（後書き）

皆さん愛読感謝です。次号が恐らく最終話になります。

不沈戦艦レイテ沖にて没す（前書き）

さて大変遅れてすみません。

最終話です。

不沈戦艦レイテ沖にて没す

輸送船が赤い炎を吐き出して燃えている。頭上には15センチ弾や20センチ弾が降ってくる。レイテ湾は赤々と燃えていた。

地上が炎に包まれている。46センチ弾や40センチ弾が叩き込まれる。レイテ島も同じく赤々と燃えていた。

猪口艦隊/志摩艦隊の両艦隊は10時ごろにレイテ湾に突入を果たした。もはやレイテ湾には魚雷艇と輸送船のみだ。そしてその輸送船を叩き潰すのが今回の

任務であり、これを破壊すればアメリカ軍も今後の作戦の遂行が難しくなる。やがて白旗をなびかせ米軍輸送船は近づいてきた。すると日本軍の作戦が開始された。

なんとカッターで給油艦、タンカーなどに入り込んだ。タンカーなどの石油目的で拿捕するのだ。しかし人員が少ないため、輸送船は米軍をゴムボートにのさせると駆逐艦によって処分させた。ゴムボートに乗った兵士は武器をすべて押収させられ、日本船に詰め込まれた。そのため喫水が深くなったがそんなのはどうでもいい。もう少して沈むんじゃないかと思ったほどだ。敵側の兵士なので監視が必要となった。

「捕虜が邪魔だないっそのこと殺してしまおうか」と血の気の多い連中が言ったが、何事もなかった。

「しかしすごかったなああの輸送船の数」と俺が言うと「ああ、まあ数があっても沈んじゃあ意味がない。こっちは不沈艦だぞ」と竹浜が勝ち誇ったように言う。

艦橋じゃあどんな光景が広がってるのかが気になる。

3式弾をひっきりなしに輸送船にレイテ島に放つ。その度に土が噴き上げられる。米軍もボロボロに引き裂かれ肉片が空中を舞う。

シャーマン戦車は砲塔を吹き飛ばされ、弾薬は誘爆をし兵器はスクラップとなった。レイテ湾ではいまだ抵抗する輸送船があったが浮かべる城に守られず、浮かべる城に攻撃されてるのでは勝ち目がない。その輸送船は浮かべる廃墟となった。

「ジャップの砲弾が飛んでくるぞ。こっちの海軍は何してんだ」
「ジャップの艦隊が海からよみがえってきたんだ。それでもって味方が腰抜かして逃げ出したんだ」とレイテ島の米軍は口々に言った。しかしいくら悪口を叫んでも味方の砲弾が海に叫び日本艦隊を打ちのめすことはなかった。

やがて海岸は鉄屑の集合場所になり、陸地ではアメリカ軍の死骸とその死臭が鼻をついた。マツカーサーは火に焼かれ死亡した。残りの兵士もともに武器などもってない。島の日本兵に投降したが、怒り狂った日本兵に銃剣で刺し殺されることさえもあった。

やがて栗田艦隊もやってきた。猪口艦長はすでに砲撃を停止させていた。「輸送船を砲撃するとは非道なことをしてしまった」と言っただがこれはいささか仕方がない。

「米軍の偵察機を発見」と偵察員が言った。「ここに長居は不要だ、すぐさま海域をさろう」と栗田艦長の言葉により俺たちは退却を始めた。

アメリカ軍は輸送船団が全滅に近い被害をこうむり、上陸させた10万以上の兵力が水の泡となったことを知った。しかし時速10ノットにも満たないタンカーなどを

連れて高速で移動するのは不可能だ。

仕方がなく栗田艦長はその輸送船に合わせて動き出した。武蔵は不安そうに進みだした。

やがてレイテ島から離れたとき、ついに米軍機が襲来してきた。その数は100機だ。米軍はは怒り狂っていた。それをあらかずかのように突っ込んできた。

主砲弾はもう少ない。対空砲の弾数も満足とはいえないが、そんな場合ではない。

この攻撃では被害は受けなかったが、このままでは全滅さえしかなない。ここで栗田艦長が下した判断は「武蔵は当海域に残り、敵機を引きつけよ」とのことだった。ようするに生贄だ。

猪口艦長以下武蔵の乗員は驚愕したがこれを皆認めめた。武蔵の最後の時へのカウントダウンが始まった。栗田艦長率いる艦隊は見えなくなった。

レイテ島より航空隊が発進した。ハルゼーの航空隊から日本艦隊を守るためだ。また、リンガ泊地からも零戦43型の各種あわせて36機ばかりが舞い上がった。

そして退却し始めていた小沢機動部隊からも優秀なパイロットのみ零戦に燃料を満載し発進させた。かくしてここに1大航空戦が行われた。

夏の日差しが照る中、先に栗田艦隊に着いたのは零戦部隊だった。43型が上空を旋回している。烈風は航続距離が短いのがなんとも

いない。

そしてF6F/F4UとSB2C艦上爆撃機が襲い掛かったのだ。迎撃を始めた零戦部隊だが、烈風と違い被弾に弱い。烈風の開発が早ければ小沢艦隊が敵機動部隊の航空兵力を大規模に減らせたであろう。

武蔵に再び話を戻すが、いつそのこと空母に向かっていこうという話になった。そこで敵機が襲撃してきた。艦上爆撃機がそくさに爆弾を落としてくる。

「左舷に至近弾です。わずかながらゆがみが発生」そして遂に、甲板装甲にも爆弾が命中し始めた。その中でひたすら弾薬を配るのだ。

「この所ずっとこの作業だ。主砲・副砲は弾薬がもうないのに等しく、機銃弾、高角砲などももう少ない。そのとき船が大きくぐら付いた。

「後部に至近弾。主砲が損傷により動きません。10度以上の回避行動は無理です」

零戦43型の迎撃によりアメリカ軍は戦闘機損失が42機、艦上爆撃機8機（対空砲火も含める）の損失をだし、引いていった。こころは8機が撃墜/タンカーが1隻爆沈/駆逐艦1隻が沈み、その他にも多数の損傷が出たが、さしたる損害ではない。むしろ50機撃墜とはたいした戦果だ。実はこの内20人以上が実際にエースパイロットだ。

そしてそれ以来攻撃はなくなった。武蔵に攻撃が集中したのだ。

回避行動がほぼ不可能となり対空砲も米軍機により破壊されていく。やがて雷撃機が襲来してきた。4式弾はもう無い。

白い泡を吐いて武蔵に魚雷が1本2本と突き刺さった。もともと破れていたところに鉄板を貼り付けたただけだ、もうグチャグチャだ。米軍捕虜は武蔵から他の艦に移していたのを知っているかのように平気で攻撃してくる。

アメリカ航空隊は大損害をおつていたが、質量を誇る米軍にはたいたことは無い。

レイテ島の航空隊は栗田艦隊の護衛を終了した後、武蔵を探そうとしたが、燃料の問題ともう暗くなりかけていたので諦めた。

武蔵の甲板上は赤い血で覆われて対空砲はほぼ火を噴いていなかった。俺は皆がこんなに死んでるのに生きてるのが不思議だった。目の前には数時間前まで生きていた、兵士の屍が横たわっていた。いたるところで火災が起きてる。船が傾斜している。

時刻は一八〇〇 魚雷がすでに20本が命中していた。爆弾は…もう分からない。

タタタタタ…対空砲の音がかすかに聞こえる。いや敵のかもしれない。そして水柱が左舷に立った。武蔵は20度も傾斜した。「総員退艦だ」艦長がいった。

「皆ご苦労だったな」と艦橋の兵士に敬礼をするなり、部屋に入り鍵を内側から閉めた。

一八三〇 俺は力なく武蔵から滑り落ちた。武蔵はもう40度傾斜していた。艦橋があんなに低く見える。竹浜と弾薬運びをしていたので一緒に滑り落ちた。

近くにあった木片にしがみついた。「まさか武蔵が沈むとわな」と竹浜が遠くでしゃべっているように聞こえた。

しがみついた木片は小さく上下している。鼻までつかり、口が出るほどまで浮きそして鼻までつかるといふ動きが繰り返し行われた。

一八四〇 武蔵はスクリューが全て水面から出てきた。そしていく分が経ち武蔵は赤い火を吐き出し爆発した。それは腹に響く音だった。眠い…

重油は眠気を誘う。近くで歌が聞こえた。恐らく寝ないために歌っているのだろう。俺はフンドシで自身の体を木片に縛ると一緒に歌った。

「なあ只一」と竹浜が言った。「このままじゃお前も死ゴハツ」と途中で水を飲み咳き込んだ。「今みたいに水を飲んで死ぬぞ」何が言いたいのか俺にはわかった。「おい早まるな。その内助けがくるはずだ」俺は上を向いていった。軽く笑って様な声で竹浜は「俺たちは見捨てられたんだ。そりゃその内くるだろうが、そのときはもう俺たちは沈んでるよ」と言った。「じゃあな」と竹浜が言った。「おい…」その時木片がグツと浮いた。視界から竹浜が消えた。

武蔵の火で波の割れ目に手が見えた。それが俺が見た竹浜の最後

だった。その日から竹浜を見たやつはいない。歌は続き海ゆかばが海に流れた。

海行かば 水漬く屍

山行かば 草生す屍

大君の 辺にこそ死なめ

長閑には死なじ

俺たちはやがて駆逐艦より救出された。

1945年1月8日 「臨時にニュースをお伝えします。臨時にニュースをお伝えします」

大本営の発表によりこの日、日本は米英軍と一時停戦し、ドイツ軍との同盟を破棄した。

戦前の領土にし、軍備を大幅に縮小し捕虜を全て解放し中国より兵士を全て撤収し満州北部を破棄。これにより一応太平洋戦争は終結した。

米軍の機動部隊は陸軍が開発したロケット攻撃機でそれなりの損害を受け、新鋭戦闘機 烈風21型（航続距離を増やした）またロケット戦闘機秋水が迫りくるb-29以下の爆撃機などを2ヶ月で

1000機を撃墜された。またレイテ沖で消えた輸送船が1番の痛手だった。あれが全部ではないが、それを操縦する兵士の損失がきつく、レイテ島攻略の頓挫、マッカーサーの死亡による国民の戦争反対運動などが米軍の戦争継続を邪魔した。

日本海軍は対空砲を大量に装備させた。もちろん米軍から得たものだ。艦隊行動が半年可能なほどの燃料も得たし、レイテ島の防衛成功しマレーからの物資輸送が可能だったからだ。俺は大和の弾薬補給員として働いた。

最後の出撃が第2次レイテ沖海戦だった。

空母「瑞鶴」 軽空母「瑞鳳」新鋭空母「信濃」「千代田」(ちなみに実史では信濃は何もせず沈没) 艦載機 戦闘機 烈風120機 零戦43型 12機 零戦の量産をやめ烈風に力を注いだ結果この機数を得られた)

戦艦「大和」「長門」「榛名」(金剛はレイテ沖海戦から戻るとき雷撃により大破)

重巡洋艦 摩耶 鳥海 高雄

軽巡洋艦 矢矧

駆逐艦(省略) 10隻

巡洋艦が少ないが水上打撃が重要な任務だった。

対して米軍が空母5隻(空母ホーネット ワスプ ハンコック 軽空母カウペンズ モンテレー)

戦艦3隻(ワシントン マサチューセッツ アラバ

マ)

巡洋艦以下 20隻

これは米軍がレイテ島を大爆撃しようとしたの防ごうとして行われた海戦だ

日本空母部隊は烈風でアメリカ機を壊滅させた。攻撃機を載せず全て戦闘機にしたのがよかった。

その後砲戦で戦艦2隻撃沈 1隻大破 空母ワズプを皮切りに八ノコックが巡洋艦/駆逐艦に襲われ沈められた。

こちらは長門は艦橋に直撃を受け、艦長が死亡するが無事戻った。また駆逐艦が多数損傷

ここで米軍に停戦の話を打ち出した。

その後会議で日本はまだ戦うべきとの声が聞こえたが、天皇が望まず、植民地の解放、石油などの貿易再開などの条件があったため戦争を終結させた。

俺はその後は教師となった。正しき教育の必要性を感じたのだ。幸い年齢がそこまでいってなかった。

竹浜：彼を含めこの対戦で犠牲になった兵士のおかげで今の平和な世の中があるのだ。俺をそう信じている。

空は青々とし、明るく光っていた。

不沈戦艦レイテ沖にて没す（後書き）

えーとこれで不沈戦艦武蔵沈み行く戦友は終わります。
いままでご愛読して下された皆様ありがとうございました。

次回からはまた新しい話を書こうと思っています。

それでは皆さん。お元気で！

外伝 第2次レイテ沖海戦（前書き）

さて最終話も書いたし外伝でも書くか。
不足分があったらここで書きます。まずはこれ。

外伝 第2次レイテ沖海戦

1945年12月17日 「クリスマスプレゼントはレイテ島大爆撃だ」アメリカ軍パイロットのスクワードが部下達に言った。階級は中尉だ。部下のドネツサ・ロープ1等空兵は「よしや！生意気な糞ジャップの猿どもに一泡吹かせてやりましょう」と意気込んだ。「バカ。一泡どころじゃないぞ」と友人のハワードが口を挟んだ。「そのとおりだハワード1等空兵。やつらを石器時代に戻してやれ、猿だから苦勞はしないだろう」と思いつきり皮肉っていった。よほどレイテ湾のことを根に持っているのだろう。

翌日ハルゼーより指示があつた。最後にはやはりこう言った「KILL JAPS, KILL JAPS, KILL MORE JAPS. You will help to kill the yellow bastards if you do your job well」

皆さんご存知の（ジャップを殺せ、ジャップを殺せ、ジャップをもつと殺せ。任務を首尾よく遂行するならば、黄色いやつらを殺すことができる。）をあらわす言葉である。

そのころ日本艦隊は反攻すべきだという声があがっていたが、日本はそんなに余裕がない。レイテ湾で大損害を与えたのは確かだが、以前航空機での劣勢変わらないのだ。

米軍捕虜が教えてくれた情報はまともなことがなかった。ヒマワリの花の有効性が1番まじだったとさえ言われる。

ヒマワリの花からは油がとれ、葉っぱはサラダとして食べられる。ヒマワリの油で家庭用の油がまかなえるのだという。さっそくヒマ

ワリ育成の進めというのが開始されたが、ヒマワリの種を得るのが大変だった。結局何パーセント否、何百分の何パーセントまかなえたのか分らない。

それはともかく、レイテ島から偵察機が最近しきりに現れるとの電信が来た。何かの前触れではないかと考えられた。一方石油のほうはタンカーからの石油の大量摂取と、4式弾を輸送船に装備したのが大きく作用した。これにより潜水艦の妨害は著しく減った。

しかし相変わらず機雷などで湾が閉鎖されて、その被害が相次いだ。しかしかれこれ被害は30パーセントまでに減少した。また、零戦43型の抜群の航続距離で輸送船の護衛が出来た。

ちなみに零戦43型はもう1つ装備が付いていた。いや装備というより機能だ。トイレだ。強大な航続距離ゆえにこれはかかせないものだった。栄エンジンがやや大きくなったことで機体にわずかながら間が出来た。そこでもう少し広くしてレバーでかどうするようあトイレを作った。トイレといっても鉄パイプのようなもので、そこにそのまま出されるというまったく雑な装置であった。しかしそれ以前零戦のパイロットがトイレをどうしていたかを考えればましであろう。

話が変な方向にいつてしまったから戻すとするか。

新鋭戦闘機烈風21型のパイロットが全員基知識を学んだのもこの日である。いや実につけたというほうが正確か。量産に入ったのは12月に入ってからである。この烈風21型は航続距離を3時間に引き伸ばしたものである。これにより1000キロ以上飛ぶことが可能だ。烈風の巡航速度は驚くことに350キロもの速度を出すことが出来た。艦上戦闘機としては早い部類に入る。あくまでも日本の話だが。

日本帝国の技術をあつめて作成された最強のレシプロ戦闘機それは、烈風21型なのだ。

そして妹を失った戦艦大和の活躍は？

外伝 第2次レイテ沖海戦（後書き）

さて本編終わったし外伝書いてみました。とりま次の話がまだきれいにまとまってませんのでこれを書かせてもらいました。

外伝 第2次レイテ沖海戦2（前書き）

レイテ島をクリスマスプレゼントとし大爆撃を企だてた米軍。

サイパン島のB-29及び機動部隊の力でレイテ島及びフィリピンを爆撃・無力化してしまうこの作戦に日本軍は直ちに手をつつ必要性があった。

外伝 第2次レイテ沖海戦2

ようやく錬度が開戦当初までに上がってきた航空隊パイロットは日々練習に励んでいた。そして烈風の機体は他の航空機の材料を全てやりくりして、量産していた。と、いつても1日1機が限界だった。現在は100機ほどが作成されている。できれば後20機ほど今年中にほしいのが本音であった。しかし何故2ヶ月でこれほど作成できたのか。

まさか陸軍飛行場で作成をしていようなど誰が開戦当初に想像したか？恐らく誰もいなかっただろう。陸軍に防空戦闘機を多数引き渡したことにより許可された。陸軍にはオリジナルの呂式戦闘機が作成され始めていたが、まだ数がそろっていないかったため許可がおりたのだ。

送られたのは雷電が60機ほどだった。また烈風の図面もこの時渡した。これはいずれ陸軍が独自に改造して新型戦闘機を作るのだが、それはさておき、これにより戦闘機烈風21型が量産されていた。

一方アメリカでは戦艦や空母をボコボコ沈められ、挙句の果て駆逐艦などの護衛艦艇をほぼ失ってしまったが、この时空母を2隻戦艦を1隻建造していた。恐ろしい工業力だ。

今回の大作戦に参加するアメリカの兵力は空母5隻、搭載機は
(F6F 100機 F4U48機 SB2C艦上爆撃機80機
TBMアベンチャー雷撃機120機 その他20機前後)の約370機。戦艦は意外と少ない3隻で巡洋艦以下護衛艦は20隻だった。いささか数が足りないように見えるのは第1次レイテ沖開戦のせいだろう。

そのころ日本軍はレイテ島にしきりに現れる偵察を爆撃などによ

るレイテ島及びフィリピン守備隊の攻撃力の無力化をするためと無
ぬいていた。さすがにこれほどの兵力が来るとは思わなかっただろ
う。ちなみに捕虜はフィリピン方面に送られた。輸送船の残骸など
で艦艇を作るとは日本兵もたいしたものである。

大至急海軍の会議が行われ結果は、戦艦と戦闘機を中心とした艦
隊で行くことにした。サイパンから陸上爆撃機が来た場合は現場の
航空兵力及び、機動部隊の戦闘機で撃墜し戦艦で護衛し、機動部隊
の攻撃であれば戦艦が敵空母を攻撃し、戦闘機は艦隊の上空の制空
を果たす。

以上の作戦を実行するため、戦艦は大和と長門そして空母のイス
コートとして榛名。空母は瑞鶴 千代田 瑞鳳であり、さらに信濃
が加わった。信濃は大和型戦艦を空母として建造したため速力が2
7ノットしかない。レイテ沖開戦に間に合わせようとしたが、アメ
リカ潜水艦の魚雷を2発受けそれどころではなくなった。あわてて
修復した。信濃は突貫工事で作られたがもう急ぐ必要性が消えたの
で、ゆっくり作られた。そして魚雷を10発受けても大丈夫である
う不沈空母として建造された。

これに偵察機彩雲などを除く烈風120機を乗せまた零戦43
型が乗せられることとなった。

この日は12月19日。

外伝 第2次レイテ沖海戦2（後書き）

本編で終わらせればよかったのに何故書いたのかといわれたらいいわけのしようが無い外伝ですがどうでしょう。

まあ外伝などにせずそのまま書けばよかったのかも知れませんがね。

後、都合のほどがよければ[http://ncode.syo
setu.com/n8081v/](http://ncode.syosetu.com/n8081v/)もよろしくです。

外伝 第2次レイテ沖海戦3（前書き）

遂に動き始めた航空戦。

外伝 第2次レイテ沖海戦3

翌日、第2艦隊と新たに再建した第3艦隊を交えて第1機動部隊をリンガ泊地に向けて港を離れた。

第2艦隊 戦艦大和 長門 榛名

重巡洋艦摩耶 鳥海 高雄

軽巡洋艦矢矧

駆逐艦満潮 時波 朝霜 清風 雪風 潮 新鋭駆逐

艦温風 回風 花信風 寒風

補給艦 2隻

新鋭駆逐艦は海防艦に1万2000馬力のエンジンを載せて武装を変えたものだ。

45口径12センチ高角砲 単装3基

三式迫撃砲単装1基

三式爆雷投射機6基

爆雷投下軌条1基

爆雷60個

4式弾発射装置2基

4式弾20個

4式長砲身機銃3連装10基30門

速力 30ノット

爆雷の数を減らし陸軍の長砲身機銃を装備させ（陸軍のオリジナルより八〇口径にまで切り詰め、水平射撃も可能）、4式弾を最初から固定することを前提としているため故障は少ない。

またこの対空銃座は電力作動となつていたので非常に旋回能力がいい。しかし装填は手動という地味な点もあった。

海防艦の上層物と機関を改造しただけなので20日に2隻単位で

建造できた。それぞれ簡略化されたものとなっているため練習期間が少なくて扱えるつくりになっている。

行く途中にB-29にて発見された。

22日 リンガ泊地に到着。

24日 ○九〇〇 「海中よりスクリー音」回風が潜水艦に接触した。すぐさま戦闘となった。「潜望鏡確認しました。右30度 距離2000」

「3式 迫撃砲発射」艦長の命令によりヒュルヒュルと独特の音を出しながら迫撃砲は発射され海中に落ちた。迫撃砲とは命中率が悪いのだが運よく当たったらしい。海中に火柱らしきものが立った。「機銃員 水平射撃を開始せよ」片弦に3連装機銃が五基もあるのだ計15門の機銃が一斉に火を噴いた。

潜水艦ではいきなり迫撃砲を受け後部浮力質が浸水し1秒間に3発発射される15門の機銃、つまり毎秒45発の洗礼を受けるなり、それが魚雷格納庫に当たり爆発した。

25日 ○五〇〇 サイパン島では空の超要塞B-29が怪鳥のごとく不気味な羽音をなびかせレイテ島へと向かっていった。またハルゼーの機動部隊より戦闘機180機 爆撃機60機が一斉に甲板を蹴り飛ばし空に舞い上がった。

「さあ宴の始まりだ」ハルゼーが艦橋でそうつぶやいた。「これで作戦が成功したら新型の戦闘機を俺の名前にちなんで付けてくれたらいいんだが」とハルゼーは斜め後ろにいたカーニーに話しかけた。「ワイルドキャットではなくワイルドドッグにでもしてもらいましょうか」といった。「フ、ブルの突進か」おもしろかったのだらう鼻笑いをした。

この動きは哨戒任務に当たっていた彩雲によって確認されていた。「夜でも俺の目は見えるんだよ」と佐藤は呟きながら規模を確認打電した。

突如グラマンが追いかけてきた。しかし彩雲はエンジンの回転速度を最大にして、それを切り離れた。送信のライトが輝く。「敵機をヲ200機ホド確認 目的機ハレイテ島ト思フ グラマン我ニ追イツケズ」

「フン、威勢のいい打電をしよつて」猪口艦長はほくそ笑んだ。

烈風が零戦が合計20機飛び出した。暗闇を飛べる搭乗員はこれしかない。同時に全員エースである。

〇五一五 連合艦隊も出撃した。

〇五三〇 先にたどり着いたのはアメリカ軍だった。日ごろの偵察により危機を感じていたため1式陸上攻撃機がレイテ島の上空を旋回していた。そこに大部隊が接近してきた。

レイテ島の航空隊に接近を知らせたときには敵は目の前にまで来ていた。青く太いシルエットのグラマンが襲い掛かってきた。

「我、グラマンに追尾された。振り切れない、助けてくれ」悲運の叫びを発しながら逃げまとう1式陸攻の末路はあえなく撃墜であった。

その破片が地上に降り注いだごろ零戦部隊があがってきた。グラマンとの戦闘が始まった。その上空を怪鳥のごとくB-29が通っ

ていった。しかし怪鳥は突如として撃墜された。翼をもがれ骨を砕かれどす黒いオイルを撒き散らし粉々に砕け散った。

すっきりしたシルエットに対して鷲の心を持つ機体が飛んできた。翼には日の丸が描かれていた。

外伝 第2次レイテ沖海戦4

突如、怪鳥（B - 29）が鷹に叩き落された。鷹とは烈風のことである。

「ヘイ、あれはジャップの新型戦闘機じゃないか！確かコードネームは…」 「そんな事どうでもいいから撃て」とファイバーが叱咤した。

しかし600キロを超える速度で空を駆ける戦闘機にはなかなか当たらない。「右上方だ！」 「ファオーバーが操縦士に言うなり自分はそれをめがけて射撃した。その烈風は当たったのか旋回してあさつての方向に行つてしまった。」「ジャップどもが、ざまー見ろ」と空に向かつて叫んだ。しかし下から烈風の射撃を受け機体がバラバラに砕け散った。

「オイ、このままじゃヤバイ投下して早く逃げよーぜ」「そうだな早く投下しろ」 B - 29から爆弾がバラバラと落とされる。地上が炎に包まれる。が、逃げまどつているのでまともな場所に落ちない。

ダンダンと蹴飛ばされる衝撃を感じた。「いかん右の2番エンジンが破壊された」 続いて1番のエンジンも燃え出した。やがてB - 29は推進力を無くし地上に落下していった。地上ではむごたらしいことにレイテ島の日本兵から銃剣で刺し殺された。

結果としてこの空戦でアメリカ軍は戦闘機24機、艦上爆撃機35機、B - 29は40機全てが叩き落された。これに対し日本側は零戦8機と烈風2機と一方的なものだった。また日本側はパイロットが3人レイテ島に不時着した。

「ジャップ共が！我が機動部隊が沈めてくれるわ！」とハルゼーは自軍が受けた被害を見て頭に血が上った。そして2時間後、戦闘機84機 雷撃機120機 爆撃機36機がアメリカ偵察機が発見したという場所に向かっていった。ちなみにそのアメリカ偵察機は途中で通話が途絶えたので撃墜されたのだろう。

〇七五五 やや日が昇り始めたころアメリカ攻撃部隊に発見されたのは空母信濃と戦艦長門そして駆逐艦潮 回風 花信風の3隻だった。これを発見したのは戦闘機24機 雷撃機36機 爆撃機12機の攻撃隊だ。

「おらよ」と米軍爆撃機が250キロ爆弾を信濃に長門に叩き落した。6機の爆撃機が襲った結果長門の艦橋に爆弾が見事直撃した。艦橋のガラスが割れたが戦闘には支障が無い。いや無いはずだった。長門の防弾能力は世界水準を超えているが、艦橋に直撃したため長官以下の数名が死亡、また他のものも大小の怪我を負った。

一方信濃はなんと爆弾をはじき返した。信濃は500キロ爆弾をおとされても耐えられるように設計されていた。その結果がこれである。2発の爆弾ははじき返され空中で爆発した。被害は特に無かった。せいぜい甲板が汚れたくらいのものだ。

これを見た雷撃隊は俺達の番だといわんばかりに襲い掛かった。まず6機が右からそしてもう6機が左から降下しながら襲い掛かった。ここで新鋭駆逐艦が機銃をふりかざし乱射した。乱射というより統一されているから射撃という方が正しい。2つの魚雷が爆破された。かかさず4式弾も海中に投下される。そして回避により12発の魚雷を全てかわした。

「糞なんてことだ」ワトソローが呟いた。相手の損失は戦艦1隻の艦橋に1発食らわせただけで、こちらは対空気銃で雷撃機が3機

爆撃機が6機もやられている。おまけに敵の戦闘機がない。これは敵の兵力を分散させる戦略だったのかと思うと頭に血が上った。そして日本艦隊を睨んだ。「太陽より日本機が突っ込んでくる」後席のバガーが言った。「何！」太陽から突っ込んできた日本機は急降下して艦隊から離れている機体を狙い打った。黒い煙を吐きながらグラマンが2機 コルセアが3機 爆撃機4基 雷撃機が1機が海に向かって墜落していったり、空中で塵となったりした。

すべて烈風だ。信濃に向かっていた部隊で、来たらこの戦いに遭遇したわけだ。36機の烈風はグラマンと戦い始めた。しかし第1次レイテ沖海戦のことで実力をしているパイロットは逃げ出した。自動空戦フラップによって抜群の機動能力を得ている烈風は宙返りしてアメリカ機を撃墜していく。

雷撃機や爆撃機が重い搭載物を海中に捨てて逃げ出した。しかし烈風は速度600キロを軽く超えている。先回りしていた12機の烈風と後ろから来る烈風によりなすすべなくほとんどが撃墜された。このアメリカ攻撃隊はワイルドキャット3機 アベンチャー雷撃機2機を除いて全滅した。

また他の攻撃隊は主力艦隊とぶつかった。烈風と零戦が60機が迎撃してきた。あらかじめ上空で待機していた日本航空隊になすすべは無かった。たちまちアメリカ機は落ちていった。機体の損失よりベテランパイロットの損失のほうが痛いであろう損害を負ったアメリカ軍が得た戦果は駆逐艦2隻に至近弾清風が中破であった。

ハルゼーは「どうなってる！」と艦橋で怒りをあらわにしたそうだ。この昼前までの攻撃で攻撃部隊は戦闘機が43機 雷撃機が81機 爆撃機29機が戻らなかった。戦闘機は出撃前の半数以上が、

雷撃機は実に67パーセント爆撃機は80パーセント以上が損害を負った。

そうしている間に、「日本の艦隊がこちら向かってきます」とハルゼーに報告した水兵は怒鳴られた。「だからどうした！ さつさと戦闘準備しろ！ ジャップの猿どもを殺せ」もはや正常な精神状態ではなかった。

外伝 第2次レイテ沖海戦5

ハルゼーが神経を狂わせていたところ日本艦隊は動き出した。

戦艦大和が堂々たる姿で海を進んでいく。その前方には巡洋艦の摩耶。斜め後方に鳥海と高雄が後を追っている。そして左横には新鋭駆逐艦の寒風と時波が付いている。また右横には満潮 朝霜 清風 雪風そしてその前方に矢矧が付いている。清風は上層構造物が破壊されたが、水線下に被害が無いため速力の衰えは無い。

他の空母部隊は遠方に金剛と共に置かれている。常に空中に6機が敵の襲撃避けのため飛んでいる。

またこの群とは別に空母信濃と長門そして駆逐艦2隻の軍団があった。烈風を従えているこのマンモス空母は南側にいた。そして敵を求め北上していった。

その頃、レーダーで日本艦隊と思わしき部隊を見つけたアメリカ機動部隊は爆撃部隊がほぼ全滅状態だ。雷撃部隊も損害が多い。また日本艦隊の襲来を予期していなかったため魚雷の数は非常に少ない。つまりは戦闘機しかない。その戦闘機も最初の4分の1以上が撃墜されパイロットの負傷や機体が使用不可まで損傷したのを除けば、半分が失われている計算となる。

しょうがない戦艦部隊で終わらせるか。「空母はもう駄目だ。南方に退避させる」ハルゼーは何と戦艦に乗り移った。空母は南方に動き出した。信濃や長門が北上しているのも知らずに。しかし軽空母のモンテーレだけは戦闘機を搭載し残った。

烈風21型は11型と違うのは航続距離だけではない。爆弾が搭載できるのだ。また速度が向上しているなどのものがある。そのため今回は爆弾を投下することも十分可能だ。

「敵部隊発見、距離4万 巡洋艦3隻 戦艦1隻 駆逐艦5隻」
米軍はやや正確に日本艦隊の陣容を捉えていた。潜水艦がいたのだ。「空母はいないのか。聞き返せ」ハルゼーが言ったとおり、報告したが空母はいないとの事だった。「恐らく後方にいるでしょう」参謀長がそういった。

アメリカの各戦艦は3時の方向に主砲を向け待ち構えていた。そして大和の方も確認していた。

「敵のマストを発見 距離3万5000メートル」いよいよ戦艦の砲撃戦が始まる。

そのころ南方では、空母信濃の彩雲が北方に向け発進された。すると「我、敵艦隊を発見 空母4隻 駆逐艦6隻の模様」空母が向かってきている。何故だ？しかし疑問よりも喜びのほうが上がった。

こちらは駆逐艦3隻と3隻少ないし、空母は4倍だ。しかしこちらには戦艦がいる。おまけに世界のビッグ7のうちの一隻だ。

信濃から烈風が青々した空に舞い上がった。爆弾装備が12機その他24機だ。そして後方から戦艦が迫る。

そしてまた話はハルゼー艦隊に戻る。戦艦3隻 巡洋艦4隻 駆

逐艦10隻 軽空母1隻の陣容である。

「距離3万です」「よし来た！日本艦隊を沈めてやれ」レーダー射撃が開始された。

日本艦隊も撃ち始めた。大和が46センチ主砲を咆哮させた。そして矢矧を先頭として満潮 朝霜 清風 雪風が続く。清風は主砲が発射できないまでに破壊されている。が、水雷にそんなものは関係が無い。アメリカの巡洋艦がいかせまいと発砲してきた。しかしこの距離では届くはずが無く悲しく水柱をあげるだけだった。矢矧の水雷戦隊は距離2万8000メートルで発射した。もちろんあたるなど考えていない。何故ならこの距離で打つには魚雷速度を遅くする必要があるのだ。

巡洋艦は有利なポジションで迎え撃つたのだが、この魚雷のせいで二つにされてしまった。

日本艦隊は一直線に突入。両側にいるのは全て敵だ。矢矧が15センチ砲を放った。計六門の主砲はアメリカ巡洋艦に直撃弾をだすにはいたらなかったものあからさまに行動を妨害していた。

そして距離2万をきった。そして両側に魚雷を各艦はなつた瞬間だった。刹那。満潮が爆発した。何か放たれたのだ。直撃したのは砲弾。口径は15センチだから巡洋艦の主砲だ。満潮はそこで停止した。

しかし水雷戦隊は挫けず逆に恨みを返すように巡洋艦部隊を襲った。片側に2隻ともう片側に2隻と駆逐艦が数隻いる。矢矧は2隻のほうに進み、半円の状態で囲み発射した。距離は1万メートルにも満たなかった。20本以上の魚雷が放たれた。どうなるかは皆さんごお分かりだろう。巡洋艦は2隻とも交わしきれず海の底へと向かっていった。沈没時間は10分以下。ちょうどその時に大和がワシントンに直撃弾を出した。

また舞台を変えて南方の戦い。

空母信濃から発艦した烈風12機は空母ワスプに襲い掛かった。駆逐艦6隻からもものすごい弹幕が放たれた。しかし命中率が3倍に増えただけであり烈風は防弾装甲をしている。撃墜は難しい。それでも2機が爆発しながら落ちていった。また制空用の烈風も高射砲により1機撃墜。しかしワスプに10機の機体が現れて爆弾を投下してきた。使用されているのは50キロ爆弾だ。案の定この程度では特に損害を受けない。爆弾は3発命中した。この爆弾は焼夷弾を改造したものであり甲板は炎に包まれた。が、艦載機はもう無い。爆弾の投下が終了すると20ミリ機銃を打ち込み帰還した。損失は10機にも及んだ。さらに使用不可の機体は4機だ。

長門がここでワスプを発見した。距離は3万をきっている。速力30ノットを超える空母に対し長門は追いつくわけが無いのだがあきらまず射撃を開始した。41センチ砲が8門咆哮。空気を切り裂く音が米空母に向かっていった。一方の米機動部隊はワスプが炎上しているのをやや気にかけてつ東側に向きを変えていた。それを読んでいた長門の射撃は見事命中した。2発がワスプから見たら至近弾だったがその内の1発はあくまでもワスプから見て至近弾であり至近にいた駆逐艦に当たった。

一発で轟沈した。さらにワスプは1発が命中した。甲板を突き破った長門の砲弾は格納庫にとび入るなり爆発した。轟！！閃光がアメリカ艦隊を覆った。艦載機はまともにならないが爆弾が少々余っていたらしく大爆発を起こした。

さらに日本駆逐艦が向かっていった。

ハルゼー戦艦艦隊

戦艦ワシントンは艦橋やマストを破壊され射撃などできる状況ではなかった。ワシントンが射撃不能と見るや大和はアラバマを砲撃しだした。大和は2発の命中弾を受けているのだが木製盤がめくれあがるだけだった。

水雷戦隊は米駆逐艦を相手に敢闘していた。さらに戦艦マサーチユセッツにも雷撃を加え大和への射撃を可能な限り妨害していた。

矢矧が魚雷を8本発射し、そしてすばやく第2発目。目標は先頭の駆逐艦だ。酸素魚雷は80キロ超え速度で、駆逐艦の艦首に魚雷が1発命中した。さらに14本が他の艦を動かす。そしてここで矢矧の船長が考えていたことが実現された。実はじりじりワシントンに接近していたのだ。そして4本が命中した。そしてただ4本命中したのでなく、2本が5秒ずれて直撃したのだ。ワシントンはのた打ち回って沈んでいった。ワシントンの船長ハワード・H・J・ベソンソンは第1次レイテ沖海戦で大和に止めをさせず、そして本海戦で命をなくした。

海戦は日本側に傾いていった。

外伝 第2次レイテ沖海戦5（後書き）

次回最終回です。

外伝 Ⅱ 終局への戦いⅡ (前書き)

最終回です。

外伝 Ⅱ 終局への戦いⅡ

戦艦大和の主砲がひっきりなしに撃たれる。アバラマの射撃のほうが正確だが、双方まだ決定的な戦果は出していない。

駆逐艦と巡洋艦の戦いは日本側の勝ちだろう。駆逐艦がすでに6隻沈められていた。また残った巡洋艦も沈没はしていないが、矢矧の砲撃が命中したりしている。

その時、大和が第1主砲の直撃弾を受けた。

閃光が艦上を1時期覆った。が、主砲は何事も無かったかのようにそこにあつた。

しかし「艦長、主砲1番砲塔旋回不能です」艦橋に緊張そして衝撃が走った。大和は46センチ砲（46センチ砲）を9門搭載しているが、主砲が1基減ると6門になる。基本的に主砲は8門以上ないと命中率は悪くなる。しかしなくなつたわけではない。旋回がないだけだ。

「全主砲砲角そのまま、俯角修正1度下げ 撃てえ」
上空では彩雲や烈風が飛んでいた。烈風はグラマンとの死闘を演じていた。

その頃長門の艦隊は、駆逐艦3隻が突撃していく。残りの空母から申し訳ないばかりの艦載機が出てくる。烈風は上空で待機している。さらに出てきたのは爆撃機や雷撃機で戦闘機はあまりいない。

新鋭駆逐艦の射撃により2機が火達磨になった。近づかない機体は烈風に食われた。

「ジャップがふざげやがって」1機のグラマンが急降下しながら射撃をした。ちょうど降下した場所にいた烈風は煙も吐かずそのまま海に水柱を上げた。爆撃機や雷撃機はとりあえず攻撃をすること

に専念したが、魚雷対策が採られている新鋭駆逐艦には効果が無く、（潮にもそれなりの改装はしてある）

爆撃機はまともには当たらない。そもそも機体が30機と少ないのが原因だろう。

それでも至近弾を出したがそれまでだ、烈風にボコボコに叩きめされた。もはや機体が無い空母部隊をかばうため、駆逐艦が動いた。しかし日本艦隊はたくみに動き駆逐艦や空母の進路を妨害させる。

長門が再び有効射撃距離に空母を捉えた。「撃て」長門の砲弾が天高く舞い上がる。そして数分後

「近弾 500 俯角1度上げ 方位角修正」長門の射撃は驚くほど正確だった。一応レーダー射撃を長門は行っている。今海戦は全ての艦がレーダー射撃をできるようになっている。とはいえまだ試作的な物だった。

「魚雷発射」潮が魚雷を発射する。アメリカ駆逐艦1隻が遂に当たってしまい、少しずつ沈んでいった。

「全砲塔、撃て」

アメリカ空母ハンコックに死への砲弾が向かっていた。

艦橋が轟音と共に碎け散った。甲板では火事が発生した。

「どうなつてやがる」ハンコックの水兵が叫んだ。レイテ湾はそろそろ日が沈みだしていた。赤い太陽が波間に沈んでいった。

「おい、その・・・お前：艦長はなにをしている？・・・どこ・・・に

いるんだ」ハンコックの水兵が腕から赤い血を噴出しながら目の前の兵士聞いた。

するとその兵士は天を指した。「艦長は死にました。私達も同じ所にいけますよ」

ハンコックの甲板では死体が転がり、艦橋などが破壊されつくした。そこに駆逐艦が肉薄してきた。あくまでも駆逐艦の潮だが。

魚雷が3本放たれた。その3本の魚雷は静かにハンコックに延びていった。

そのころ大和のほうの水面にはアメリカ艦隊は駆逐艦4隻と戦艦と空母が遁走し、水面には血が付いた残骸がスコールや雨により洗い流されているだけだった。大和の至近弾はそのまま水面を進んでいきアバラマを沈めたのだ。スコールが来なかつたら全滅できていたかもしれない。

とりあえず我々は勝った。今回水雷戦隊は大戦果を収めた。しかし戦艦や航空の勝利も大きなものだった。

第1次、第2次レイテ沖海戦で我々は勝ったのだ。そして長門のほうより「我、敵空母2隻 駆逐艦ヲ6隻撃沈セシメタリ。我方ノ損害八航空機10機と極メテ軽微ナリ」

「勝った」皆がそう叫んだ。「万歳」との声も聞こえた。

大本営発表 「昨日12月25日 比島の航空隊及び機動部隊はアメリカ機動部隊及び陸上航空兵力と交戦状態に入れり。我が航空隊は奮闘しB-29を40機撃墜セシメタリ。又「レイテ」灣に侵入を企圖せる敵船團並に護衛部隊を攻撃し左の戦果を得たり。駆

逐艦8隻撃沈 1隻撃破 巡洋艦4隻撃沈 航空母艦2隻撃沈 戦艦2隻撃沈 1隻大破 航空機200機撃墜破 我がほうは航空機30機喪失するも喪失艦無しと一方的な戦闘を展開セシメタリ」

この報告に日本中は歓声に沸きかえった。

アメリカ側は太平洋に持てる海軍全ての戦力のほとんどを喪失し、マリアナ島が空襲を受けてもおかしくない状況に入った。しかし兵力はもう少ない。ヨーロッパ戦線から海軍力を抜き出すしかない状況に入った。

その後、最悪な予想通りマリアナ島は空襲された。僅か1ヶ月後のことだった。B-29の戦略爆撃隊は壊滅的な損害を受け、作戦の遂行は不可能となった。また陸軍のロケット攻撃機がアメリカ軍をなぎ倒していった。

一方の日本側も80機ほどの航空機の損害を受け、これ以上の戦争継続は困難となった。

そこで講和に入った。アメリカは単独講和に応じ、イギリスもこれに同意した。イギリスが同意したのは、アメリカがヨーロッパ戦線からアメリカ軍がいなくなると状況が悪くなるからだ。

ソ連はドイツを目指していたが、米英が日本の講和に応じると戦闘を停止せざるを得なくなった。

1945年1月15日 終戦。

その日空は青く澄みわたっていた。

外伝 Ⅱ 終局への戦いⅡ (後書き)

いままで全ての話を読んでくださった方に感謝します。半素人意見も入っている小説に目を通し、感想や評価をつけてくださりありがとうございました。

零戦43型 烈風 4式弾 4式90砲身30ミリ機銃等、開発計画があったものや無かったものを架空兵器として登場させていただきました。皆様どうでしたか？

面白かったといっていたら、とてもうれしいです。

しかし福島のほうは早く復興作業が進むことを祈るばかりです。

序（前書き）

艦首に菊の紋

初のネット投稿小説のリメイク版を作りました。

最初から最後までストーリーリアルパクリと言っことはないので大丈夫です。

リメイク版をどうぞお楽しみください。

何で前のページで書くかって？さあ？

序

この日の海はいつもに比べやや時化していた。波は荒く船を揺らす。しかしこの程度の波は問題ない。この船はどんな嵐の中でも鉄の暴風の中でも沈まない戦艦だ。そう不沈戦艦だ。

巨体の船体に装甲が張られ巡洋艦程度の主砲ではびくともしない。その巨砲は敵をなぎ倒し海の底に沈め、副砲や対空砲なども積み重ね、それらを指揮する艦橋がそそり立つ。マストが勇ましさをます。それが戦艦だ。

この船は日本の本の皇国の四方を守るべく生まれてきた。

この巨大戦艦の名前は一般国民は知らない。機密保持のためだ。その名を” 武蔵”

1943年1月18日 航行テストや射撃訓練等を終え呉を中航した。

同行するのは空母瑞鶴 瑞鳳、軽巡洋艦神通、駆逐艦4隻の武蔵あわせ計8隻だ。

この年急激にアメリカの潜水艦による通商破壊作戦が激しさを増し内地に資源が入りにくくなっていた。そんな状況下で武蔵は海を堂々と進む。

日本は1939年中国軍と衝突するが現場の将校などに自重を呼びかけることでなんとか戦闘が停止した。

しかし1941年に遂にアメリカの態度に痺れを切らした日本はオアフ島の真珠湾を大空襲。その場のアメリカ戦艦を全て撃沈又は大破させた。

そして航空機をすべて撃墜、地上破壊した。

それでも機動部隊はさらに暴れ回った。空母ホーネットを探しまくりこれを発見し撃沈した。そして珊瑚海で敵空母1隻を撃沈、1隻を大破させた。

そしてミッドウェー海戦で4隻の空母でミッドウェー島周辺で赤城を失うもヨークタウンとサラトガを撃沈せしめた。

さらに同時刻アスカ島・キスカ島に上陸し占領。ミッドウェー島を占領しこれを「水無月島」と名づけた。

ここで講和を結ぶチャンスができたと言部は思った。山本五十六もその1人だった。

が、講和条件を作成している途中山本が内地に戻ったとき暗殺された。さらに講和賛成の他2人が暗殺された。陸軍は徹底的に暗殺者を探し出し暗殺グループ6人を死刑にしたが、これをチャンスと攻撃派が一気にアメリカ本土までも上陸してしまおうとあほな考えを出した。

しかしこれを抑える力が無くなった海軍は講和のチャンス逃してしまった…。

1942年8月に入りハワイを占領し、ガダルカナルも占領した日本軍にアメリカの反逆が起こった。

それが通商破壊作戦だ。アメリカ軍は潜水艦を60隻送り込みわが国の輸送船を3万トン撃沈させた。

さらに1943年アスカ・キスカの日本兵は玉砕した。そしてミッドウェー島の守備兵2800人と零式水上戦闘機12機 零戦6

0機 隼12機 鍾馗60機 攻撃機100機が置かれていたがこれをアメリカ海軍が持てる戦力で壊滅させてしまった。空母2隻 戦艦1隻 巡洋艦2隻 駆逐艦20隻撃沈もしくは損傷 輸送船約60隻を沈め航空機を200機撃墜、島で敢闘しアメリカ軍に水兵1万、上陸兵士6000名もの死傷者をださせたが陥落した。

太平洋での戦況はいまだ日本側が有利だが、アメリカ海軍は戦力を増強しつつある。

戦局は日本が不利になるのは見えていった。

序（後書き）

久しぶりです。

最終話を書いたときこんなことするとは思ってませんでした。まあ読んでくれた方もこれが続けるとは思ってたなかつたでしょう。

さて次第にギリ貧になっていく日本どうなるのか？

出撃の夜

1月29日 日本軍は次の米軍の侵攻場所はガダルカナルと認識していた。ガダルカナルはミッドウェー海戦の2ヶ月後にガダルカナル飛行場が完成した。

戦闘機60機 攻撃機・爆撃機60機とラバウル航空隊がここにいた。さらに湾には海防艦4隻と駆逐艦2隻と水雷艇が6隻がいた。

そして潜水艦の基地がありその潜水艦は8隻もガダルカナル周辺のソロモン海に配置されていた。守備兵は陸軍第2師団18000名と戦車50輛、火炮200門と大体こんなところで決して守りが薄いというわけではない。

ただし輸送のほうはガダルカナルの海軍では護衛が足らず1式輸送機が運んでいた。零戦が24機ほど護衛として燃料や食料を運んでいた。

そして俺はそんな搭乗員が空から見ている船にいた。俺は只一だ。前回までの小説を読んだ人は分かるだろう。

日の丸が翼に描かれている航空機を見上げながらデッキを磨き上げていた。

このたび武蔵と空母2隻及び巡洋艦1隻、駆逐艦4隻を引きつれ夜中出撃するのだが、長官から言われたのは敵をただ発見しだい撃沈もしくは撃墜せよとのことだった。

目的場所も知らせてくれないとは変な作戦だ。

そのころ大本営では議論が分かれたいた。何を？今後の作戦だ。

米内を初めとして山口多門は空母を量産して航空機で守るときは守り、攻めるときは攻めて敵の進撃を止めさせたところで講和を図るべきとのことだった。

対して豊田副武を初めとした方は、戦艦などを作り向こうに可能な限りの損失を出させ有利な状況をつくろうとの考えだった。いままでも山本五十六のおかげで若干のバランスが保たれていたが、暗殺された時から攻勢派が一気に発言を強めたのだ。

現在日本にある戦艦は12隻だ。大和、武蔵、長門、陸奥、伊勢、日向、扶桑、山城、金剛、比叡、榛名、霧島である。このうち金剛級の4隻は老朽戦艦でありながら30ノットを超える速度を出せるため空母のエスコート用として使われていた。伊勢級と扶桑級は防御力、速力、攻撃力から言って旧式戦艦だった。いや実際旧式戦艦だ。長門級と大和級は速度こそ金剛より遅いが攻撃力と防御力は世界でもトップクラスだ。

そんなことは知らず俺たちは午前2時ごろ日付が変わって1月30日オーストラリア周辺まで近づいていた。

しかしまったくなんの作戦なんだ？その時だった下士官クラスの間人間が来た。なるほど今回はオーストラリアの砲撃、敵艦を見つけたら撃沈する作戦だったか。

そして遂にオーストラリア海軍がいてもおかしくない海域に侵入した。

「敵艦影見ゆる 距離3万」遂に見つかった。

「主砲射撃用意、甲板上の兵士は中に入れ」俺たちはすばやく艦内に入った。

「距離再測定 2万7000メートル 12時の方向 甲巡（重巡洋艦）と思われるもの3隻」

次の瞬間武蔵は身震いした。主砲が発射されたようだ。46センチ主砲だ。重さ1.5トンもあるのが空中を飛行して敵艦にぶち当たるのだ。

水雷戦隊が前進していく。武蔵の射撃は外れた。「遠弾1000メートル 仰角修正 撃てえー」船が再び身震いする。

夜の海に武蔵の主砲の音が鳴り響いた。一方の水雷戦隊は距離2万のところで一斉に魚雷を発射した。

オーストラリア海軍の陣容は実は重巡洋艦は3隻も無かった。重巡1隻 軽巡1隻 駆逐艦4隻だった。哨戒中だった船のレーダーに武蔵以下の艦艇が移りこの6隻が向かったのだ。しかしなんと相手が悪い。

オーストラリア海軍も夜中戦うとは思っていなかっただろう。しかし日本海軍は代々自慢の水雷隊の訓練の成果を見せた。突然オーストラリア軍の重巡キャンドラーが左舷中央部に航跡をみせない酸素魚雷を食らわされた。キャンドラーは速力31.5ノットの速力で多種多様な兵装を持っていた。多種多様な兵装だが数は少なかった。その分快適な移住能力を持っている。

そのためやや防御力は高いがさすがに魚雷を受けて意気揚々としてられる訳がない。

戦闘能力を失ったキャンドラーは速力10ノットまで下がった。そのキャンドラーを無視して水雷戦隊は駆逐艦と戦闘を開始した。

一方の軽巡洋艦シドニーは主砲を撃っていたのだが武蔵の前には悲しく水柱をあげていた。武蔵は相手が巡洋艦と分かるや、距離を2万1000メートルまでに近づけた。ここまでくれば命中率は飛躍的に上がる。恐らく30パーセント近くだろう。

艦上で火薬が光りその爆風で1.5トンの主砲がシドニーに向かっていた。

それは水雷戦隊の度肝を抜かすほどの威力だったという。シドニーの船体は真つ二つに折れもうもうと煙を吐きながら沈んでいった。

オーストラリア駆逐艦アレックスが救助に当たろうとしたときは時は既に遅かった。

オーストラリア駆逐艦はその後も戦闘を続け駆逐艦清水が魚雷を受け静かにゆっくり黒い海に引きずり込まれていった。

しかしオーストラリア海軍もそこまでだった。武蔵の副砲や雷撃に襲われ遂にソロモン海に没した。

キャンドラーは武蔵より停止を求められ軽巡神通と共にラバウルまで航行していった。また途中で連絡をしてトラックより駆逐艦2隻が駆けつけ無事にたどり着いたようだ。

そしてこっちは砲撃戦が終わり甲板に上がった。主砲の近くのガードレールが曲がり木工板がめくれあがっていた。それほど強力な爆風なのだ。

〇三四〇 戦闘のせいで余計な時間を使いすぎた。オーストラリア

海軍が報告しているから敵の迎撃があるだろう。進むかどうか有馬艦長は考えた。「退いて残るなら散って大勝利を収めるか」参謀とも話し遂に武蔵は向かいだした。

○四〇〇 オーストラリアの領海内に入った。速力22ノットで武蔵以下5隻は進んでいった。空母は何もしていないで不服そうに走ってるように見えた。

俺を含め全員は眠さも忘れ敵の了解に侵攻していった。

オーストラリアの陸地を遂に測距儀が捕らえたらしくまた俺らは甲板下に移動した。46センチ主砲の射程距離は4万1000メートルを超える。

こんな距離では敵艦に当たらないが艦砲射撃では関係ない。この砲撃のため武蔵は3式弾を用意してきた。3式弾とは対空砲に開発されたのだが、皮肉にも陸地に対しての効果のほうが大きかった。

3式弾は角度10度に焼夷弾子をばら撒いた。砲撃したのはダウインである。そして時間は5時ごろになった。

武蔵は射撃を停止した。そして空母より攻撃隊が発進した。夜も暗いのにご苦労なことだ。

出撃したのが零戦三二型や新鋭爆撃機彗星や九九艦爆など計100機がとびだした。しかし盲目爆撃といっても過言ではない。

しかしこの爆撃でオーストラリアが受けた被害は甚大だった。飛行場を3ヶ所炎上させ40機を灰にした。さらにドッグにあった輸送船3隻撃沈もしくは大破し他の艦艇も7隻が沈んだ、対空陣地3ヶ所、娯楽施設7軒、民家を1軒破壊した。

そして石油タンクを大爆撃した。ようやくオーストラリア軍の対空砲が唸ったが遅かった。

ここで日本軍が落としたのは爆弾だけではない。闇夜に白い花がパツと開きヒュルヒュルと降下していく。その数30。

果たしてなんだったのか。

帰ってきた攻撃隊は97機だった。3機の内1機から「我、母艦を発見できず敵軍事施設と思わしき場所に突入す、天皇陛下万歳」とのものだった。他2機は九九艦爆だ。武蔵以下艦艇は無事に帰還トラックに帰還した。

俺たちはその日宴会が開かれ大いに楽しんだ。そこで竹浜と健太ともであった。

出撃の夜（後書き）

どうでしたか？

あ、そうそう実史ならキャンドライーやシドニーはとっくに沈んでます。

オーストラリアに大損害を与え凱歌を上げた連合艦隊。キャンドライー拿捕、5隻の軍艦を撃沈、他の艦艇10隻撃沈もしくは大破。飛行場炎上させ軍用機を破壊。

白き花はいつたいたいなんだったのか？次回に続く。

来襲の予感

1月31日 「派手にしてくれたもんだ猿どもは」ここはオーストラリアで瓦礫の片づけをしている兵士などがいてとてもやかましく文句を言っている。

その時豪軍が訓練時に聞くいわゆる発砲の音が聞こえた。「おい何処の誰が撃ったんだ」「お前か?」「んな訳ねーだろ」兵士がふざけて撃ったとしか考えられない状況のため指揮官も呆れていた。

「なんだコブラでも出たのか」その時だったトラックが慌しく動き始めた。

「誰が運転してやがる。ヤクでもきめたのか」行きなり豪軍を跳ね飛ばし始めた。「あいつは気が狂ってるのか!」兵士は絶叫の声を発しながら逃げそして退かれていった。

「くそこつちに逃げる」数名の兵士が瓦礫の山を越えてトラックから逃げたときだった。99式小銃を持った日本兵が5人ほど目の前に出てきた。「ジャップ!」気づいたときに3人の兵士が即死し残る2人は臓器をやられ虫の息だ。「なんてこつた」薄れゆく意識の中で豪軍兵士は何か熱いものが頭をえぐったという感触を味わい死んでいった。

この日瓦礫撤去や不発弾処理をしていた豪軍に日本の伏兵が襲い掛かった。前の晩に降り注いだ白き花とは落下傘だった。

食料はわずか2日分で手榴弾2個、小銃一丁と装備もやや少なかつた。だが防弾装備については1部の兵士は亀の甲羅のようなものを背負っていた。これは試製亀甲型防盾と呼ばれ本来はトーチカ陣地などの突破に使用される。

試製というのは名ばかりで実戦でもつかわれている。重量は30キロとやや重い装甲厚は6ミリで小銃弾程度なら跳ね返せる。今回日本兵はこれを隠蔽に使えないかということで1部の兵士にこれを装着させた。降下するときはさぞかし不安だっただろう。さらに残りの兵士には九三式軽防盾というのを渡していた。これはその名のとおり盾のようなものだ。普段は背中に背負っていて打ち合いになれば前に持っていていき、盾にのぞき穴があるからそこから撃つ。装甲は3ミリだが重量はわずか3キロだ。

この2パターンの兵士はその後、殺した豪軍兵士の軍服を着て内地に入っていた。

「どうだ豪軍攪乱作戦のほうは」陸軍の山下奉文は参謀に尋ねた。「まだ情報は入っていませんが少なからず損失を出していると思われます」「豪軍の動きがなくなればソロモンは対アメリカ陣地として立派な働きができるはずだ」果たしてこの作戦は正しかったのか？

201

その頃俺たち武蔵の乗組員は酒を飲んでた。やや前線にいながら酒が飲めるとは幸せだ。「おいおい只一だったかなお前もこつちこいよ」と10人くらいの集まりがあったところに俺は誘われた。

「俺は竹浜お前と同じ弾薬補給係だ。いや何回もあつてるから顔くらい知ってるだろうけど」「で、こいつが健太だ」竹浜という男が自己紹介と友人の健太という新しい友人を紹介してくれたそして竹浜は「貴様は只一だったかな」と聞かれたので「そうだ」と答えた。「貴様」とは今でこそ

悪口のように扱われているがこの時代は同僚などで使われていた。さらに前では目上の人に使う敬語だったそうだ。

その後は1時間ほど語り合い交流を深め寝室に戻り寝た。

「何、日本兵がわが軍に変装し工作を行っているだど!!」オー
ストラリアの提督アレグザンダー・ホアラスヴンは驚きの声を上
げた。「で、被害などは出てるのか？規模と場所は？」若干取り乱
している提督に対して慎重に言った。「はい現在敵は空爆したダー
ウインにいます。潜伏兵の数は50名もいないそうですが、わが軍
に化けて既に100名に被害が出ています。またトラック等が・・・
」話している途中に「それを今何人体勢で搜索している」「瓦礫撤
去などを中断させ1個連隊で搜索させてます」「分かった。1人残
らずやるんだ。捕虜がいたら連れて来い」「分かりました」連絡員
が去ると、ホアラスヴンは怒りを机にぶつけるかのように力任せ
に殴った。

その頃アメリカではルーズベルト大統領が満足そうな顔をして書
類を見ていた。「これで日本は後1年で降伏させれるね」「もちろ
んです」「マーシャル参謀長もうなずいた。」「フフ、空母7隻 護衛
空母20隻 艦載機1100機 戦艦8隻 巡洋艦20隻 駆逐艦
60隻これで攻撃か」「はい無効化させこの島に上陸し、1週間で
占領します」「マーシャル参謀長が胸を張っていった。「死傷者はど
れくらい出る？」「ルーズベルトが不安そうに聞く。「1万2000
と思われます」「そうか可能な限り少なく収めよ」「了解していま
す。猿どもに正義の鉄槌を食らわせますよ」

「米軍はそろそろ動くだろうね。侵攻場所は何処だる思う」「豊田
副武海軍大将が尋ねた相手は山口多聞だ。「ソロモンのラバウルや
ガダルカナルを占領し島渡りをしてくると思います」「そうすると豊

田はわしもそう思っていたが…神重徳を知っているだろう」「はい、何か敵が奇策でも」「そのとおりだ神はなんとサイパン島に敵は来ると考えているそうだ」「サイパンですか」「そうだ、サイパンをとってラバウルやガダルカナルは海上閉鎖で無力化させるつもりだろう。ラバウルはともかくガ島は食料が自給できないそうでないか」「長官は私に何をやれといおっしゃるのですか」「南雲機動部隊はサイパンに送るそのため、ソロモンで敵の航空兵力を撃退してもらいたい」

そんなことも知らず俺は元気に訓練をしていた。

来襲の予感（後書き）

南雲機動部隊の援助が得られないまま山口はソロモンの航空兵力を任された。

そこに米軍の艦隊が迫っていた。

死闘ソロモン航空隊

「電探に感”大”です！」

ガダルカナルで警報が鳴った。

零戦が慌しく滑走路を蹴り飛ばし空中に舞い出た。爆撃機や雷撃機は600キロ爆弾や800キロ魚雷を抱いて勇ましく空を航行した。

さらにラバウルのほうでも敵機の来襲が確認された。ラバウルのほうには200機以上の敵機が向かってきたらしい。

つまり、こちらにも200機ほど来る。可能性はほぼ100パーセントだ。

敵空母は恐らく正式空母5隻前後、いやもつといるかもしれない。護衛の戦艦が4隻はあるだろう。

さらに巡洋艦や駆逐艦そしてこれだけの艦隊だから補給船などもついているだろうからすべてを合わせると50隻はかるく超えてるだろう。

さらに陸上では対空戦闘の準備がされていた。地上の対空砲や対空機銃が空を睨んでいた。

12機の零戦32型が1式陸上攻撃機や銀河爆撃機が敵艦隊目掛けて出撃していった。

一方基地の防衛は零戦32型12機 1式戦闘機「隼」12機

雷電12機 二式単座戦闘機「鍾馗」12機

実は他に哨戒機等もあるのだが戦力として計算できるのはこれくらいだろう。

敵機は80機のF4FとF4UやTBSアベンチャー120機の計200機の編成隊が飛んできた。

雷電が持ち前の重装備で敵機を破壊していく。零戦や1式/2式戦闘機が持ち前の機動

性を生かして敵の後ろに付き機銃を放つ。先頭を進んでいた敵機2機はいつきに火に包まれた。

海軍機の20ミリ弾がアベンチャー雷撃機に吸い込まれていく。黒煙を吹き上げキラキラと破片となり炎をボオと吹き上げると機首を下げながら空中分解していった。

陸軍機の13ミリ弾がワイルドキャットに吸い込まれる。抜群の機動性をいかしてワイルドキャットの後ろに付くとババツとオレンジ色の火花を銃身から吐きながら弾丸を殴りこむように撃つ。

一般的に「隼」は速度が遅いと思われるが末期の3型では零戦より性能がよい戦闘機となっている。またP-47（最も早いカタログ数値が最高速度690キロ）を異常な加速性で引き離したという。

攻撃隊はそのとき米艦隊と遭遇していた。

しかし猛烈な対空砲火がそこには待っていた。水柱が立ち機銃弾が雨のように飛んでくる高射砲弾が至近で爆発する。これは米軍が作成したVT信管の効果で敵機が横に來ると自動で爆発するのだ。

しかし数が足りない。日本攻撃隊が狙ったのは護衛空母を主体とする艦隊で水上の護衛隊も巡洋艦2隻駆逐艦8隻というやや貧弱なものである。そして護衛空母が18隻である。

そう正式空母などの艦隊はここにはいなかった。ソロモンの艦隊は唯的の航空兵力に打撃を与えるのが目的である。

話を戻す。1式陸攻は低空飛行で雷撃進路に入った。銀河が600キロ爆弾を甲板に殴りつけようとする。

護衛空母コパピーに600キロ爆弾が3機向かってきて1発が命中した。薄い甲板を突き破った後艦内部で炸裂した。缶室が爆発して火薬庫のものが次々爆発、最後には艦底に風穴を開け沈んでいった。

セント・ジヨージは魚雷1本を交わしたが2本が左舷に命中した。護衛空母は商船の改造艦だ。左に傾いたかと思うと、すぐに沈んでいった。

しかし1式陸攻は装甲があまりにも薄くすぐに火を吹いてしまった。これが後のワンシヨトライターとボロ空母の戦いである。

補給程度にしか使う予定だった護衛空母がこれほどの働きをするとは当初の米軍も思っていなかっただろう。

艦載機は30機程度で速度は18ノットの低速である。

他にはクロアタンやバーンスなどの計4隻を撃沈させハムリンとコアの甲板や艦橋などを使い物にさせなくなった。6隻撃沈、2隻大破させた攻撃隊がおった被害は零戦2機、1式陸攻13機、銀河4機が散っていった。これで米艦隊は200機の作戦を行える空母を失ったわけだ。

その艦載機はどうなったのか？

ワイルドキャットは陸上機と互角の戦いを繰り広げ数の差で有利に戦った。またアベンチャーなどもなんとか滑走路の1部を破壊し、水雷艇を1隻轟沈させた。また航空燃料の3割が消失してしまったのが1番の損失だ。

戦闘機35機撃墜確実10機不確実 攻撃機53機撃墜という大戦果を収めたがこちらの残った戦闘機は合わせて17機という有様である。

しかしあれだけの数相手にこれだけの損失で抑えたのは今後の戦果をみてもこれが最初で最後だろう。

そのころ俺たちは武蔵に乗りサイパン島の近くまできていた。

そのとき「距離2万 敵機200機 対空戦闘用意！」全員に緊張が走った。

マリアナ沖海戦「序章」

「よくひきつける」対空機銃指揮官が大声で言った。「距離1万！敵機は220機以上います」

南雲機動部隊の艦載機は哨戒中の12機の零戦だけだ。500キロ超の速度で零戦は迎撃を始めたようである。しかしF6Fに阻まれ攻撃隊は機動部隊に集中した。そして本艦にも

現在の艦隊編成は

空母「加賀」「瑞鶴」「瑞鳳」「蒼龍」「飛龍」

軽空母「龍驤」

戦艦「大和」「武蔵」「長門」「陸奥」「金剛」「榛名」「比叡」「霧島」

重巡洋艦「青葉」「衣笠」「高雄」「愛宕」「摩耶」「鳥海」

「妙高」「那智」「足柄」「羽黒」

軽巡洋艦「阿武隈」「能代」

駆逐隊「藤波」「浜波」「玉波」「早波」「長波」「朝霜」「

岸波」「沖波」「島風」

「陽炎」「不知火」「秋雲」「霞」「霰」「満潮」「野

分」「山雲」「谷風」「浦風」

「浜風」「磯風」他13隻

給部艦「速吸」「日栄丸」「国洋丸」「清洋丸」「玄洋丸」「あずさ丸」

以上の大艦隊だ。

「本艦に接近中のアヴェンチャー雷撃機 約60機」見張り員が叫んだ。

武蔵は増速した。

「速力23ノット」

「距離8000 副砲射撃開始！」1番、4番砲塔が旋回し15、5センチ砲弾を吐き出した。

向こう側に黒い花が2つ咲いた。そのうちの1つに1機が突っ込み翼をもがれ落ちた。

敵機はぐんぐん目の前のふくらみ始めた。

「距離5000 高角砲撃て！機銃はまだ撃つな！」1700馬力のエンジンを載せたアベンチャーが雷撃体制に入りながら不気味な音と共に向かってくる。4000、3000メートル…。

高角度砲がいつせいに射撃をし始めて10秒たった。

「減速 18ノット 取り舵一杯」5ノット速度を落とせと艦長が命じたがすぐにはとまったり方向が変わるはずがなく、武蔵はただ前に進んでいた。

「距離3500メートル」「よし撃てえええ」
格機銃からオレンジ色の線をひきながら敵機に向かっていった。25ミリ機銃や13ミリ機銃が騒音レベルの音を発しながらただただ銃身から弾を吐き出していた。

距離1500をきったところからアヴェンチャー数機が黒煙を吐き出した。

敵機が距離1000メートルを超え6機が魚雷を海中に投下した。

6本の白い線を引きこちらに向かってきた。しかしこの部隊訓練がそこまでいき通っていないかったのか2本はそのままどこかへ行っ てしまい、1機は放った時の高度が高くどこかへ飛んであさつての方向へモーターが続く限り水中を走っていった。

3本はうまくことが運べば10秒後には命中する。

「副砲 俯角5度 砲撃開始」副砲が斜め下に向け15、5センチ

子弾が放たれた。機銃が俯角で魚雷を狙い打つ。同時に船がようやく動き始めた。速度を落とすのは舵を効きやすくするためだ。3本のうち1本回避1本爆破。

しかし1本が分厚い装甲で跳ね返すような角度で魚雷が衝突。左舷中央部に命中。マストに近づくような水柱が立ち上ったが艦はそれほど揺れず、直撃弾を受けた場所も少しゆがんだだけで何の被害も無かった。

「敵魚雷命中するも水平線にわずかなゆがみが発生しましたがその他被害はありません」第1艦橋に報告をすると「すばらしいな」と艦長は感心した。

第二艦橋にいたっては「さっきの揺れは主砲の発射か？戦果はどうだ」と魚雷命中を主砲の発射と勘違いしていたようだ。

その会話が上で行われていた時俺たちは必死に射ている機銃員に弾倉を運んだ。そのあいだに船が右に行ったり左にいたり大忙しだった。

突如警告ブザーが鳴り響いた。シールドが無い機銃員と俺たちは中に入った。目の前の機銃員が照準用のキャップをもってあわただしく甲板下に移動した。

内側はさほど音がしない。まあ機銃員が中にもいるものもあるのだろうが。警告音が鳴り機銃員が中に退避したのは主砲の爆風で吹き飛ばないようにするためだ。大和の主砲の爆風を受けたら死ぬか重傷を負うのは必至である。機銃員が照準用のキャップを持ち込んだのは出しておくと壊れるからだ。

「主砲3式弾 砲撃開始」1、2、3番主砲は46センチ砲弾を9発上空に初速780キロでたたき出した。すかさず俺たちは外に

出る。

敵機の攻撃は終盤であったため主砲を打たれるなり敵はとっとと逃げ出していったそうである。

俺たちは甲板上で空を睨んだ。空母から慌てて零戦が追撃に出たが遅いだろう。

そしてこのタイミングで空母がだした偵察機から敵艦隊発見との報告が入った。

ちなみに今回の戦いで撃墜した敵機は30機程度だったのに対し、哨戒中だった零戦8機が撃墜 4機も大破しパイロットは6人負傷 3人死亡（行先不明）だった。

さらに空母蒼龍が甲板に500キロ爆弾を2発受け大破した。さらに零戦22型を37機 99式感情爆撃機18機を損失してしまふ結果となった。（幸い弾薬庫まで行かなかった）

また霧島に1本の魚雷と爆弾2発が命中し大量の浸水が生じている。また3/4番砲塔はぐしゃぐしゃに潰れてしまっている。

他に駆逐艦満潮が大破している。この3隻は駆逐艦4隻と共にソロン沖バチャン泊地に行った。

予想外の損失だが戦いはまだ始まったばかりだ。

マリアナ沖海戦「序章」(後書き)

駆逐艦少々短縮してます。すみません。

マリアナ沖海戦「1」(前書き)

実史とエセックス級空母の就役が1年ほど早かったり性能が違います。

マリアナ沖海戦「1」

日本艦隊を襲ったのは「エセックス」「ヨークタウン」「イントレピッド」「ホーネット」「フランクリン」「タイコンデロガ」「ランドルフ」「レキシントン」「バンカーヒル」「ワスプ」「ハンコック」の新鋭空母11隻だ。

排水量 24500t

全長232メートル 全幅30メートル 速力32ノット

連装38口径5インチ砲4基

単装38口径5インチ砲4基

56口径40mm4連装機関砲4基

単装78口径20mm機関砲36基

艦載機82機

アメリカ空母は排水量の割りに艦載機が多いのが特徴だ。これが11隻だからすべてで約900機が運用できる。

1942年より開発され始め日本軍からの攻撃を一切受けずそろえることができた空母である。エセックスが就役したのは1942年の4月だった。

F6F240機 F4Uコルセア120機 アヴェンチャー雷撃

機300機 SB2Cヘルダイバー240機で先の攻撃でF6F1

3機 アヴェンチャー13機 ヘルバイダー7機が叩き落されたが、

4パーセント未満の損害である。ただ被弾した機体は60機にもおよびその内10機が使用不可として判定された。

アメリカ軍側の陣容は先ほどの空母11隻と「サウスダコタ」「インディアナ」「マサチューセッツ」「アラバマ」「ウェストバー

「ジニア」「メリーランド」「テネシー」「カリフォルニア」の計8隻の戦艦と、「ポートルランド」「インディアナポリス」「サバナ」「ナツシュビル」「ボイシ」「ホノルル」「セントルイス」「ヘレナ」「アトランタ」「ジュノー」「サンディエゴ」「ガルベストン」「ヤングスタウン」「バッファロー」「ニューアーク」「アムステルダム」「ポーツマス」「ウイルクスバリ」の巡洋艦18隻。そして駆逐艦が52隻。補給船もいる。

2月21日 一一〇〇 南雲機動部隊の偵察機が米機動部隊の所在を発見し位置を教えた直度撃墜されたらしく返信が無い。

一一三〇 日本艦隊は東に進路をとった。戦艦部隊が20ノットで東に進み、巡洋艦・駆逐艦が南東側に進路をとって空母は駆逐艦8隻と巡洋艦2隻戦艦「比叡」「霧島」を護衛としている。

一方の米艦隊は戦艦などを空母周辺におき敵空母を撃沈してしまおうという戦略である。

一二〇〇 米艦隊が第2攻撃隊を出した。F6F36機 F4U24機 アヴェンチャー雷撃機36機の計106機だ。一方の機動部隊も哨戒機を8機出して距離2万メートルを搜索させていた。

一二三〇 「距離3万 敵駆逐艦を四隻発見！」大和の測距儀が捕らえた。

同時刻 「我、敵ヲ発見シタ 敵数100機以上ト認ム 我方機動部隊トノ距離約1万メートル」との電報が送られてきた。

直ちに96機の戦闘機が迎撃に舞い上がった。

一二一〇 「距離1万5000メートル 敵艦速力18ノット
いまだ気付いていないようです」「よおし副砲砲撃開始」俺たちの
武蔵そして大和の60口径15.5センチ砲から計12発の弾が飛
び出た。

1分間に大体5発の発砲が可能である。8メートル測距儀で照準
を合わせ発射するのだ。

「仰角30度 砲撃開始」初速920メートルで敵に向かって伸
びていった。数分後：

一二三五 零戦72機が迎撃に出てきた。グラマンF6Fは戦争
中期から末期にかけて零戦をぼろぼろに負かせたが1機に付き2機か
3機で攻撃するというサッチ・ウィーブという戦法をとっており、
さらに後半は優秀なパイロットがミッドウエー海戦で失われたから
である。

しかしこの物語ではミッドウエー海戦で勝利している。さらにグ
ラマンの数のほうが少ないではないか。

たちまち激しい空戦が始まった。この零戦は22型48機と、3
2型24機だ。22型は20ミリ機関銃と7.7ミリだけでは少な
いとのことだ。陸軍の13ミリ機銃を4丁搭載していた。32型は2
0ミリ機関砲を4丁搭載している。

32型は攻撃機に喰らいかかった。200発の弾薬に増やされて
いる。エンジンの爆音に負けないほどの騒音レベルの発射音が空に
響きアベンチャー雷撃機の翼部分に打ち込む。アヴェンチャーは木
っ端微塵に砕け散った。22型はF6Fの後ろに機動性を生かすつ
く。F6Fは速度が速いため零戦を簡単に叩き落とせると思われが
ちだが急降下速度でなければ最大速度差が約50キロであるためさ

ほど有利ではない。

13ミリ機銃の線が無数に飛びあっている。零戦は300キロという低速で飛行していた。というのはあまり早いと機動性がいかせないのだ。もちろん速度で戦っている零戦もいる。そのうちのパイロットの1人栗丘は上旋回で腹に13ミリ機銃叩き込んだ。白煙を吐き出して翼がもげるとそのまま落下していった。パラシュートは最後まで開かなかった。

空母は陣形を崩さないようにし、戦艦は対空砲や副砲を真上にあげている。巡洋艦や駆逐艦も弾幕をいつでもはれるようにしている。

F6Fが全滅したとき零戦22型はコルセアを襲った。爆弾装備をしているため速力が落ちている。さすがにこれでは不利と悟つたらしく爆弾を投下して逃げ出した。アヴェンチャー雷撃機も魚雷をすててあわてて逃げていった。こちらの迎撃能力を甘く見た結果だ。

同時刻「1番艦に2発命中 2番3番艦に至近弾」あたった1番艦はひどい火災と浸水を起こした。15.5センチ砲はこの距離なら10センチ近くの装甲を貫けるのだ。

駆逐艦の砲弾が当たった場所は右舷と艦尾である。これにより速度は19ノットまでに低下した。続けて副砲弾が襲い掛かった。「3番艦に3発命中。2番艦をに100メートル以内の至近弾2発」3番艦は吃水に直撃し、約1000トンの海水をすいこみ沈没していった。二番艦は弾幕を貼り逃走を図ろうとしたがこの時距離はすでに1万3000をきろうとしていた。12発の射撃は正確に2番艦を捕らえていて水柱と火柱で見えなくなり、水柱が消えた瞬間大爆発を起こし轟沈した。金剛戦艦は30ノットの速度で駆逐艦2隻

に近づき停船命令を出しアメリカ乗員を救出した。一三二〇のことだ。

そのとき後ろ方向から航空機が飛来してきた。味方かな：「敵機だ」誰かが叫んだ。俺は新しい仲間の竹浜と健太で中央部の機銃の弾薬補給をしていた。甲板上を走り回り機銃を渡した。

：敵機はただ逃げるだけだった。そうこの敵機さつき機動部隊を襲った敵機だったのだ。4機撃墜として報告した。

一三三〇 「新たなる敵艦を発見！！距離3万7000メートル戦艦2隻 巡洋艦8隻 駆逐艦12隻 敵機も100機以上います」偵察員が叫びに近い声を上げた。敵機がいるのは分が悪い。こちらもあわてて航空支援を要請した。いやしいえば12機ほどさつきから上空を旋回しているのだが。

「猪口長官1回引きますか」「いやひかぬここで、敵を撃退する」「しかし敵機が…」と側近が言ったところで「だからなんだというのだ！私たちは日本の運命を抱えているのだぞ！ここで引くなどという臆病な考えをもっているなら今すぐこの船より降りるがいい」と怒鳴りつけた。

「主砲3式弾打ち方用意 各員対空戦闘用意！」

一三三二 敵機が向かってくる

同時刻 「いいか敵の甲板を破壊してこい それだけでいい！天皇陛下万歳」「ばんざーい ばんざーい」機動部隊の甲板上では零戦や新鋭爆撃機彗星や天山がエンジンの爆音をなびかせていた。

そして一斉に甲板をけり日本機が舞い上がっていった。

マリアナ沖海戦「1」（後書き）

こんにちは。前作「不沈戦艦武蔵沈み行く戦友」では仰角が”俯角”となってい増した……。すいません。

さて武蔵・大和の戦艦集団は新たな脅威に対抗できるのか？
そして攻撃隊の運命は？

マリアナ沖海戦Ⅱ

「ソロモン方面に送った艦隊はどうした」とアメリカ大統領ルーズベルトが30秒ほど前に、扉をノックして報告に来た連絡者に言った。

「ソロモンの敵航空隊はガダルカナル島及びラバウルまたそのほかの航空隊を8割以上消耗させ滑走路をほとんど炎上させ、敵は滑走路の修復だけに1ヶ月はかかると思います」ルーズベルトは満足そうな顔をして「それで損失のほうは：」「はい。護衛空母4隻/駆逐艦2隻が撃沈され：2隻の護衛空母が撃沈されています。また艦載機は戦闘機40機、攻撃機も含めると70機を超えます」と言った。「まあ商戦改造船や機体はいつでも作れる。だが人員的損失はどうだ」と、肉食獣の目が獲物を捕らえたような輝きを対照的に暗くしたような目で聞いた。

「水兵が約200名死亡 300名が負傷し、その内100名以上が火傷などの重症でパイロットが100名ほど死亡しています」と事務的な口調で発言をした。

ルーズベルトが唸るような口調で「そうか」と言った。係員が退室した後「300名が死亡したか」と呟いた。

一方オアフ島の港では「ジャップがライター（1式陸攻がすぐに火を吹くためアメリカからライターと呼ばれた）でPaper aircraft carrier（紙空母）を沈めるとは嫌になるな」と水兵のシーフォンスが呟くと「全くだ。正規空母の連中なんか邪魔そうな顔で見てくるもんな」と同情するかのようにはやい二ーが言った。「pepperじゃ無くてJin（神）だったら安心なんだが」「いくら待っても俺達にはHair（髪）かpepperしか来やしねーよ」と言いながら自分の護衛空母を見渡した。

そのころ武蔵は敵の空襲を受けてはいなかった。その敵機は戦闘機と偵察機で編成されていた。零戦が必死に機銃を打ちかけるが多勢に無勢。哀れ上空で散った。

敵の偵察機は高度な計器で正確なデータを送っているらしく盛んにデータ受信をしているのが分かった。対空気銃や高角砲を撃つも1発銃弾が当たっていても無視しているごとく上空3000メートルを飛来している。

そしてしびれを対空戦闘を中止して敵艦との砲撃を交えることを艦長は命じた。シールド外の機銃員はさっさと艦内へ退避した。

この時既に双方の距離は2万8000メートルを切っていた。ギリギリまで引きつけて撃つ命令を下し、武蔵以下艦は速力を25ノットで敵艦に向かった。

外でたまに海中に何か重いものが投げられたような音がし船が少々振動している。どうも敵は射撃を開始してるようである。

その時艦内からの弾薬補給の命令が出たため俺は命令されたどおり行動に出た。

「距離2万メートルです。駆逐艦を向けてきた」「よし砲撃開始」武蔵の主砲が決められた角度に動き、目標目掛けて砲弾を放った。

…数十秒後。俺はこける様な振動を感じ取った。「敵弾右舷中央部に直撃！！被害を直ちに報告せよ！！」俺はこの瞬間やられたと直感的に感じた。しかし1分後にきた情報は耳を疑うものだった。それは「被害らしき損傷なし」！！それは本当であった。武蔵は2万メートル先からの敵砲弾をはじき返したのだ。実は俺は知らないが、この時の敵の砲弾は45口径40センチ砲であるが、武蔵の垂

直装甲は角度付き410ミリ装甲で実質的には580ミリを超える防弾を備えているのだ。ちなみにこの敵相手なら1万5000メートルまで接近しても問題ないらしい。あくまでも集中防御されている部分の舷側装甲だけでの話だが…。

敵戦艦は「サウスダコタ」「インディアナ」と判明した。こちらは大和と金剛がいるため3隻だが、金剛はどうしても砲戦では劣勢になってしまふ。だが14インチ砲とて戦艦相手ならいざ知らず巡洋艦や駆逐艦相手となれば強大な戦力となしえるのだ。

そのころ前方1000メートルの地点にいる駆逐艦と巡洋艦はたぐみな雷撃で敵を寄せ付け無かった。それはともかく敵戦艦部隊は俺達が同僚の乗り組員を金剛で救出してるのを知っているのだろうか。

サウスダコタが主砲を撃つたのとまた違う振動を受けたのはちょうど一四〇〇の時である。大和の46センチ砲がサウスダコタの甲板に直撃した。弾の角度があまり無く甲板こそぶじであったが副砲が火災で使用不能に陥った。優秀なアメリカのダメージコントロールは火災を沈下させようと迅速に消化ホースの先端を火災部に向けて水を噴出させた。

同時にインディアナ戦艦が急に砲塔の向きを換えた。そして偵察機もその砲塔の方向へ向かった。「ようやく来たか」猪口艦長は低い声で笑った。

それは数時間前分離した駆逐艦と巡洋艦の水雷戦隊だったのである。

愛宕に乗っていた中岡信喜 大佐は「我に続け」と命令をして敵艦に32ノットで肉薄していった。距離2万3000メートル地点で高雄が被弾した。金属の擦れるような音がした後、爆風で30人あまりが吹き飛ばされた。高雄は多量の浸水で右舷に7度傾いたが、必死の排水作業でどうにか沈没は免れそうだった。

そして距離2万メートルで駆逐艦朝雲が沈没した。そしてその直度全艦は何かを海中に投下して反転して逃げた。それを見たアメリカ艦隊は「ジャップのブルーキラー（酸素魚雷）がくるぞ！！各艦回避運動開始」といつて機関を止めたりジグザクに動くこととしたそのときには既に遅かった。

アメリカ駆逐艦の乗員スパイナーは耳の受容器が騒音と平衡感覚を感じこれは尋常ではないと思った時、舷側には巨大な水柱が立ち上っていた。数人の兵士が空中を舞いデッキに叩きつけられ海中に投げられたとき船は2回ほど左右に揺れやがて左舷に10度ほど急激に傾いた。

マリアナ沖海戦「2」(後書き)

すいません試験中で攻撃隊の話がかけませんでしたのでまた今度書かせていただきます。

鉄の壁

一三三五 第1次攻撃隊が出撃した。編成は零戦60機（爆装24機）天山24機 彗星36機がわずか最初の天山が空中に浮いてから、10分と立たず編成を組み発動機不調で戻って

きた彗星1機を除き米空母へと突進していった。

後、1000メートルでピケットラインに接触するところでF6Fヘルキャット60機が空から降下してた。いや、降ってきたといつても差し支えないだろう。12、7ミリ機銃が雨あられと降り込んできた。零戦2機と天山一機が火達磨となり散っていった。

零戦22型や32型などがあわてて上昇する。20ミリ弾と12、7ミリ機銃のけたたましい発射音が上空5000メートルで展開された。赤い火線が交差し翼の付け根に銃弾が集中し翼がもがれ、風防ガラスが無数の破片となり飛び散り赤い液体の飛沫が飛び散った、1000馬力級の発動機と2000馬力級のエンジンの音の爆音と銃弾の交差する戦域で日本爆撃機と攻撃機はバタバタと撃墜されたが、なんとか一部逃げ切ることに成功した。

そして遂に空母郡を見つけた。”全軍突撃”を告げる報告に答えるかのように降下した。天山15機、彗星27機にまで減っていた攻撃隊は糸のごとく乱れず敵空母に向かって突き進む攻撃隊の目の前に敵の対空砲が鉄の壁となり攻撃隊を阻んだ。高射砲が至近で炸裂し、機銃が空中のバラまかれ、攻撃機は海に無数の銃弾がたたきこまれる風景が見えていただろう。

この異常ともいえる攻撃を可能にしたのはVT信管である。至近に敵がいると感知すると自動で炸裂するのだ。プラスチックの容器

という最新のな技術を投与したものだ。女性も作れるものであつたという間に必要重量に供給量が届いた。

ただこれはまだ試験的なものだった。だが防弾があまり施されていない日本機には効き目があつた。木っ端微塵に日本機が吹き飛んでいく。さすがの攻撃隊もあわてて魚雷を海中に投げ捨て逃げた。その魚雷があたるはずもない。が、空母ハンコックの左舷中央部に2本命中した。…なんと運がよいのだろう。

しかしアメリカのダメージコントロールの優秀さもいざ知らず、1000トンの浸水おこし、火災一部発生という大ダメージを負つたにもかかわらず排水作業と消火作業を同時に行った。左に10度傾斜していたが30分後には傾斜は6度にまで復元されていた。

艦爆は雪夫が乗つた彗星が決死の思いで接近し250キ口爆弾を巡洋艦に命中させた。この巡洋艦とはヘレナである。高度1000メートルから投下した。

250キ口爆弾は主砲盾と甲板の間に器用に入り込むとそのまま甲板を貫いて15センチ砲もろとも大爆発を起こさせ、ヘレナの船体を真っ二つに割つた。マストや艦橋が海に没するまで時間がかからなかった。乗員の生存は確認されていない。

さらに同じ艦爆の手長ちびは250キ口爆弾を重巡洋艦ポートルランドの煙突部分の開口部に見事に命中。火山の噴火を思わせる大爆発とともに甲板で作業をしていた水兵は吹っ飛んだ。そして煙突が倒壊し缶室の壁がボコボコに穴が開きまくり多量の浸水でそのまま沈んでいった。

他には零戦7機が後からあわただしく来て60キ口爆弾を駆逐艦に2発を与えただけで終わっている。

駆逐艦スナイパーが沈んだころだった。

俺は艦橋内での補給を手伝わされていた。いままで外が見えなかったが艦橋付属のシールドつき機銃座からは見ることが出来る。驚くほどの閃光がきらめき爆音が耳の鼓膜を突き破るかと思っただほどの大音量で爆風が甲板上を付きぬけ煙で一時見えなくなり爆風でシールドがきしむ。まあシールドといっても爆風対策であり7、7ミリ弾すら防げないだろう。ちなみに弾薬補給前に手ぬぐい、耳栓と、鉄兜を渡されていたからそれで耳のほうはカバーしている。大げさと思っていたが大げされいたため大した事はなかった。…休んでる暇じゃない！

慌てて作業を再開した。上官に見られていたら廊下で木の棒でぶん殴られていただろう。

数分後零戦が30機ほど手助けに来た。

「直撃！3発」完全にサウスダコタは大和の手中に入っていた。あまりしられていないが武蔵と大和は同一射撃が出来るのだ。つまりどちらかが片方の敵に直撃弾を与えたら2隻でその船を攻撃できるのだ。

そして一方的とも思える戦闘はサウスダコタが8発の命中弾を受け轟々と沈んで終えた。インディアナは迫りくる水雷戦隊に勇猛に射撃を繰り返すがそれもここまでだった、背後に回りこまれているのも知らず距離1万8000メートルで速力52ノットで迫りいく速度は90キロ超えである。

1分後 強烈な破壊音が3回鳴り響いた。右舷中央部 第3主砲艦橋下である。一気に2000トン近くの海水が浸水してきた。

一気に右舷に傾き機銃しか撃つ事が出来なくなつた。

さらに発電機が破損した。一気に艦内は暗くなった。そんな中で排水作業も滞り14度傾斜した時総員退艦命令が出された。

金剛は35センチ砲8門で水雷戦隊から逃げようとして混乱している巡洋艦部隊に35センチ砲を撃ちかける。自らの20センチ方にすら耐えれないような巡洋艦が35センチ砲を受けたらどうなるかなど子供でさえ分かる。

轟！！「サンデイエゴ」「ガルベストーン」「ヤングズタウン」は30分足らずで金剛から放たれた砲弾で、艦首をもぎ取られ、砲身をダンボールを大の男が殴ったかのようにひしゃげさせ、最後には船体は真つ二つになり沈没した。

さらに駆逐艦隊にも多量の損害を負わせ撃沈四隻、撃破三隻という大戦果を得た。

敵艦隊は見方巡洋艦・駆逐艦の包囲下に入っていて魚雷で大損害をこうむっているらしい。勝った。確信していた。誰もがこの時まで勝利を確信していたのだった。

その時機動部隊より「集合セヨ」との文章が送られてきた。追尾を取りやめ俺達は機動部隊の海域へと向かった。

数分前：帰ってきた攻撃隊を見て小沢は驚愕した。零戦20機 天山9機 彗星7機という悲惨さである。30パーセント程度しか帰ってきていないのである。

それは出撃前とは違う姿に成り果てていた。後部機銃座が潰れていたり、機体が穴だらけだったり、白い粉末状の気体を出していたりしていた。白い粉末状の気体とは燃料である。おそらく数機は空母に着艦できぬだろう。予想を裏切ってほしかったのだが、予想通り数機が海中に落下し駆逐艦から救出された。

「何故？これほどの損害が」日本航空隊は錬度が高いのは上層部なら誰でも知っている。それがここまでやられるとは。

アメリカの損害は空母1隻中破 重巡洋艦2隻撃沈 駆逐艦1隻小破 戦闘機39機撃墜確実。

とても損害分の戦果が得れたとは思えない。

米艦隊の反撃が始まろうとしていた。

鉄の壁（後書き）

どうもサウスタコタをまた沈めました。でも演習したらこうなるから仕方ない。

米機動部隊の襲撃

爆音が甲板上に鳴り響きながらその甲板を蹴り飛ばしながら青色で追われいかにも力強いエンジンを搭載していますといわんばかりのズングリとした機体がかみかけによらず勢いよく空に舞い上がり編成を組むヘルキヤト60機。その特徴的な翼を見れば誰もが分かるコルセア36機、そして太平洋戦争で日本軍艦をボコボコ沈めたアヴェンチャー雷撃機60機、第二次世界大戦の殊勲機として、急降下爆撃機や偵察機として第二次世界大戦のほぼ全期間において運用されたSBDドントレス爆撃機60機の合計216機が日本機動部隊目掛け空の向こう側へ飛んでいった。

そのころ日本艦隊は航空兵力を消耗したものの未だに母艦は無事だったため敵に対する再攻撃の準備に着手していた。そして既に「加賀」「瑞鶴」「瑞鳳」「蒼龍」「飛龍」の四空母の甲板上には合計で30機ほどの零戦と彗星爆撃機が24機天山が12機翼を広げていた。軽空母「龍驤」から防空のため20機の零戦が上空で旋回し、彩雲が偵察として先ほど出撃した。

小沢は自らが生み出したアウトレンジ戦法の失敗を悔いた。これは日本艦上機の航続距離の長さを生かして、敵の届かない距離から攻撃するとの物だった。こうすれば敵は我々に手をかせない。

しかし母艦の位置が正しくつかめなかったりなどの弱点がある。おまけに敵の対空迎撃によって多くのベテランパイロットが死亡しているのだ。

時間は戻らない…。それより次の攻撃のために全力を尽くすまでだ。迎撃用の航空機をこれ以上は割くことは出来ない。そのために戦艦部隊がっしりと機動部隊を守ることに下のである。

「長官。第2時攻撃隊の準備いつでも出来ますよ」部屋に報告に来た男が扉をあけるまで小沢はずっと空を見ていただろう。

「よし敵空母の位置は確認できたか」

「はい先ほど偵察機が敵の位置を確認しました。ここから真東に1500キロ離れているそうです」

「そうか」小沢は考えたまたアウトレンジ戦法をするかしないかだ。…いや答えは決まっていたのだ。

「いや東に進路向けよ。距離2000キロメートルまで接近してから攻撃隊を発進させよ」

「2000キロメートルでございますか。了解しました」男は敬礼をして扉を閉めると慌しさを感じさせる速さで艦橋の階段を下りていった。

「…まさかと思うが撤退なのか」

「そんな訳ないだろ」

と俺の間に竹浜と健太が口をそろえて答えた。なんで息ぴったりなんだ。同時に言ったのが面白かったのか笑いながら「敵と衝突するから頭数が足りないんだよ」と竹浜が言った。

「そんな訳ないだろ」と若干の笑みを浮かべて俺と健太で答え笑っていた。何も知らないまま。

「ようジャップの戦闘機はどうしてあんなに脆いんだ」

「さあな木材で出来てるのかと思っただけ、人命をどこまで粗末に出るのか競ってんだろ」

「ハハッ。ストライキでも起こせばいいのにジャップは生きているという事がわからないらしいな。よしじゃあ生きているか分からない猿どもに死と生は違つと教えてやれ」とアヴェンチャー雷撃機で

レッチャーとマルクがげらげらと笑った。戦闘の緊張をほぐすためにはこういう会話が大切だとマルクは考えていた。

一四二〇 戦艦や巡洋艦、駆逐艦が輪型陣で空母を守りながら勇ましく東に進路をとり向かっていった。

爆音が空中に鳴り響く。ブウウウ…と耳を澄ませば聞こえてくる。

「前方から敵攻撃部隊200 距離6000 二百機」甲板上で並べられていた零戦が慌しく浮き上がる。攻撃機はエレベーターで下に戻される。間に合わないのは空中退避白との命令が出た。前方の駆逐艦では対空射撃が始まった。

一定の感覚で放たれた機銃の音が聞こえる。それに対してアメリカ機も一定の間隔でプロペラを回す。それは日本機も同じだ

「1番、4番副砲 仰角30度 3式弾砲撃開始！」武蔵では副砲の砲に仰角が変えられ不気味な音を出して日本の高性能60口径の砲から15、5センチ砲弾は飛び出た。

他の艦隊からも続々と対空砲が打ち上げられる。向こうの空が黒く塗りつぶされたかと思うと赤い炎に包まれながら6機ほどの機体が落ちるのが偵察員は見えたといい。

「敵60機！こつちに突っ込んでくるぞ」偵察員が悲鳴の声を出した。「総員対空戦闘開始」

パパッと赤い閃光がきらめく。炸裂音と共に空中に赤い花が咲く。機銃がものすごい音を立てながら撃ち始められた。

「砲角40度それ2番機銃撃て！」

「6番機銃弾幕が薄いぞ！」あいかわらず指揮棒を振りながら指揮官は甲板を動き回る。

オレンジ色の閃光が俺のすぐ横の艦橋の壁に突き刺さるように撃ちこまれた。くそつたれと思いつつながら睨みつけると、味方の機銃弾が10発ほど数秒の内に命中し武蔵の目の前に高い水柱を生み出した。

一方上空では零戦が死闘を繰り広げていた。しかし数はやや同数で機動性では引けをとらない。7、7ミリ弾で数人のベテランパイロットが風防を狙い撃ちにする。その機体はそのまま飛んでいったり、機首をガクリと下げると墜落していった。

12、7ミリ機銃が邪魔なほど撃たれ日本機が墜落しおかしといわんばかりに20ミリ弾がグラマンに吸いこまれると木っ端微塵に消し飛んだ。

「右10度 敵が来るぞ 撃て撃て撃て」空母「蒼龍」「飛龍」にアヴェンチャー雷撃機、ドントレス爆撃機雷が突っ込んでくる。

「ジャップの四角い木製飛行甲板に落とせ」と爆撃機のパイロットが言うと一緒に爆撃体制に入る。500ポンド爆弾が木製甲板に叩き落されると蒼竜は悲鳴を上げて甲板がめくれあがった。対空機銃がそのためか弱まった。

「左舷雷跡4本」魚雷が4本接近してきた。

「面舵30度 回避したら元に戻せ」艦が回る。しかし30ノットの速度を出していたのだ。急速な回避など出来ない。1本が左舷後方に命中した。

金属が叩かれる音が連続で聞こえる。海水が入り込んでくる。

「後方のエレベーター破損」「機関室浸水！」被害報告が入ってくる。

斜角計の針が動く。1度、2度、3度…9度のところでとまった。

「まだ大丈夫そうだな」と艦長が呟いた瞬間、右から魚雷が迫ってきた。「しまっ・・・」完全に言い終わらないうちに立て続けに4本が命中し水柱をあげた。

「のわっ」バランスを崩し艦橋の床に倒れ伏す。船は40度右に傾いた。1分後無数の破片となり消し飛んだ。

飛龍は爆弾を2発落とされたが比較的被害は軽かった。

一方俺達のほうは100人が死亡・負傷したが魚雷の命中なく爆弾が主砲で弾かれただけに終わった。

攻撃は終了した。零戦40機撃墜されてコルセアから重巡洋艦羽黒に2発に駆逐艦陽炎に3発が命中した。羽黒は攻撃力が下がることは無かったが。陽炎は火災がとまらず火薬庫まで火が回りそうだった。いつ誘爆してもおかしくないため乗員は他の駆逐艦から救助され陽炎は雷撃処分された。

200機の攻撃機での損害は 空母「蒼龍」沈没艦長以下全員死亡「飛龍」小破

重巡洋艦「羽黒」小破

駆逐艦「陽炎」沈没

零戦40機 天山8機 彗星9機（艦内で破壊での含む）

ここに第2次攻撃隊は事実上壊滅した。

米機動部隊の襲撃（後書き）

航空兵力を大幅に消失させた日本機動部隊。
第2次攻撃部隊が出撃不能になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4394u/>

不沈戦艦武蔵 沈み行く戦友

2011年12月11日12時45分発行